

798-167

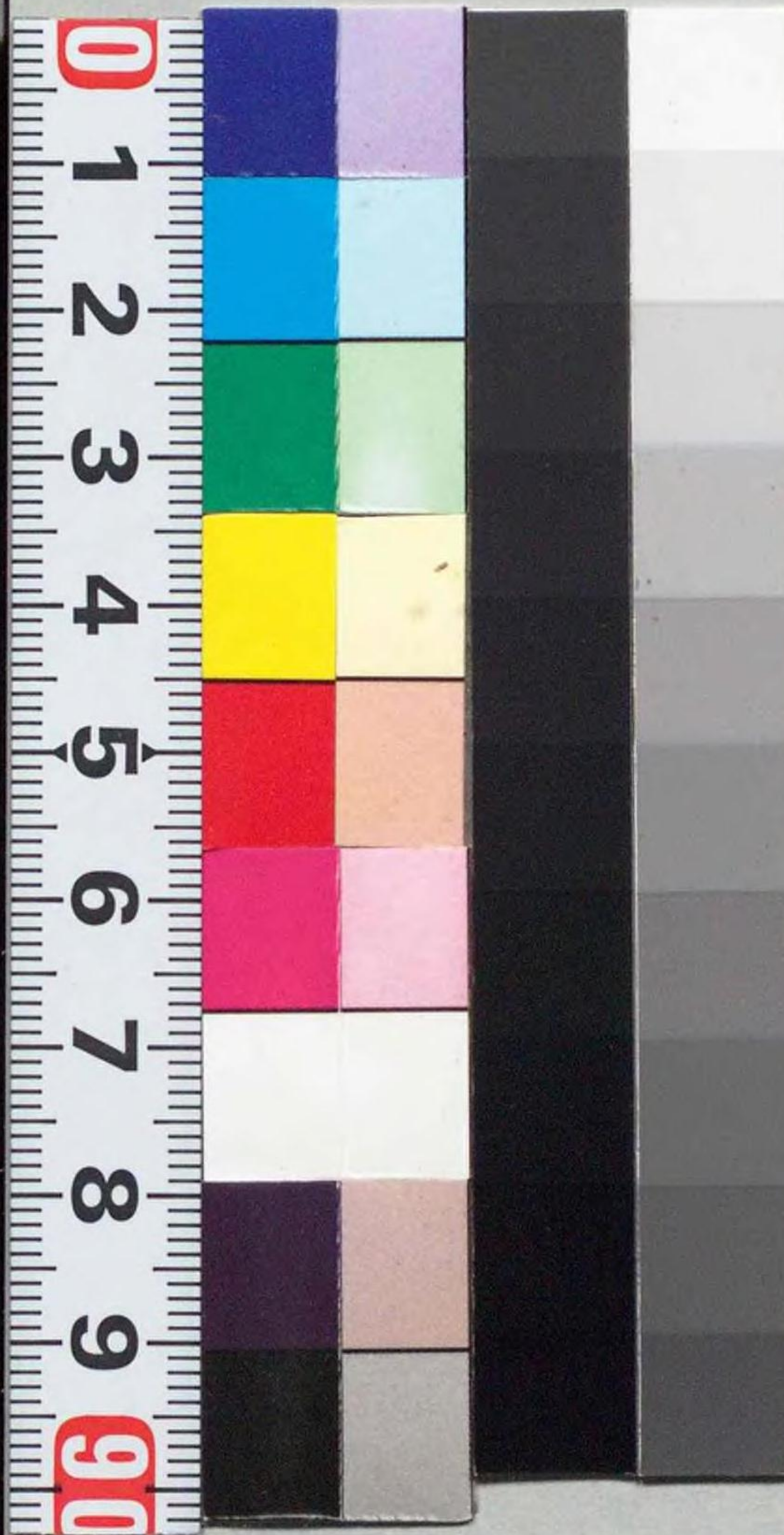


1200501607583

798

167

〇
複
写





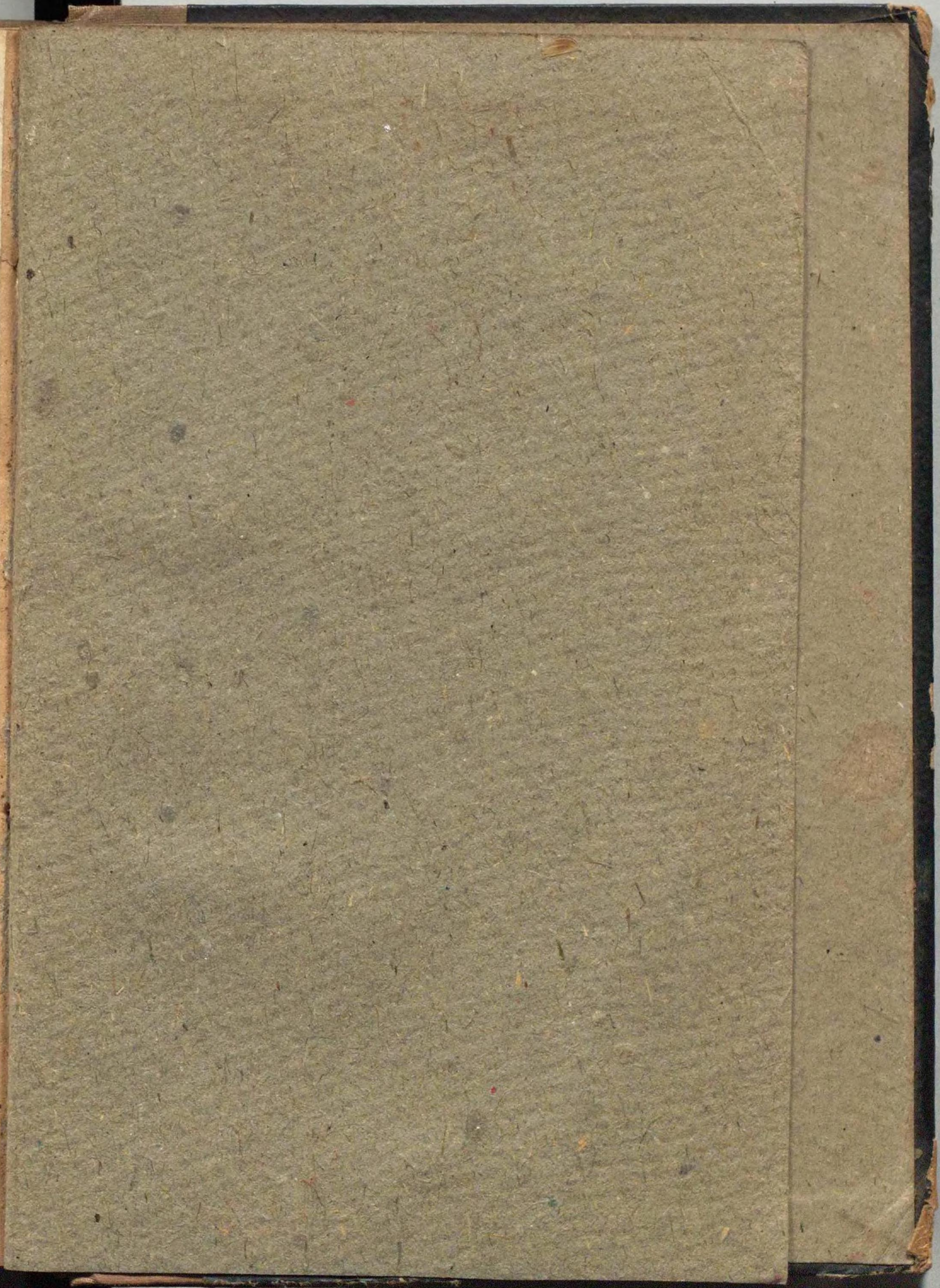
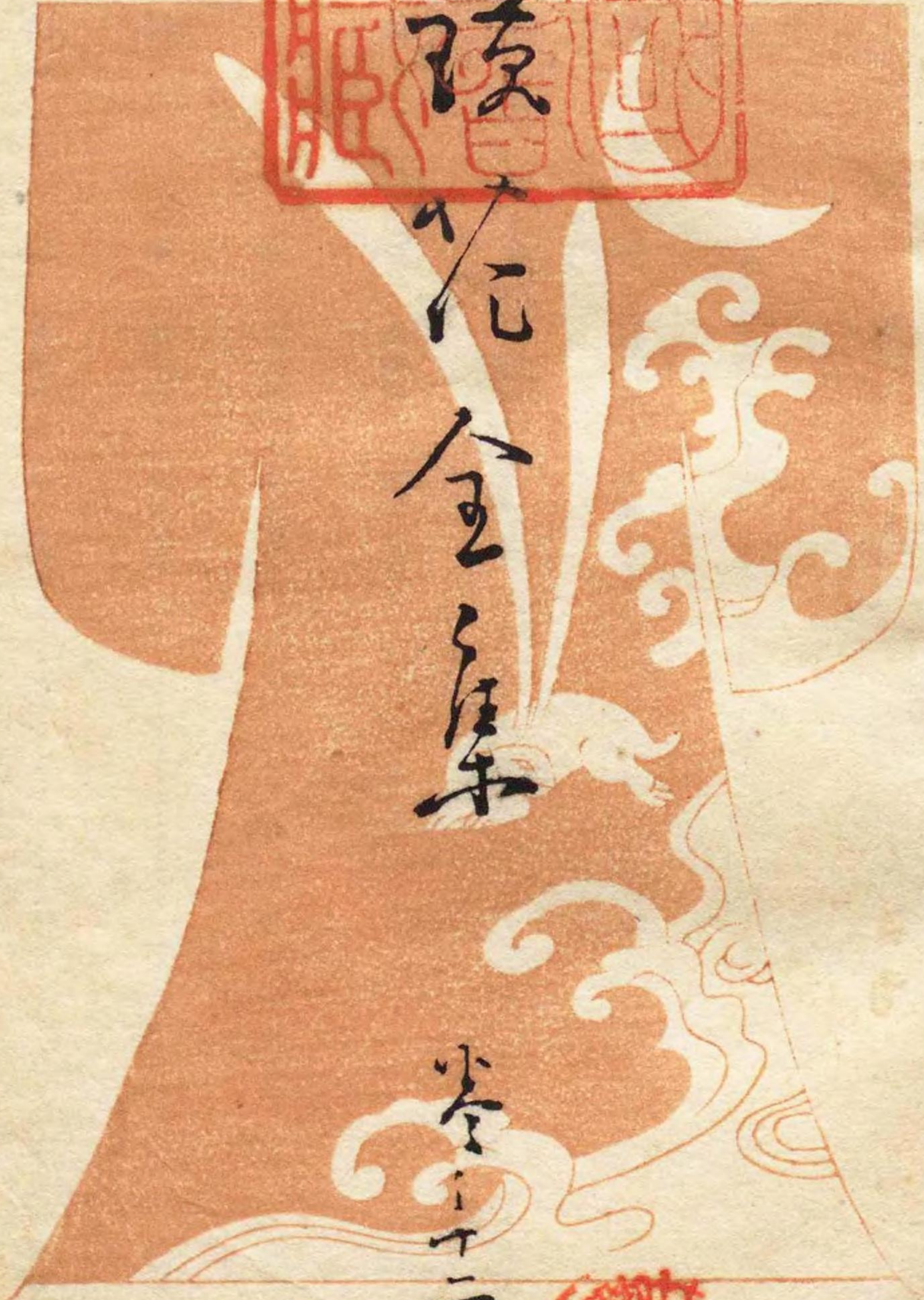


不固齋

記

全集

卷二十二



798
167

目次

白鷺	神鑿	吉祥果	海の使者	貸家一覽	紫手綱	尼ヶ紅
(明治四十二年十月).....	(明治四十二年九月).....	(明治四十二年九月).....	(明治四十二年七月).....	(明治四十二年五月).....	(明治四十二年四月).....	(明治四十二年二月).....
三六九	三三七	三三三	三二一	一六五	一〇一	一



Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or location.





尼
ヶ
紅



歌 行 燈 (明治四十三年一月)..... 五九五

國貞丞がく (明治四十三年一月)..... 六七九



大尉江崎順吉氏は、堪り兼ねて、がつと行つたが、血臭く、其の變な、膠の腐れたやうなのが棒になつて咽喉許へ込上げるので我慢が成らぬ。——今は何をか包むべき、正に此れ蝮の囓で。それでも彼は、件の長蟲を持參に及んで、庭前に於て鰻がかりの掴み料理と御目に懸けた、村の六兵衛が、來た時の勢とは、がらりと時の間に容子が變つて、ぐたりと成つて、大尉が居室の前から本堂へ續く廻り縁と、向うの卵塔場とを隔てた曲みなりの木戸を、……此の松輪寺の門内、崩掛けた鐘樓の方へ出て行くまでは、——辛うじて堪へて見送つたが。……

其の六兵衛の後姿が、日盛の百日紅の下へ入つて、黒くなつて、劃然りとしたのさへ、茫と影の如く目に映つたほど、彼は氣が重く、胸が切なく、——件の鐘樓の傍に、近ごろ照續く炎天に太陽の榮華を見よと、日射の腕に花の輪を投げたやうで、何時が代に散らうものか、夜も月の板戸越、桃色の蛇の目に成つて、緑の蚊帳へ影の射すまで、朝に晩に目に染みたる百日紅の在處さへ、何處へ飛んだか、赫と目輪へ附着いて、火花を颯と迸したと見るまでに、——大尉の瞳

はぐら／＼と成つた。

最う六兵衛の影などは、いづれへ失せたか、全然見えぬ。

此の六兵衛とても、三十分前に、同じ百日紅の樹の下へ、勢よく顯れた時は、胸の悪さに見かへられて、影も形も消えるやうな景氣の無いものではなかつた。

腹巻した、銅造りの胸許露出に、鳩尾の毛を戦がせ、又と突出した片拳に、汚れたりと雖も手拭を引摺んだ、肩を斜めに、腰骨でぐいと極めの、後へ構へて、寢首を搔きさうに、しやつきりと提げた竹の尖に、じつとり重さうな黒髪をすゝと捲いて掛けた片端が、ぼたりと仰向けに下つた獲物……尖がつた女の首かと思えつゝ、頭から尾へぬらめきを持つて、仇澤が照々と脈を打ち、蒼黒い蒸氣が、烈い日にむら／＼と立つて、親仁が竹を握つた手首へ絡んで、胴は繩に纏れながら、草履穿いた足許へ這つた影、畝々と蠢いて、倒に其のぼたりとする黒い鎌首を擡げた蝮……

此の長物を、事もなげに提げた處は、天晴れ蛇を斬つて釣鐘から躍出たかの骨柄。

で、及腰に、恚う斜違ひに廻縁の角を切つて、座敷を見込むと、横手と正面、兩方開け擴げた十五疊の、床へ附着いた片隅に、小机を置いて、懶げに肘を懸けて、ト其の肘にハアト形の天窓を載せた、背面向で崩折れたと云ふ風、中形の浴衣の机に折れた袖を洩れて、何か雜誌らしい紙

の端は見えながら、讀むでなく視めるでもなく、うとくとしたらしい容子だつたのは大尉であつた。

腰を些と伸し氣味に、六兵衛、其の形でこれを見ると、顔をかくくと二ツ頷き、

「旦那、旦那々々。」

と勇ましく呼んで、

「六兵衛でがす。」

と名乗りかけたは、おのれ、やれ、組んで取られたお主の仇、躍りかゝつて、此の其の恐しい呪詛の繩で縊り殺さう氣構だつたが、呼びかけられて、直ぐにツト向直つた、大尉の、まだ大尉らしい酒ぶとりもしない、髯の細い、口許の優しい、面長な、瘦せた顔を見ると、にやくと笑つたもので。

「へ、や、お晝寝でがすかね、えら、お邪魔のうしますだあ、もし、」

と目を細うして、額際の汗を拭く。

「む、何か、」

と瘦せた大尉は、背を其のまゝで、肘の手を支きかへた。

「爺でがす、旦那様には、ちよつくら、へい、何でがすがね。」

と口を開けて、又高縁を見越して六兵衛。

二

「へい、何は、奥様はお留守でがすかね。」

と妙にうそく。

「奥さんに用か。」

「いんえ、」

と云つて、又にやりとした。

「まあ、此方へ廻れ。——奥さんは食後に濱へ出掛けたんだ。——」

「へ、へ、そりや、へい、旨え處へ來ましたで。而したら旦那様に好えものを持つて参りましたよ。ちよつくら御免なさりました。」

で、腰を捻つて前へ出す。竹に絡んだ生々しい襷は、百日紅の花の影に、物凄く友染の濡色見せて、日の光に見々とひだ打ち、鱗が颯と逆立つて、四五枚金色の光を放つた。が、牝の蝮が死装束、臨終の時を飾つたのであつた。

六兵衛、影の輪を足に絡めて、蝮を地摺に、のそりと件の卵塔場の木戸を入つて、飛石を繞つ

て咲いた松葉牡丹を除けながら、大尉が恚れた机の前面へ、高縁の下なる沓脱の傍へ来て、

「これですが、旦那、」

と云つたが、無躰だと思つたらう。手柄を正面へは突出さず、竹を横手へ、蝮をずりりと飛石の上へ白く下げた。

「お、あつたか。」

と、大尉は其の読みさしの雑誌へ頬杖つく。

「漸やつと見附けただよ。へい、此の土用中さ、此奴が危険だで、うっかり草の中踏込めねえと云ふだけけれども、扱はあ搜すと居ねえもんだ。

聞かつせえまし、これも藪の蔭や澤の縁さ突つき搜して、私が手に引摺めえたもんでねえだ

ね。
此の街道の踏切さ行く處に、別荘があつてね。私其處さ、出入するだが、其の別荘の坊ちやまが、お友達達の書生さんと、たつた今しがたの事だね、これ。お不動様まるとつて、裏田圃から砂濱へ抜けさしつけ。其の畦路の、草中にも居ることか、あの岩ぼこの崖路だね、草も生えねえ、早に破れて、ぼろ／＼岩の缺ら降る處に、しやつきり張つて鬼の首さ牙を嚙んで、のたつて居たちうだもの——危え。

潮湯治の嬢さま方、海水着の帯も緊めねえ、跣足ですたく／＼通らしやる處だ。出つくはしたら何うしべい。我武者等の坊ちやま達で僥倖だね。——

さあ、見附けたら最後、其の徒、逃しつこはねえ、砂利を浴びせる、石を放る。此奴が、と皺びた手なりに、竹の真中を流眊に懸けると、蝮の其の畝り方が、口惜しさうにぶる／＼としたやうだつたが、六兵衛の身動きが傳つたので、首は舊のまゝぐたりとして居た。

「何と、此奴が、眞黄色に其の石礫の飛ぶ中を、黒くなつて、びん／＼、飛んだり、刎ねたりで、なかく／＼以て手におへねえ。

（行つて來う、往かう。）

（畜生、歸途に殺して遣る。）

何處へも行くなつて、其のまんま通り抜けて、坊ちやま達あ御堂へ行きつけ。……可い加減に遊んだりの、お腹が空いたで、晝飯にすたく／＼歸つて來さつしやると、何と、へい、舊の處に、然も、へい、のいと菱形の鎌首を擡げて、其もさ、今度アぐるりと此方向きで睨んだ形體。

（わあ、）

（殺せえ。）

と二人とも躍上つて、夢中での、滅茶苦茶に、へい、漸となやしつけた。何が、これ、なやし

て了へば三尺足らずの蟲だけれども、容易な事では納まんねえで、炎天に砂煙を上げて働かしつた時は、岩の根さ打つかる浪が黒かけ、此の長物さ、火繩のやうに赤くなつて刎ねたと言ふだね。

海松の枝、拾つて来て、真中へぶら提げて、ぎいらぎら、畦道さお別荘の裏木戸へ歸つて来さつしやる處へ、私、晝休みに、又、へい、茶の御馳走に成つて、狸話でもして聞かせますべと思つて、湯殿口からお縁側さ、奥様のへい、海水着干した棹の下潜つて、ひよつこりと出て出會したもんでがす。

其處でへい、
と又汗を拭いた。

三

「旦那様、此の生肝を薬にせるとつて、見つかり次第に一條提げて来うと頼まれて居たもんで、(坊ちやまな、爺やに其をくれさつせえ。)

で、擧詰めにして焼酎に浸けるちゆうを、譯話して貰つて来たのだが、前の内は厭だと言つて。

露西亞との戦争に、豪ら手柄をなされた旦那様だよ。——年あ少えが、其の手柄に因つて、大尉殿に成らした。何せい波の上の修羅場では、夜の目も寝ねえで、辛勞さした、其の疲勞が出て身體悪く成つて、半年にも一年にも夜が寝られねえ、困つた疾病。お友達の軍醫殿、町方の醫師方も匙を投げての、まづ、氣を鎮めて靜に休まつしやるが何よりだちゆうで、此の夏を、村の松輪寺へ御夫婦で来てござります。……

がの、矢張お鹽梅が悪いもんだで、其處で或人が言ふには、腹の生肝鵜呑みにするだ。すると、へい、心の弱つたには、凡そ此のくれる效力の可えものはねえ、立處に験が顯れると言ふもんだで、私が頼まれて搜して居ますだ。

然う言ふと、あれだよ。

(さあ持つてけ。)

ツて、さくく投出してくれさしつけ。旦那様の前だがね、坊ちやまも今に海軍にならつしやるちゆうで、お大將へ御奉公だね、旦那様の前だけれどよ。

(己たちを待つて、お刺に首を向けかへて居た奴だ、肝は屹と大いぜ。)

お友達が言はつしやる。

そりや可えが、足許へするりと迂らかして寄越さした長い奴めが、たわいがねえと思ふ、と違

ふだ。何か言ふ内に、脊筋を立てて、のろりと返つて、ぐいと、植込へ首を突込む。

(あれ。)

つて奥様は通げさつしやる。あわア食つて私、へい、手拭で、其の頭押伏せると、齒向いて、かしり、と噛みついた處へ、坊ちやまが、此の竹さ投出してくれさしたで、ホカ〜と遣つたでがさ。弱る處を引離して、へい、踏切線路から大廻りに慪うやつて持つて来たがね。町を突切りや近えだけんども、小兒衆まじりに多えこと女衆が遊びに来て、其處ら歩行いてござるもんだで、又然うでもねえ、青大將とは違ふ。此奴が芻出すめえとも限らねえ、怪我をさしてはなんねえと思つた事だね。へい、それにや生肝さ入用だ言はつしやるけえ、殺切れば仔細ねえだが然うはなんねえ。……えら氣を揉んで持つて来ました、へい。」

先刻から頼杖したまゝ、目を塞いで、半ば、坐睡するやう、時々、うと〜しながら、可い加減に黙つて頷いて居た大尉は、こゝで、細く目を開けたが、何の其の、二巻捲いた長蟲も、蚯蚓ぐらるとしか視めなかつた。

「あゝ、御苦勞々々。」

と又一つ軽く頷く。

六兵衛、勞はれてほく〜もので、

「や、何、そねえな事さ何でもねえだが、私、苦勞にしたは、奥様だよ。此の間、晚げえ、旦那様御酒さ飲まつしやりながら、私に、此の註文さつせえた時、奥様は、へい、話だけでも身ぶるひして、

(爺や不可いよ、屹とだよ、持つて来ては厭だよ。)

(馬鹿な、き様。)

と旦那様は言はしつけが、へい、こりや奥様は無理いねえね。

けんども、へい、弄物や慰物にさつしやるでねえ。薬だと言ふけえ、私も氣い揉んで、初中眼さあ押はだけて、見えたらござれ、搦めえべいで、漸と一尾手に入れつけ。何うだかな、鹽梅式、奥様居さつしやらねえければ可え工合だが思つてね、へい、お寺の門は潛つても、うつかりとは面ア出さねえ。

しばらく鐘撞堂の裏へ躡込んで、本堂から庫裏の方、お座敷は第一、ぎよろり〜、晝強盗見たやうに、野天にへい、眼玉ぴかつかせて、はッはッはッ。

何うやら居さつしやらねえやうだから、のつそり出て来ただが、油斷なんねえ。背へ得手物押隠して、旦那様呼ばはつただつけよ。

もの、これが、又見さつせえまし、襷には掛けられず、帯にはならず。……はッはッはッ、帯

にや短し襷に長し、もの唄でがさ。

「あゝ、唄だよ。」

と大尉はうとく。

四

「旦那様。」

「首か、」

と言つて大尉は愕然として目を開いた。——唐突の此の(首か)に、六兵衛は、あつとも言はず、眼を睜つたなり緊乎と拳を握つて、

「う、へい。」

と言ふ。ト其の顔を凝と瞻めた、瞳が据つて、大尉の顔の筋がびくびくと動く。

六兵衛、食切るやうな口附して、少時して、

「肝、肝でがすが旦那、蝮の生肝を抜いたでがすよ。」と握つた拳をぶるくと震はす。大尉は吻と息して、

「あゝ、肝か。」

「肝でがすがね、」

「はゝ、」

と寂しく笑つて、優しい髯を押捻つて、

「己は首かと思つた。」

「首を食べるかね、首は其處へ切つ放して置いただけんど……私はへい、薬にさつしやるは生肝だと聞いたもんだで、」

「何、蝮は生肝だが、己は生首かと思つたんだ。人間の、露西亞兵の、ロスケのよ。」

「えゝ、ロスケの首、」

と六兵衛は怪轉する。

いや、怪轉も道理。大尉は今實にとろくとしたのであつた。——

「然うか、夢か、」

と、自分で獨言のやうに言つて、

「あゝ、然うだ、お前が今、蝮の腹を裂くと言つたな。」

「へい、」

「で、小刀を貸せと言ふから床の間にあつたのを渡した。……」

「へい、此方の手に持つてるだがね、」
と中風のやうにぶら下げたり。

「臺なし、もの、蒼いやうな、黒いやうな、血みどろ血げえにしつけえ。だからお前様、此の切物さ、此中も見ただら、奥様が、へい、旦那の麥酒の肴にせるつて、梨の皮剥かつしやつた小刀だ、蝮を料理つたら悪かんべいちうたけんど、お前様、構はねえ言はつしやるもんだで。ひやあ後に洗ふべいさ。」

と帯に挟んだ手拭で、ぐいと一ツ手拭をすると、つるりと辻つたらしく、鼻の尖へ當てがつて、フンと嗅ぐ。

「何、小刀が何うだとも言ふんぢやない。而して組板のかはりに何か持出したつけな、む、然うだ。」

と頤杖の一つをはづして、机の縁を壓へて言つた。

「縁側にあつた蠟燭箱。……」

「其でがさ、土釜とへい、紙屑と一所に入つて其處に手水鉢の傍にある、其の大な箱の蓋でがさ。……お寺から借物でござらつしやるべい。それだら、へい、蓋一枚打棄つたつて仔細はねえだよ。」

「然う、そりや構はないのよ。——で、其の飛石の上へ直して、き様、向うむきに膝を割つて踞みながら始めたんだ、丁ど其の何だ、一輪、桔梗の花の咲いた下で、」

と言ふ、つい沓脱の前の飛石の傍に、すつくりと紅の勝つた紫に、日盛を咲いて居る。……此の目中は花も夢中で、自分ながら、扱て色も姿も辨へまい。露重たげに打首垂れた風情こそ、覺めて装を凝らしたので、恚う威厳正しく暑さにめげない時は、秋の草は寝て居るのである——だから、偶々蝶が來ても、夏の午は、幻の影ばかり、朦朧とあるのが多い。

で、向うの藪だたみから、晝顔が、白い面で、ほら／＼と覗いて笑ふが、風もなければ、誘はれもしないで、しやん、と咲く。

咲いたのは此の一輪ながら、桔梗は飛石の其處此處に、五本とは株にならず、二本三本づゝすらすらと伸びて、庭を綺麗に、土に埃も置かず掃き清めてあるだけに、尙春高く根じめの草が欲しさうに見える。

次手だから言はう。此の松輪寺は眞言宗で、住職は六十歳つと聞えた恐ろしく脚の長い、脊の高い、杖を支いたら木登りしやんせと言ひたい骨法師で、これに齊眉く尼が一人。臺所萬端、寺男なしに庭掃除まで手一つで老實に働く。其處らに塵ツ葉のこぼれて居ないのも、いづれ尼の丹精で、桔梗だけ残したも其のすさび敷。丈の伸びたは氣に成るが、尼が女郎花でない以上は、桔

梗は上人とか、はりない。

五

紫の由縁の色は、大尉の夫人のためにこそ、一本庭前に咲出でたものとは思はる。——彼の女は、海へ行つて今此處には居らぬが、奥さんが留守中の薄眠い大尉の目には、桔梗の其の立姿が、其處に在る夫人の傍に髣髴として映つて居た。

一輪、其の紫の花の下へ、蠟燭の折の蓋がびたんと置かれて、眞直に腹を割るべく、六兵衛の手に、軀がのたりと成つて伸びた時は、二片三片、葉の影ながら、鱗の色は蒼褪めて、蝮は死相を露したものであつた。

が、扱帯が解けたほどにも、蟲の生死に懸念せぬ大尉は、然りともなく、唯茫乎と視めて居ると……

「其の何だ……桔梗の花が潑と恚う大きく成つて、其のかはり色が薄くなつて、其處等へ、茫として青い環が出来たと思へ、……き様。」

奥さんが海水を遣つてる頃だと云ふのが心にあつた其の爲めかな。其の青いのが水に見えて、のたくと波を打つ——何の蝮の腹が、びくびく、のた打つたのかも分らん、爺や。き様が其

ン中で、ちよきく小刀を使ふ手附きが抜手を切つて泳ぐやうで、大潮の中をぶくぶく遣る……頭の髪が赤く成つて、露西亞兵に變じたんだ。

「露西亞兵に、」

「む、其の首がころりと落ちて、」

「わあ、」

と言つたが、小刀と、肝で、両手とも塞つて居るから、ぶるくと猪首を宍めて、厭な顔色。

「水雷艇の舷を、ぶつくりこと、青い提灯……ぢやない、颯と探海燈の光で飛ぶのだ。……其處を唐突に呼ばれたから、其の首が来たか、と思つた、あ、」

と滅入込んだ欠伸を一ツ、生嚙にして留めた。

「然うか、肝か、註文の生肝が取れたのかい。」

「へい、」

で以て六兵衛は、己が肝を抜かれた容體。

「見せろ、どれ。」

紅ヶ尾

と起ちもやらず、座も動かさないうで、机越に猿臂を出すのが、式の如き妙薬を服するには、餘り無雑作な舉動で。

龍の顛の珠とこそ謂はね、故事來歴までもない、別荘の和子たちが崖路の行還、戦ひ再度に及んで、火花を散らして退治してから、手拭で壓へつけて、途中を憂慮ひつゝ、寺の門へ運んで来て、鐘撞堂の蔭へ踞んだ心遣も現にある。……處を、珍しい葦ほどにも氣にしないで、然う又平氣に食指を出した處が、六兵衛聊か腑に落ちない。

「旦那、よくへい、目のう覺めただかね、可厭な夢だ、現にしても好くねえだね。六兵衛の首さころりは縁起でねえ。」

「露助に成つたから可いではないか。馬鹿だな。」

「然うかね、へい、だらまあ、そりや可えが、お前様何うさつせる。太い丸薬にしても、鵜呑は咽喉に支へるだあもの。何うやら、へい、びつ／＼、脈を打つて、掌で息吹くだがね。何か、へい、生暖とく、冷こい、……こりや生肝だて生きてるだよ。」

「手の筋へ自分の血が通ふんだ。堅乎握つて居るからだらう。又何だつて、然う拳を石のやうにして攪んでるんだ。」

「ほう、」

とはじめて知つたか、引攪んで固くした握拳を鼻の先へ、我が手に突向けて熟と見ると、

「首か、」

と言はれて、驚いた拍子に、ハツと攪んだまゝで居たのに心着いて、六兵衛、我と苦笑。

「へ、蝮めが甚ら惜んで、鎌首さ飛んで来て取返すめえもんでもねえと考へたで、うむとへい、握つてこました。旦那、私、あれだ、のたくつた死骸の上で、雷様ころつかねえければ可いと思つとるくらゐがすよ。大事なものだね、へい、」

で、開けようとする、指が、がつしり!

「や、何うしただ、これ、附着いた。あれ、はて、これは、やあ、これは。」

と慌てるまゝに、小刀の尖で、こじりかける。

「危い、怪我をする。」

と大尉は縁へすつと出た。

六

「爺や、き様にしては感心だぜ。その手に引握つて居たのは弱るが、桔梗の葉に載せて居つたので通りが可かつた。胸が空いた。あ、目が覺めた。」

と其でも、浴衣の上から襟の下へ一ツ撫でながら、大尉は片膝立てに成つて言ふ。

時に六兵衛は、さすが、吾が手を下した蝮の、其の生肝を、まぎ／＼と嚙込む處を、正的に見

るに堪へなかつたか、それとも、截割つた體の跡始末をする積りか、沓脱の前面へ下つて、日の眞下に、桔梗の花を蔽ひながら、影短かに突立つて、熟と、足許に取亂した俎の上を視めて居た。が——少時何にも言はなかつた——何うして音に聞いた金鷄勳章に對しても、可愛い悴は水兵なり、大尉殿がお言下し置かれるのに、やはか返事に猶豫ふ親仁でないのが、默然たりしも道理にこそ。

「あッ。」

と言ふと、横ざまに飛開いた、顔の筋が、鼻と、口と、引釣り、引張り、爪尖を揃へた膝がくかくで、はあく急いで、

「旦那、旦那、」

「何うした。」

「旦那、」

「何うしたんだ。」

「へい、」

「笠も被らないで、炎天に久しい間、心持でもよくないか。」

「いんえ、」

ぶる／＼と頭を振つたが、横歩行に、あとを見い／＼、蝮の骸を沓脱へ遠退いて、
「見、見さつせえ。」

と下の方へ緊乎差した、不細工な指をちやつと引込め、

「豪えもんだ、へい、恐ろしい、あの死骸を見さつせえまし、まあ是。」

とごつくり唾を呑んで目を瞻る。

「首が口でも開けたかい。」

「首が口、首、首が口。」

「口が何うした。何を慌てる。」

「開けたから嚙んだ、嚙んだでがす。」

「嚙まれたか、指を嚙まれたか。」

「然、然うではねえだよ。」

とすり退るやうに縁側へ身を蹴つて、足を搦んで、片手支の腰が据らず。……

「私、へい、此の年に成るだけれど、初めて見ただ。旦那、蝮は未だ死にましねえだよ。」

「うむ、動いてるか、蜥蜴の尻尾も同一だ。」

と一向に氣に懸けぬ。

「尻尾、尻尾ぢやござりましねえ、頭だかね。もの、其の鎌首さ、一番がけに、其處な小刀で、チヨン切つた事は切つただよ。

へい、籠には、庖丁見せて、赫と、奴が成る處を、藁すべを口へ當てるだ。口惜紛れに喰つく拍子に、ポンと落す。でねえと其の、一念が虚空へ飛んで、料理人の咽喉首へ喰ひつくとね、こりや、へい現にあるこんで……

蝮だで、其にも及ぶめえ思つた。是とでもがす——道具があれば鰻突きに、ト組へ縫ひつけて置くだけども、其のさもし、眞鍮の火箸では弱いもんだで。又然うでもあんめえ、半死半生の腹を割くで、苦紛れに鎌首さ持立てて喰ひつかれては大事だと思つたけえ……

最初、首根子をぢよつきり遣つた。動きましねえ。向うの藪疊の方さ突向いて静と据つとるで、はて、正體なく最う斃死つたかな、思ひく、輪形の切口のう、つぶくと遣りかけると、ひやあ、それ、胴中あたりと思ふ時さ、ぶるりと來た、大のたを横に打つて、巻き上つて跳くだよ。なにが、其のくれえなことさ朝飯前だで、

(やい、これ)

ツてぐるりく巻戻して、壓へつけて截割つただかね。へい、横のたを打つたも道理。お前様、此の蝮さ胴が太い思つたも違ふ道理かな。腹の中に、七寸ばかり、蚯蚓に鼻が生えて鱗の立つた

やうな兒が居ただよ。小刀は、親雌の腹をかけて、子蟲の胴中斜つかひに裂き破つけ。——

何の年の何の月日揃つたちゆう腹籠りも何も用はねえ。生肝さ御入用だで、すだくな親蝮兒、打棄つて、肝の臓を指の尖で血わたぐるみ引摺り出して進ぜた、

と話す、指の尖がむすつくか、頻に縁側に引摺るが、六兵衛は無意識らしい。

七

「海鼠綿のやうなものさ、ぶるく引からまつて、附着いて抜けた奴を、小刀の腹で、べたと扱いて、組板へなすりつける、とひやあ、最う此の炎天干だ、青膨れに色が悪い。

新しい肝だで、大事に桔梗の葉の中さ、押包んで持つて來けえよ。

そりや可えだが、へい、薬さ濟んだら早く臓物の押片づけべい。蝮の店開きな、又尼さまにでも見付つたら厭な顔されるだ思つて、始末に掛らうとすると、あれでがす、其の、

と胸毛を搔つて、息を吐いて、

「あれだ！ 鎌首が。あれ見さつせえ、咽喉輪の裂口を逆にへい、向うから、じり、と來て、己の胴中へひとりでに乗つかつて、え、斜に切れた、あの、其の、腹籠りの小蛇の頭を、がり、と、其の、引咬んで、あれく此方に向けて、眼なア白く半眼に見据ゑて、ひいくく尖鼻のつ

べらつとした奴で、ふツ／＼息を吹く、切口の肉が動いどるだもの。何うしべい、旦那、あれ、あれだ。」

と言ふ／＼、六兵衛は片膝縁にかけて、遁身に半身を摺上り、氣に成るかして其方向の目も放たず。

ト是を聞くと、絶えず捻つて居た髻の尖で、膠着いたやうに指が留まつた。……大尉は胸をやや机に乗つて、前にかけて、まだ板の上に擦り留めない、六兵衛の太い指のかさ／＼として黒いのを熟と見ながら、

「何、蝮の首が歩行いて来て、腹籠を銜へとるんか！」

「やあ、あの通り、此方に向いて、うゝ、それ、旦那。」

「誰が、誰が兒持の蝮を割けと言つた。」

と額の兩方から突寄せた如くに其の眉を擗めたのである。

親仁はきよとん。

大尉も我知らず不快の餘りつい口へ出した、自分の無理に逸早く心付いたか、聲を強ひて落着けて、

「可いから、打棄れ。」

「へい、

「打棄つ了へよ。其處に置くから氣に成るんだ、馬鹿な。」

「でがすがね、旦那、

「見なけりや可いではないか。」

「だげんど、私へい、見ただからね。」

「見たから打棄れと言ふんぢやないか。」

「私、へい、手が着けられましねえだ。旦那様の前だけんど……何うもへい、何とも切裂えた奴が一ツ活きとるだて、約と五六疋劬ねくツとるだね。鬼の首が、へい、指揮さして、巻けたら巻きつく、噛めたら咬むべい。もの、此のまんまにして私遁げてえ。太陽干に乾固まれば、後で鱗のある蛇に化けても、此の長えのよか始末が可えだで……え、些とべい行つて參じます。」

大尉は慌しく膝で留めて、

「打棄つて行つちや不可ん。」

「尼様が見ればとつて、濟んだ跡だら何も理窟のう言ひますめえ。次手にあの働き人だで、其處等打坐込むやうな腰附で、ちやちやらちやつと掃出してくんさるだんべい。尙と可えだで、へい、私これで御免なさりましょ。」

と眞個に思入つて頭を下げる。

「不可ん、不可んぞ、き様、其を打棄つて置かれて堪るものか。尼さんは言句を言はないでも、今に歸る……奥さんが見たら何うする……奥さんも腹に兒があるんだ。」

あゝ、一ツは、其がためにも神經衰弱の此の病疾、奇薬と言へば、蝮の肝を嚙んでもと思つた……大尉は顔の色もやゝ變つて、

「打棄れえ！ 親仁。」

と言つた。一聲が、部下に命ずる號令の如きものであつたから、六兵衛、はツと畏縮して、返すべき言葉も出ず……勿論其の位ならば御自身にとも言ひ出さねば、自分が、と大尉の考へる暇もなかつた。

まるで夢中……密と蠟燭箱の蓋を取る、トふら〜と漂ふ腰附、反りかへり狀に奮みかゝつて、「七里潔ばい、わッ」と唸つて、正面の藪疊へ投げ出した。が、据らぬ體の拍子が狂つて、件の軀は、炎天を飛ぶ板一枚、颯と流れて横なぐれに、ぞろりと卵塔場の片隅へ落ちて消える、と赤い砂がばつと揚る。

途端に其處等ぢり〜と蟬が鳴出す——低く來て、蜻蛉の羽が、ぴかりと桔梗の葉を掠つた。が、いづれ親類にしる、他人にしる、式の如き長蟲が、然ばかり苦悶の最期に對して、暫時息を詰めて居たものらしい。

で、庭も、境内も、本堂から座敷へかけ、卵塔場から四邊の山へ颯と展けて、其の邊が潤と廣くなつた——障子を開放してあれば、縁も高し、鐘撞堂の葺屋根に草の戦ぐのも見えて、門前の松原を吹いて通る風が涼しい。

惟ふに惡辣なる龍種の一族、將に其の屠られむとするや、眼を瞋らして野を蔽ひ、尾を揮つて山を隠し、のたうつ膚に世を狭めて、障子も柱もぎり〜嚙寄せたらう。風も雨も起さぬけれど、桔梗のものは暗かつた。……

ト大尉は、其の首の執念を聞いたにつけて、あらぬ事をフト思ふ。

併し先づ、六兵衛は、現物のあつて爪先に蠢めかないのに、一安心も、二安堵もして、漸つと荷を下ろしたと云ふ様子。脇の下の汗をぐい〜と袖を通して拭いたりける……手拭を、はだかつた胸にぶらりと入れた、此が又長蟲の尾に見える……厭な顔して、無言の大尉に、塵を拂つた揉手をして、

「旦那、可恐い執念の深い蟲ですが。随分へい殺生も私したもんだがね、こんな厭らしい心持さ

つひぞ覚えましねえだ。え、凡夫壯たて、観音院の少い坊様、何い吐くか思つたけんど……聞
かつせえまし、蝮さ仇をしねえ禁呪ちう御詠歌があるだよ。もの——いぐ前にだ、旦那、
「何、」

と大尉は氣が重いので生返事で居た。

「いぐ前に……だね。」

「行く前にか、」

「ひやあ、然うだんべい。行く前にさ。」

「行く前が何うしたんだ。」

と少し焦れたは、……一つ言を二度言はれるだけ、最う些とづ、あの其の一嚙にした奴が、
ぐい、と胃の腑から持上るのであつた。

是より前、囊を溝に浸したやうで、紫がかつて淀りとして、ぶすくと血沫の噴く其の肝を、
桔梗の葉からさらして、湯呑の微温湯で、一息に服した時は、えこくも澁くも感ぜず、煙草の脂
を嘗めたほどにも思はないで、うい奴などと六兵衛に賞言葉で、澄まして、けろくとしたも
だつたが……一度首の執念、然も腹籠りの小蛇の條に喰ついたと聞くと同時に、其の元氣では早
く既に、溶けて煉薬に成つて居さうな筈の肝が、キヤリとして、むくくと胸の下で應へた。扱

て、がツと鳴つて、一堪りもなく突き上げさうに成つたものを！

不淨を除けると、胸が透かうと、急つて軀を棄てさせると、俎が上つた時、一所に胃の中が動
揺して、ドンと六兵衛が投げるはずみに、ツイと込み上げて、あはや、迸つて出さうになつた處
を、うう、と冷汗に成つて揉堪へた。

が、庭は清めても、腹は洗へず、妙に胃袋がむらくと煽つて、他愛なく、其の癖、胸はと言
ふと板を張つたやうに堅い。

此の折から、生ぬるい、同一ことを繰返されて、齒の間へツ、と唾が走るのを、ぐちやりと嚙
んで、又、胸を悪くして苦切る。

六兵衛聊も察せずして、

「其處で、聞かつせえまし、もの、歌ちう、其でがす。」

行く前に鹿の子斑の蟲這はば

山たつ姫のありと教へむ。

此のさ、もし、鹿の子斑の蟲ちゆうは、蝮のこんだね。山たつ姫は猪でがすとの。凡そ山谷か
けて、蝮にへい向つては、猪ほど強いものはねえちゆうで、爰が理合だね——鹿の子斑の蟲這は
ば山たつ姫のありと教へむ。——

旦那様もへい、念のために禁呪はつせえまし。あんねえ執念のかゝつた奴ぢやけに、どんな事で、又仇をしめえもんでもねえで。……

だが、もし、其だけにへい、生肝は嘸利きますべい。」

此の嘸利かうが、又つツしりと胸へ利いた。思はず、かツと言ひさうに成るのを、眉根を寄せて嚙殺す。

其の色艶を伺つて、

「旦那、何うかさせえましたか。」

「睡いんだ、最うお歸り。」

と堪へ兼ねたが、不便や親仁の所爲ではない。で勤めて聲を優しく、

「禮をするよ、な、禮をするよ、」

九

否、飛でもない、然らぬだに悚毛を震ふ處、利慾のために行つたとあつては、命のほども覺束ない、と眞劍に六兵衛、頭を掉つて、

「旦那様、御免なせえまし。」

とぼく〜と行く前に、

「鹿の子斑の蟲這はば、」……

で、卵塔場の方を横目にかけて、青菜に鹽のぐつたりと成つて——さて、百日紅の花の蔭から鐘撞堂を寂しく歸る……

と見送ると、最う其の色が赫と瞳を射て、頬が熱く額が重い。大尉の目はくらく〜とした。一體、親仁の前なり、我慢もあつて、其まで押堪へ揉殺して居た腹中のこたはりが、いや、尾籠ながら、ウイと吐けて咽喉へ來ると、得も言はれぬ、青い、腥い臭氣が芬とする。

「あゝ、」

と身悶えして、我にもあらず机に突伏さうとする途端に、背後で、

「ふえへ、」

と云ふ、底力のない、ぼやけて濁つた笑が、天井の隅から鴨居越にぶはりと來て背中へ負さつた——古寺なりと言つて夏の日中、敢て怪しむには當らぬ。何時も聞馴れた當寺の尼の音聲。但し才藏の笑は仕來りの嘉例でお儀式なり、落語家のそれは家業の賣物で別條なしたが、手品師が笑ふのは意味がわからぬ、と一般で、此の尼の笑ふのも、彼の女の來歴と同然一向に素性が知れぬ。

素性の知れない笑と云ふものは、お互に氣味が悪い。然も尼は何でも笑ふ。まづ此の頃で言へば、やれ暑い、それ暑いで、ぶつゝ獨言しながら立働いて居る時でも、猫を叱つて居る時でも、鳥を追つて居る時でも、人を見れば必ずにやりと来て(ふえへ)と行る。

其の顔が……だふりと黄色に膨れた丸顔、小鼻から頬へ掛けて、朱色がさして、照々と艶持つ濕澤。總身の皮が弛んで、ぶよぶよとした肥肉の小造で、小さな天窗がもじやゝと薄黒く、而して前齒が仇白い。其の齒を莞々と遣ると、目皺が寄つて、上脛がぶるツと震ふ。……額が目に焼けて皺ながらの汚點斑で、眉のあたりに猫の髯のやうな毛が疎で、旭に透かすと、すいゝと露れる。……

年紀は幾つだか能く分らぬ。南は九州薩摩鴻邊の出生とあつて、西國四國諸國遍路、當松輪寺へも同じく杖と笠で辿り着いたが、佛縁があつたか、草鞋を解いて、件の脚長上人とともに、本尊に齊眉いて、やがて三年になると聞く。

お經も誦めば、鐘も鳴らす。針仕事もすれば飯も炊く。齒の痛、蟲封じ、安産の祈禱など立處に其の驗を顯す、とあつて、參詣の老弱男女、これを尼公は僭上なり、尼御前は時代に過ぎる、尼さんも餘り露骨と心得たか、誰云ふとなく(お尼さん)(お尼さん)と申して信仰する。

現在。――

大尉の其の夫人が、近い頃、渚の隙間をぼちやゝと素足で渡つて、蹠へむざとした刺を刺したが、薄皮に沈んで壓しても抜けず、纖弱い女、雪のやうな足を震はして惱むのに氣を揉んで、大尉が縫針で穿出さうと言ふのを、危ながつて身を縮める、髪を揺る、眉を擧める、果は、

「あれゝゝ、」

と言つて遁出す――陸じいのは何も慰樂。

「臆病者、腐らぬ内切つて取るぞ。」

と洋劍を抜いて、すらりと出す。

「あれえ、」

と裾もはらゝで、痛い足を飛上つて、本堂へ遁出すのを、どたばたゝ追廻す――處へ、お尼さん、臺所から、ひよつこり出會つて、

「ふえへ、」

と笑つて乃ち、何か知らず、黒焼の粉薬を、飯糊に煉合せて、ベタリと貼つたが、一夜にして創も残さず、刺を皆吸取つた。

紅ヶ尼
が、こんな事は、些とも其の和りとする説明にはならぬので、お尼さんの笑ふのは、矢張其の仔細が些とも分らぬ。

此の際大尉は、氷でも抱きたい胸に、ヒヤリと透つてキヤツと扶る、猿の聲でも聞きたい處……

（ふえへ）には一際弱つた。

聲ばかりか、最う其を聞くと、早や汚點のある額、仇白い齒、ぶる／＼とする上瞼が、まさまざと脳に浸み込む。

ト振返れば、ソレ果せる哉、果せる哉。

尼は、がらんとした寺の内へ抜出た形で、大尉が借住居の縦に長い此の十五疊の廣書院と、敷居を隔てた本堂との間、固より吹通しに遙か向うの破障子——其處は一段低く下りる臺所口の二枚戸まで開廣げの、四五本すか／＼と見える黒い柱の、最も近い入口の一本に、遮る物もなく身を凭せたが、寂とした本堂の板敷へ、氣勢を籠めて、薄黒くも又黄色に顯れて、熟と此方を見込みながら、件の仇白い笑を、唇から泡の如く、はみ出させて立つて居た。

大尉の振向いた顔を見て又、

「ふえへ、」

と笑つた。

大尉はむかつとして、苦切つたが、尼の上瞼はぶる／＼と震へて、西國四國諸國通路の、殆ど系統の分らぬ音で、

「お暑いこんでござりますえ。なう、」

と和笑る。

大尉の咽喉は、ぐうと鳴つた。静と堪へて、

「暑いです。」

「眞個、お暑いこつちやえの、」

と言つた切……法衣ではない、布のちやん／＼を抜衣紋の、膨らんだ黄色い背をふはりと背後向きに成つたが、すぐにふは／＼と鼠の腰布が動いて、本堂を斜に、時代に煤光りのする廣い板敷を、皮たるみのした太脛を揃へて揺つて、すい／＼と去つたが、やがて件の臺所口の破障子へ、其でも穴からではなく、すんと入つて見えなく成つた。

途中の狀が、宛然土蜘蛛でも這出す體。

何の事やらハテ得體が知れぬ。……此の月中を唯暑いとだけ會釋して、用は最うそれで濟んだ風で、さつ／＼と臺所へ引込んだ。餘り誂へたやうな立際が、何うやら其までに思ふだけの事はして了つたもののやうに見える。



とすると、先刻から同一所に立つて居たやうでもある。薩張ものに紛れたが、扱ては六兵衛が
蝮を料理つた一伍一什を視めて居たか、或は跡始末のあたりから居合せたか。

兎に角、寺の庭で殺生をしたとも何とも言句はないから、梟にして可い。

可いが、しかし胸の悪さは些とも薄らぐぬ。ばかりでなく、尼の姿、其の顔色、件の(ふえへ)
で、一層ねばくと口が粘る。恰も以て目に膠を流した氣持。

「堪らん、あゝ、」

と仰向けに背後へ手を支き、反返るが如く胸を伸して、目を瞑つて、ぐつと押下げようとする
と、ぶつくと、と動いて支へる。

握拳で、ドンと敲いて、

「何だ、馬鹿な。」

で、ハツと氣を變へて、居直り状に、ばつちり兩眼を開いて、土瓶の底の片傾つて灰に塗れた、
火鉢の縁に手を懸ける、と其處に差置いた湯呑が目に着く。

先刻、生肝を嘔む時注いだのが、咽喉の通りが好かつたため、半ばも乾さず、まだ其のまゝに
湯が残つた。

假の世帯は、一つ茶碗を夫人も使ふ。……近ごろの女は、初々しくても口紅のあとは染めぬが、

フト見ると、梅の花片、薄唇の影が映す。

さそくの清涼劑に、つと茶碗を取つて、そんな中でも大尉は莞爾、何も忘れて一口にぐつと吞
まうとすると、湯も泡立たぬに、呀！ 其の臭氣！

胸のを吐出したら、むらぐといきれが立つて、と思ふのが、ツンと強く鼻を刺す、蝮の移香
堪ふべしや。

「うむ、」

と言ひ状、ドンと投げると、湯もこぼれずに縁を躍つて、颯と桔梗の葉に覆つて、からりと葉
陰に破れて散つた。

「畜生！」

はたと睨んで、大尉はぶるくと火鉢を搦つた。

十一

それから暫時の間、彼は堅く其の腕を組んだ肩を聳やかして、桔梗の下を飛石かけて、庭下駄
で、茶碗の缺を蹂躪り蹂躪り、めつた矢鱈に蹴附けたのである。……
皆は上つて、眉は顰んで、額に青筋を畝らしたが、唇には著しい冷笑を浮べて居る。蓋し自か

ら其の躁狂の態度を嘲つたのであるが、嘲らるゝ當人さへ氣隨せに制し得ないのは、此の二三ヶ月は特に獨り悶えながら夜が寝られぬ……神經衰弱に悩んで居るから。

やがて、踏つける地響きに、桔梗の花のふらふらと成るのを、熟と視めて靜まつた、夫人はこんな響もすれば、慙うも揺めく。……

「缺を拾つて打棄るのも愚だが、待てよ、又、病氣の所爲の肝癩腹で、叩き破つたと思つたら心配するんだ。」

が、蝮の事は金輪際話が出来ん、出来んとすると、何爲、何うして茶碗を破つたか。

然うだ、桔梗に水を遣つたと言はう。丁ど飲みさしの湯が溢れて飛石も濡れた。」

と思つた。最う其時、夫人が寺の門の松原まで歸つて居ても、歩行して此處へ來る間には、此の日盛を何乾くまい？ 一體、鐘撞堂を背後に置いて、百日紅も其方に赫耀とある古寺の庭に、

日本海海戰當日、水雷艇を指揮した天晴勇士が、獨り佇立してこんな事を考へると言ふも蝮の祟

否、疾病である。

……剩へ夫人は今ごろ、未だ眞蒼な浪打際に、素足で富士でも視めて居よう。

「尤も朝顔ぢやない、炎天に水を遣るも可笑いが、其が可笑いと言つて莞爾しよう、

あの美しい唇で、優しい眉を開いて、と紫の花片に、其の涕を宿して視めて、大尉は寂しく微笑

んだ。

追つて其の顔が見えるとして、……何時の如く、己は億劫だから海へは行かぬ、雑誌を讀んで寝轉んで、うとくとする……

「貴郎、唯今。」

と言ふ、其處で嬉しさうな顔二つと、事も簡單に參らぬのは、今日は胃にある蝮の生肝。然も唯た今の身動きで、下腹から煽り上げて、胸の悪さは、又夥多しい。

あゝ、用るなければ可かつた。夫人も身震して留めたものを。……一ツは然し彼の女のために、同じくは健全な身體で相愛し、相睦みたさに、人の勧めに焦つて嚙んだが。……

「えゝ、吐了へ！ 仔細はない。」

はじめて豁然として悟つたやうに、大尉は今更ながら心付いた。

が、餘り卑怯なやうでもあるので、振返つて鐘撞堂の方、固より其處等に居さうもない六兵衛を見定めて、直ぐに反對の方向へ。縁前を眞直について厠の角から、ぐるりと本堂の裏へ廻つた。大尉は寺の臺所口を、下水のはげ路、じとくとした草の生を斜めに下りる小川の流を志したのである。

さても心細い事には、流許の傍が、寺の方丈で、折から和尚は留守で、尼も先刻臺所へ消え

たま、寂として音もしない。小縁前に、紫陽花の花の陰映りをする、淺葱の隈へ涼しさうに、のそりと寝て居た三毛猫の、如何にも胸の透いたらしい、苦のない形が、昨夜も鼠を、活きながら、あぐりと遣つて、べろ／＼と舌嘗めづりをした癖に、と見る目も羨しかつたは何うしたもの歟。で、流の岸の猫柳の枝の中から、水の上へ、芽えない顔をぬいと出したが、出すや否や、がツと遣つた。

出ればこそ。

其の癖、吐くまい、落着けようとすれば、胞衣で搦んで扱くが如く、する／＼と出さうなのが、計略こゝに及ぶと、カツカツ空いきばかりする。唾も乾いて、蝮の生肝は腹の壁を搔いて潜るが如し。

一層倒に成つて、ありつたけの流を吸つて、漲らしても洗ひたいが、情ないのは潮入で、淀りした水の色も鹽辛い、で、何ぼでも含漱も出来ない。

大尉は苦しさ大粒の涙を流して、天窓ばかり逆に掉つたが、柳を分けて水に宿つた、蒼白い顔の色が、可忌や、宛然獄門。

向うの田圃の日當に、白犬が喘いで居た。

十二

堪り兼ねて、左手の指を、やがて手首まで突込んで搔廻すと、頭を殺いだやうに耳が寄つて、口も鼻も一所に成つたが、斷つての思ひをするばかりで、此處から生肝は擲出せない。で、目の眩む中にも、大尉は、筈の嫌ひな女が、何かの紛れに一切食べると、さしこみに惱んで、半年の餘ふら／＼して、骨と皮ばかりに成つた最後に吐出した眞蒼な液體の中に、嚙切れもしないで、其の筈が入つて出たと言ふのを思出した。……

生命の瀬戸際、もう一息で、

「ぎやッ」

と遣つたが效が見えぬ。がつくり、首を掉つて、ふら／＼して手を外す。

ト引裂いたやうに咽喉が痛む。搔破りはしないかと、今突込んだ手を返して見ると、ぬら／＼とした唾が、水搔のやうに指の股へ絡んで、ぼつ／＼赤いのは尙ほ可忍。苦しさに悶えて引釣られた五本の指が一ツ一ツぐびりと曲つて、俗に言ふ皆鎌首。爪が白く目を開いて、ゑみ破れたやうな指の頭が、渦巻いて、ケ、ラと笑つた。慄氣とすると、鉛のやうな掌の其の重さ。潮の光に虚空を擲んだ露西亞兵の拳を其のま、肖たとは愚で。

大尉は突張返つた片手で、袂から手巾を引摺出したが、然りとては又此の悪毒臭穢無慚な中に、其ばかりは夫人の手に雪の如く美しいので、大尉は拭くことは爲得なかつた。愾く卵塔場に蔭が出来て、鐘樓の釣鐘の中仄黒う、百日紅に夕陽が射して、藪壘に薄りと何處からか煙が擲んだ時……大尉はげんなりした風で、持餘した胸を突出し氣味に、高縁に腰を懸けて、頭を垂れて、病人の如く太息を吐いて居た。

彼は其までに、兎さま角さま、散々に悶えて焦つて、果は爾く疲れたのである。

ト言ふものは、先づ其の胃を翻して生肝を吐出すと言ふ至極簡單な方法に失敗した彼は、獨り

自から處方をかへて、濱邊へ夫人を見舞旁々、散策して氣を取紛らさうと考へた。

其處で小流で——この水も生温く、白斑の件の犬の影がぶつくり掌に映つたのも不快だつたが

——手を濯いで、庭前へ引返すと、直ぐ高縁に投出しの海水帽を引被つて、ぱつと日に向いたが、

げつそり秒の間に瘦せたかと頬を暗く、杖も持たないで、卵塔場の木戸を出たが……

出る時だつた、フイと其の、行く前に、と思浮んで、

「鹿の子斑の蟲這はば……」

とうつかり口誦んだ。又此のマダラの音が悪い。何となく嘔氣く響きで、然も、アノ生肝と云

ふのが、紫がかつて血點々、何うやら斑々とした、と思ふと、咽喉から引摺出して、胸前で悶え

た手付も粘つて、血が垂れて斑々……あ、それ、ゴツと鳴つて込上げる。

……浪立つ姫に早く逢はう……

自分の手廻りに惜しいほどのものはないが、浪立つ姫の調度があるから、平時二人とも出拂ふ節は、尼に一言云つて行くのが、今日は其の（ふえへ）を聞く堪らなさに、黙つてつかくと境内を。

百日紅の花のほとりに、彼の顔は、蝮の肝に酔つたやう、赤く成つて通つたが、鐘撞堂の棟裏あたりは、ずるりと這つて居さうで頸をすくめた。

やがて黒門を出る、松原、門前の石碑から、駁の爰が果を少し行く——村の學校の運動場を横に、百姓家を二三軒、一寸した橋がある。此の流が、青い雜樹に包まれて、圓く成つて、寺の裏を流るのである、が、渡果てるまで何事もなかつた。

ト左が水田で、右は茅屋が一二軒、路筋から引込んで、往來端に、蘆の葉が一簇茂つて、小鯰ぐらるは釣れさうな水溜が一ヶ所ある。

此の溜から溢したか、流れから汲んだか、いづれ小兒等が棒切で搔廻した、其の雫が溢れたほどで、じりりと照り込んだ、眞白な砂地の上に、前後は乾いて、路の眞中へ輪が一ツ、すつと濡れて、一つ巻いて、薄り又すつと幻に消えた跡が見えた。時に人通更になし。

フトこれに目が付いた。

十三

「何だ、ふん、」

と自ら嘲つて、大尉は咄嗟、釘づけにされたやうに立淀んだ脚を、引抜くが如く、一間ばかり此方から、故と大跨に、と一歩出る。

其の拍子に、幽に濡れた水の筋が、胸中からむつくりと動いて、ふつと高く成つたと見るや、あゝ悪いぞ。其處らで腹籠を噛んだと思ふ、件の黒い塊が、する／＼と傳つて出て、濡筋の端へ行くと共に、ぼつり縁が切れて鎌首ばかり、むく／＼と蠢いて、草の中へ、忽ち消えたが、音もしないで水田へ落ちた。

瞻つて瞳に映る内に、蓋しそれは一疋の小さな蛙であつた事は明かに認められた。が、言ふばかりなく不快な感に打たれて、大尉は件の小沼から瘡病が襲つて来て、背中へ取憑いたやうに悚然として寒氣立つた。

「ちよつり返さう。」

が、こんな事で、路を遮られては、又其處へ憑入られう。踏切つて、突抜けて、絡はるものを

拂ふに不如。

思切つて、駈出すやうにして、やと一ツ跨いだが、溝ではないから、足溜りの見當もなくするすると反跳んで飛越す——

同時にヒリ、と焼けさうに蹠の熱かつたも道理こそ、ソレ其の拍子に脱いで了つた、餘程顛動したらしい、可なり遠方に、庭から穿いて出た下駄が一足。それも丁と揃へたやうに蘆の葉の前にキチンとして、活きたるもの如く鼻緒面を此方へ向けて、おいらは後の草履持で搔踞ふ。而して、水の跡は、拭つたやうに失せて居た。

「何うかしてる、餘程何うかしてる、何うしたんだ、まあ。」

と素跣足で立つて茫然とした大尉は、心細さうに嘆息して、しばらく其處を動かなかつた。

やがて、然も落着いて、居馴れた座敷を歩行く體に、澄まして砂路を取つて返して、ゆる／＼と踵を返しざまに、ちよんと其の下駄に乗つて、今度は悠々と落着拂つて、海の方へ歩行き出したが、餘所目には何うやら辿々しく見えた。

一本路を、それから又、およろ／＼水について、夏樹立の田舎家を通るが、其の何軒目かにな榎の茂つた門に、軒へ目白籠をかけたのがあつて、豆伊、豆伊、きり／＼、と可愛く轉る。夫人が同行の時などは、二人で立停つて、覗込んで、目白も馴染なら、此家には鶏も飼つて、産み

たての鶏卵と言ふので、故らに讀める處から、内のものも知合だつた。
處で、大尉は自ら我身に、否々、寧ろ、祟を爲す其の生肝に向つて、綽々たる餘裕を示すつもりで、榎の下から差覗いて、ト向したが、其の日に限つて籠が見えぬ。勿論、豆伊豆伊の聲も聞えぬから、

「目白は何うした。」
と聞くと、横土間の框の板に腰を掛けて、圍爐裡も近いのに、掌で煙草をすばくと遣つて居た亭主が、顛卷を咽喉へ抜いて、微笑み迎へた。世辭は可いが、其の返事の悪さと言つたら。
「目白は戸棚へ入れました、つい頃日何でがさ、旦那、した、か長い奴に見込まれたでね。」
「腹か。」

「と思はず言ふ。」
「否、六尺もあるすら。ふとつこい黄領蛇でね、其の榎の枝さ、ぐるりと巻いて、宙で胴伸びをして、ちよつきん鎌首を食反らして、軒の籠の中さ狙ふだね、」
大尉が樹の下を摺退いた事は言ふまでもなからう。
「鉄あ掉つて追ひこくつて、目白籠、裏口へ掛け代へましけ。屋根傳ひをして、廂から軋越に攻寄せるだね。はッはッ、無官の大夫危い、と内へ入れて、はい、此の納戸の眞中へ繩でぶら下げ

て置きましたけな、野良から歸つて見ると、ひやあ、梁から舌をべろりだ。彼奴また見込んだが生涯、附狙つて離れつこござりましねえさね。」

十四

「殺生するでもねえだけんど、小鳥が可哀相だで、巻落して打殺して、旦那様ござらつしやる、あの小橋から川へ棄てたが。さあ、又われ好きな處へ來う、とお馴染の其の軒前へ目白ッ兒さ出して遣ると、何うでがす。
同じ枝から、同じ太さの、同じ長さの同じ鱗な奴が、同じ構をして狙ひますが、私もへい、殺した蛇さ化けて出たとは思ひましねえけど、話に聞いた夫婦でけつかる。」

二度目に来るは女房の雌だんべい。
己は雌の肝を、と大尉は思つた。
「跡くされなく連立てさで、又、はい、其奴を打殺しただが、念のために、裏の芥葉場へ半日乾しただ。
夜さり燈つけて見ても、ヒクリともしましねえ。婆さまが見ても、嫁を呼ばつても、誰も死切つた、と鑑定打つたで、悴が引摺つて行つて、旦那様の前ですがね、大海へさらりと棄てた。」

琉球へ流れて行けばつて、最う大丈夫だと思ふと、何として、埒明きましねえ。
翌日、はい、同じ刻限に又してもへい、同じ長さの、同じ鱗の奴が榎からよろ
りとするだ。これには、ぎよつとしたで、こん畜生、と恐怖さ紛れに大い聲出したもんだで、と
つ様何すら、と隣から人が來ツけえ。

其の人の言ふには、見さつせえ、榎の虚洞はこんねえだで、此の樹に住居するちうではねえ
だが、此の同じ長さの、同じ太さの、同じ鱗の蛇さ、此處等、山、野良かけて何百何千何萬と居
るか知んねえ。一度見込んだが最後小鳥を嘗めるまで、後からくとのたり出すだで、死骸さ其
のまゝで棄てるでねえだよ。骨も皮も黒焼に焼消して了はつせえ、然うせると根絶したと言ふ。
然うもあるかと、芥溜の傍さ穴を穿つて上下に薪を積んで、炎天に焔を上げたが、煙さ黒蛇の
やうにのたくり上つて、火先さ舌をへらく遣つても、夕立にもなりましねえ。
えら膏が染みたと見えて、埋んだあとは、それから可恐い蚊柱だけど、最うそれ切長蟲は來
ましねえ。

だけんど、目白ツ子さ三日續き襲はれたで、怖毛立つて、びく／＼して鳴得ましねえだで、戸
棚に、はい、落着かせて置きますだ。
と語つた。

大尉は海へ行くのを止めた。

彼は來た時とは打つて變つて、足許も定かに勇ましく松輪寺へ引返した。村老の言、我が意を
得たり、先刻六兵衛が棄てた蝮の體は、切れた鎌首が腹の子を咬へたまゝ、正に卵塔場の何處か
に草枕でのたれて居よう。

可し、擱出して氣の濟むまで、目前で焼亡なはう。我が吐く呼吸さへ、一度外へ出れば行方は
知れぬ。煙も、やがて、松風も吹いて散らせば、晩の麥酒は清々しく飲めるであらう。

何故疾くにも氣が付かなんだ、と口惜いまでに氣も漫ろ。
で門の前の松原を潛る時も、焼くに然るべき枝振を、と眺して、餘り大業なのに獨りで微笑ん
だくらのであつたが。

さて、然う首尾よく行かぬのは、蝮の祟歟。生憎なもので、突然卵塔場を、唯見ると……人が
居る。

紅ヶ尼

早や其處だけは秋になつたやうな垣根の草が日に蔭つて、葉末を樹の枝へかけて細く濃な煙の
立つのは、新しい線香らしい。鐘撞堂の邊りまでは、まだ其の匂も渡らず。今詣でたばかりと見
えて直ぐには歸りさうな様子もない。——寺に附屬の埋葬地は廣い場所が別にあつて、門内の其
の井戸の傍のは、十坪餘よりはないのであるから、其處へ割込んで、蝮は探せぬ。

「ちよッ、」

と舌打して木口からそれた。つい此の六日ばかり前の新佛の家族らしいが、村でも大分の舊家、由緒ある家で、大祖先の塚さへある。其の爲に、特に此處へ葬つた由、和尚の話。亡くなつたのは女房で、産後で嬰兒も共に聞いて、夕越の二日月に、夫婦で縁から回向したものだつたに。

……
大尉は同じ縁に腰を落して、其時、可哀がつた小兒どもも煩い。それ、黒い天窓が一つ草の中をちよこ〜歩行く。

十五

夫人が同伴者に手を曳かれて、蹠跟と片折戸を入つて來た。

卵塔場は、と云ふと、線香の煙が次第に濃かに成つて、樹の間に夕暮の色を籠めた。草の中に、黒い天窓が、一ツ殖え、二ツ殖え、やがて四ツ五ツに數を増して、手鞠が傳ふやうに行つたり來たり、二三人小兒まじりに一家族が墓參と見えて、なか〜歸りさうな氣色もないので、氣が抜けた大尉は、千斤の盤石を胸へ掛けて、づしりと一ツ重量をくれた體、首から腰へ突張を入れて、ぐたりとして俯向いて居た處。――

手を曳いたのは、場所は違ふが同一土地に、別莊のある少佐某氏の夫人で、上官ではあるが、郷里を同一する大尉とは、主人同士が別懸なれば、女同士は尙ほ親しい、其の人であつた。

凭懸り合つた、袂も、裾も、揃みついて咲分けた朝顔見るやう、浴衣の色こそ涼しいが、大尉の夫人は葉を垂れてしぼんだ風情。

譬へば耳許白く、頬の色が颯と褪せて、唇も白澄んだ、片手に二人の海水帽を一ツに累ねて、ぶらりと力なく紐を下げた――此の方が瘦ぎすで、唯較べても弱々しいのに、しを〜と同伴の花やかなのに凭りかゝつて、手を曳かれた肩を落して、長い襟脚たよ〜と、俯向き氣味の、鼻筋の通つたのに、べつたりと鬢が亂れ、膨りとあるべき前髪が、斜にひしやけて眉を隠し、束ねた頭はがつくりと摺落ちて、支ふる譬もなく重さうであつた。

「唯今。」

唯、同伴の方が、其處に端居した大尉を見るなり、平時の快活な調子で聲を懸けた。此の人の手にぐしよ濡の、白と朱鷺色の海水着が二人分、兩端がつぶりと下つて、眞中を結へた手拭からも雫が垂りさう。

と見ると、夫人も大尉を見た。が、同時に著しく美しい眉を顰めた。蓋し心に澄まぬ事があつて、其が目のまはりに露れたのでもなく、大尉に對して不快を感じたのでも無論ない。仔細は立

處に分つたが、要するに、途中人目を包ましよう押堪へて居た身體の惱みが、遠慮なく眉宇に出たので、夫人は無言の裡に、早や深切な夫に甘えたのであつた。

「貴下、大變よ。」

と同伴者は同く快活な調子で云つた。……大尉が造りつけた體で動かないから、二人は其の前に立停まつたまゝで、

一寸、奥さんは死にかけてよ。」

寐めるやうに、前髪を掉つて睨む。

「死にかけ……」

と重々しく言ひかけて、大尉は目ばかり慌しい。

「さう、然うよ、死にかけたわ。眞個に。江崎さん、貴下、泳を知らない方を一人ぼつち海へ寄越すなんて亂暴よ——お氣を着けなさいよ、眞個よ、大事な奥さんを何うするつもり。」

と二人の顔を見較べながら、早口に饒舌つて、微笑して、又大尉を睨んだ。

時に、言ふ處に因ると、夫人は浪に捲倒されたとの事である。

唯倒れたばかりなら怪しうはないが、皆無水心がないので、ハツと動じて驚くと、最う氣が遠く成つて、腰よりは深くない渚ながら、手を支いて起上る方角もなく肩も髪も波に沈んで。

「それに、又危いつたつて、」

今日あたり漸となだらかに風ぎたけれども、まだ何うやら此の中の土用波の餘波らしい、胸越すばかりなのが時々大畝りを打つて寄せる。丁ど又倒れた處へ、二ツ三ツ續けざまに引被せた——

「私は直き附着いて居ただけけれど、

と同伴者は念を入れるが如く自から頷いて、極めて眞面目に且つ老實に附加へた。

「ひよつと見る。と奥さんの姿がないんでせう。一寸、おやと思つたわ。私。」

と驚いた風を仕方で見せうと、はじめて手を離して、思入れで胸を叩くと、支へ竹をはづれたやうに夫人は扱帯した半身を崩して、俯向いて密と胸を撫でる。大尉もげつと言つて狼狽へて胸へ、握拳。

十六

「まあ！直き足許の處に海水帽が見えるでせう。其の何ですよ。反返つた麥藁の縁へ、眞白な潮がざあくざあ、ほら、一つは其の重さで以て、奥さんは起られなかつたのね。と云ふものですがね……」

まさかとは思つたけれど、一寸覗いたら驚いたわ。其の浪の中に眞蒼な奥さんが居るぢやありませんか。吃驚して、突然腕の處を掴まへて起きうとするけれど、潮がかつて、貴下、頭が重くつて何うにも動かないんだわ。……御覽なさいな、奥さんは起てない筈よ。一寸……

(大變よう、誰か来て！)

ツて怒鳴つたもんだから、近所に居たのが、二三人さぶく躍つて来る。沖の方から抜き手を切つて歸つたのもあつてさ、いきなり引起して、まあね、私の許の海水小屋へ抱込んだんです。

——漸とまあ助かつたわ。

すぐに、海水着を脱がして、浴衣を、それだつても大勢人だからがするんですもの。可鹽梅に來合せたお隣りの別荘の、あの頸髻の生えた書生さんが、背後むきに小屋の前へ立つて、こんな大きな握拳を拵へて、

(蹴殺すぞ！ 覗くと、こらつ！)

てんで追散らかしたわ。

まあね、それから靜かに熱い砂の上に寝かして置いたの、大分水を飲みなすつた。然うでせうつて、え、」

と鞆んで獨りで合點み、

「でも、そんなにはお吐きなさらないのですもの。途々もお腹が、がばく云つて、胸が苦しいつて、些とつゝ水を反吐すんだわ。」

聞く内に、大尉は自分幾度か、口許まで、がつと来る。ために應答へもせず澁り返つた。

同伴者は頓着なしで、

「其の書生はじめ、助け出した人たちも、途中を案じて送つて来るつて言つたんですけど、往來のものが目をつけると極りが悪いからつて斷つて、私だけで送つて來たわ。そら、大した事はないけれど、何しろ吃驚したでせう。大變に氣を打つて、口もよくは利かないんだもの。それに、御妊娠ですからね、ほ、お大事になさいまし。私は、足はこんなだし、それにね、晩方に旦那のお友達が來るツて、何ね、構はない方だけれど、又お酒でせう。其の支度もしなけりやならず、最うそちこち來て居るかも知れないの。」

勿論ね、歸るとすぐに、近いから下女を遣つて、お醫師を然う云つて寄越しますからね、診て

お貰ひなさいまし。

奥さん、」

と夫人に向つて、

「海水着は、持つて歸るわ。一所に濯ぎ出させて乾かしてから届けますよ。ね、」

と言ひかけて、未だ其處に悄然と立つた夫人の姿、はじめて氣が付いたやうに、慌しく、一寸。まあ、縁へでもおかけなさいよ。江崎さんに掴つてさ。こんな時の夫ぢやありませんか。眞個に、氣拔がしたやうに茫乎して在らつしやるわ。でもね、御無理はない事よ、驚いたでせうツて。

「難有う存じます」

と、たゆげに深く頭を下げて徐々と二足ばかり、漸と今、其も弱々と手を伸して、濡れた帽子を投擧ぐるが如く、ぐしやりと縁へ——熟と大尉の顔を視めて、

「貴郎、よくお禮を仰有つて下さいな。私ほんたうに死ぬ處でした

些と怨めしさうに言つたのは、不思議なくらゐる。大尉の黙然で澁つて居るのを、同伴者に對して氣が揉めた所爲である。

ハツと突立つた、大尉の未だものを言はぬに、

「何ですな、お禮なんて、奥さんの飛だ御災難を助けさして頂いて、私こそお禮を言ひたいわ!

個よ。もしもの事があつたら何うしませう、

と聲を絲のやうに震はせた。

「私が傍について居ながら、其こそ申譯がないぢやありませんか。奥さんは内氣で華奢で在らつ

しつて、海水なんてお轉變なことはお好きでないのを、無理に私が誘ふんですもの! 江崎さんのお色が白いから、やつかんで、き様の夥間入をさせるんだ、なんて夫で言ふわ。ほ、ほ、ぢや失禮しますよ。醫師を寄越しますがね、お大事になさいませよ。まあ、桔梗がしをらしく咲いたこと、御覽なさいな、奥さんが立つてるやうだわ。」

十七

同伴者が歸ると、夫人は重さうな頭を下げて、兩方の腕を白く、黒髪に掛けて懶げに一つ、ぐらりと揺つた。

「おい、寢んのかい、早く、此方へ上つて、」

と大尉は矢張り苦り切つて、胸のむかつくのを押堪へた。是が不斷、胃袋に生肝のない時だつたら恁の場合である——其のまゝ、飛び着いて、弱腰を抱いて、書院へ躍込んでも罰は當らぬ。が、大きく動いても嘔げさうで遣切れなく、卵塔場の墓參者は、蝮の死骸を探すにも、夫人を抱上げるにも、旁々兩方で、妨げられて、一向訝えず、

「喃、」

と生暖く促した。

「え、」

と夫人も滅入つて言つて、頭を壓へた手を止らして、細い頸を上へ搔く。

「何うした。」

と言ふと又可厭な暖。ごつくり飲んで、

「うゝむ、き様。」

「え、急にキヤ／＼と胸が痛みましてね、あの、お腹で、びいく、びいく、動くやうな気がしたもんですから。」

「ウ、腹で、びいく、びいく、」

忽ち口に蟲唾が溜る。ちゆうと、辛うじて咽喉へ送つて、

「小兒か。」

「は、そんな気がしたもんですから。あら、冷えたのぢやなからうか、腰まで水の中へ入つて小兒に障つたか知らと、ヒヤリとした處を、浪が来て卷いたんですもの。海水帽へ瀧のやうに突かかつて、私苦しうつて、腕がう／＼としたんですけれど、結んだ紐が、髪と一所に絡みついて、」

と髪を撫で／＼、引入れられさうに言つた。

「鹽水をどつさり呑んで、貴郎を——呼ぶと、口へも鼻へも焼火箸のやうに水が入るんですもの。」

かつとすると、最う気が遠くなりましたよ。

でもあの、……」

と莞爾した、夫の目に、其の得も言はれぬ美しさ。

「誰か抱起してくれたのを、餘所の人だとは思はなかつたの。貴郎だ、——と思つて、……しつかり抱着いて、あとで恥かしい思ひをしたんです。」

あゝ、生肝を嚙むのではなかつた。

「立、立つてちや不可ん、まあ、横になれ、よ、疾く。」

「え、ですけれども、私髪が洗ひたい。」

「髪が洗ひたい。」

と大尉はつい鸚鵡を遣つた。

「潮水でびつしよりで、堪らない、可厭ですもの。」

「き様、不斷でさへ髪を洗ふと、ぼつとして逆上せるではないか。そんなに疲勞してる處を、何だ！ まあ、止せ、そんな事は何時でも可い。」

「ですけど、私も然う思ひますけれど、粘々して、ほら、こんなよ。」

で又ぐら／＼と搔つたが、べつとりして左右で捌けた。最う元結を弾いて居たから。

「そりや酷く粘々しますよ。」

大尉は最惜しき堪へ難く、

「構はんさ。」

身悶を静とする。

「でもね、私聞いたことがあるんです。私の國のね、何とか村つて言ふのには、一人づゝ髪の毛の長い女が生れるんですつて。其の女は髪が長くつて、艶があつて、光るほど綺麗なかはりに、どんなに、洗つても擦つても、扱くほど粘々する。其がね、代々蛇の子孫だつて言ふ話があるんですもの。」

「馬鹿な事を。」

と聲高に叱りつけて、颯と顔の色をかへた。

「愚圖々々してると引摺込むぞつ。」

が、夫人の驚く隙もあらせず、大尉はぎよつとするまで、其の無法だつたのに心着いて、辛うじて笑顔を造つて、

「かちく山の嘯處か。嬰兒だな、まるでき様は。」

けれど、今の劍幕で、夫人は兎も角も思ひ留つて、

「では絞るだけ絞りますわ、まだ雫が垂りますから。」

と髪を扱くのに、弱腰をすらりと極め直す。

十八

丁ど爾時、袖が寄添つた扱帯のあたりで、桔梗の莖が、偶然煮湯でも灌いだやうに、ぐしやぐしやと萎え凋んで、葉を絞つて、ぐつたりと成る。……

ト根に散亂れた茶碗の缺片に、ちらりと映つた鱗のやうな青い影。

其が又ほんのり染まつて、白さも凄いまで、頸を其處へ。片手で握餘る鬘を握つて、扱いて解いて倒にすらりと落とすと、腰を屈めて前へ俯向いた夫人の丈では、長さを宙へは釣り切れないで、すらりと飛石へ落ちる處を、我が腕でも掬つて投げたし、千條の柳も心あつて、泥に塗れまいと毛捌きをしたらしく、髪は艶々と緑流れて、高い縁へ、颯とか、つた。見事に丈にも餘るのである。

紅ヶ尼

實に實に、美しき此の夫人、其の黒髪に於て最も美しく、美しい黒髪は、其長さに於て最も美しいのであつた。

言ふまでもなく癖のない素直なのであるが、上手な髪結も餘り其の濃かなので扱ひ兼ねる……

一寸束髪で通つても、路行く者の振向いて見るばかり縁の影が房りする。

時に襟脚から、ふつくりと、髻を手で一抜き、一つ下つて、すらりと長く、今其の縁にかつた處に、先刻親仁が差置いた、蝮裂の小刀がギロリと光つて、毛筋を縫つて潜らうとした。大尉は何故ともなく、啊呀と一目、ひよい、と手に取り除けたが、ト恠う突刺すべき構のまゝ、ぶる／＼と震へが起つて、柄が附着いて手を外れず、腕が鍵形に突張返つて、思はず、

「あつ、」

と溜息する。

「ふえへ」

の笑が、大尉の頭から、ふはりと被つて、尼の姿が湧いたやうに忽然として其處へ出た。

が、兎角うの間もなく、黄色にむくんだ膝で、腰布をふはりと支いて、両手で、縁の髪の尖をぐい、と壓へる。

響が微妙に八尺の絲を幽に傳つて、夫人はものに襲はれたやうに、毛穴から慄然としたらう。髪を倒にしたまゝ、顔を上げようとすると、引釣られた狀に又がつくりと成つた。が、紛ふべくもない尼であるから、其まゝ、絶入りはしなかつた。

「いら、」

と異變な聲して、小刀持った手をはじめて動いたが、ぐる／＼と空へ廻す。あゝ、あゝ、危い。

こんなのは中空の怪しいものに、蝮の肝を餌にして釣り上げられたも同然であるから。

其の赫とした烈い顔を、臉をぶる／＼と上目づかひで、

「ふえへ。」

と例のあだ生白い笑を放つて、腋の下から、ぐつちより黄ばんだ、蒼黒い、鬱金の切の汗拭を出して、べた／＼と夫人の髪を壓して、

「最愛や、可惜毛を。可惜毛、」

と揉んで拭く時、一艶垂々と千條に湧いて、夫人が握つた髻からも、さら／＼と水が落ちた。尼が膝敷く縁も濡れた。

「艶が流れるえの。ふえへ。」

と莞つて、

「ても美しい、よい髪でござるえの。可い髪ぢやいの。長い、長い、長い、長い、長い、」

と尻上りに言つた聲とともに、其の身も其のまゝ、虚空へ飛んで上りさうな氣勢がする。

本堂の暗さよ。鐘も撞木も夜に架つて、庭前の黄昏時。

「お尼様、お尼様。」

と呼ぶ皺枯れ聲。本堂前の高縁の階を、四五段上つた處に、影のやうな人が眞正面を向いて立つた。……

別なものではない。墓詣に來て卵塔場に居た黒い頭が、胴に繫り、太い蝮を半分に切つた形、いづれも鎌首を眞直にした體で、ぞろ／＼と五つばかり。今其の出口の片折戸から、其處等へ籠め來る逢魔が時の陰氣の動搖に漾ふ狀に、ふら／＼と出て行つた。其の中の一人誰かが、用あつて尼を呼んだので。——固より彼等は、木戸を實際に、つい目の前に、尼の踞つた姿は認められたであらうけれども、大尉の住居内なれば、と地下のものの遠慮から、故らに其方を立廻つたに相違はない。

と黄色い膝も、蒼黒い汗拭も、縁に波打つ夫人の其の黒髪の末を、フイと消えて、暗い處で、

「ふえへ、」

と笑つたが、本堂の板敷に、みし／＼と幽な足音。

「南無阿彌陀佛。」

と押被せて、件の男と、何か其處で喋舌り出す。——蝮割の小刀は、無事に何事もなく、パタリと大尉の手を離れて落ちた。

けれども誰が然う爲せると云ふでもなしに、大尉は再び此の小刀を人知れず手にするやうな事に成つた——然も其は、夜更けて、人々が寢鎮まつてからである。——言ふまでもないが、同一日が暮れての事で。——

大尉は蚊帳を齊うして、夫人と枕を並べて、先づ寝た。

寝たとは言ふが、唯疲れ果てた身體を、疊の上へ横へたに過ぎぬ。其の疲れ方と云ふものは。

……蚊帳も然うで。

「貴郎、濟みませんが蚊帳を釣つて下さいませ。」

と座敷の片隅から、白百合の花が、蜘蛛の巣に惱んだやうな風情で、夫人が細い聲して言つたので、はじめて氣が付いて、蹠蹠と沓脱から立つて入つて、殺生禁斷の浦へ網を打つやうな工合に蚊帳を釣つたが、最う其の時から、……然う言つた疲れ方。可哀や、夫人は潮垂れ髪を、蟲に弄られて居たのであつた。自分では團扇で拂ふほどの元氣も

なく、これも疲れて、たよくと寢床に倒れた。

醫者の注意は、腰、腹の冷えないやう、褥を重ねて暖く、と言ふ。舊の曆で、盆近い今日此の頃、暖いも暑いもありはしないが、冷える冷えぬは別段。殊に、醫者が来て診た時には、晩方の熱が出て、夫人は悪寒して、ぶるぶると震へて居た。髪を絞つて、縁へ上るのに、一度手を支いて、はつと息をして、それから漸々、浴衣で包んだ片膝を上へ、裾を足搔いて入つた位。

直ぐに醫者が来たのであつたが、寺は、黒門の敷居が、腐蝕んでも朽ちても高いから、お抱へ車は引込めぬ。膝掛を肩に、革鞆を提げて、車夫が供して、國手は洋服で扇子使ひをしながら。

丁と案内は少佐の別荘の方から傳へたと見えて、鐘撞堂を見上げもせず、ひよいくと靴を浮かせて、片折戸から、すつと入つて来たものだつた。

處で大尉は、其の氣分、夫人は言ふまでもなく病人なり、診察は、美濃と近江の國境、寢覺の里と言つたやうな、縁と座敷の敷居の際で。

これが濟んでも金盥に手拭と言ふ式もなければ、初手から座蒲團、お茶などの手當勿論なし。何でも醫は仁術なり、と極めて掛つたやうな扱ひ。醫も亦仁術と差心得得、容體の説明、養生の注意を疊み掛けると、大尉が、

「はあ、」

夫人が、

「は、」

二十

其の時分、臺所で、かたく、方丈を、ざらり、續いて板敷をばたくで、尼が本堂の鐘の傍の金網張の常燈明に御明を點して、

「南無阿彌陀。」

するりと廻つて、

「南無阿彌陀。」

で、御本尊の前へ、御蠟を、

「南無阿彌陀。」

御前立ちに灯を點げく、

「南無阿彌陀、南無阿彌陀。」

やがて臺所へ、かたと下りた。——いや、御念佛も恚うなると慘目なもので、煤取杵取ヤレ忙しやと些とも違はぬ。

——唯、以前の墓參者と入替つて、此の容子を、肩に膝掛けして車夫が階に立つて視めながら、揉足で藪蚊を拂く。

此方では國手が、何を言つても、(はあ)と(は)で、一向冴えないところから、勢合點の行くやうに細々と喋舌らねばならぬ。乃で喋舌る。喋舌るが、手應へのないため、最う一息、最う一息で、

「お手がありませんですな、薬を取りにお寄越しになるのに。……あ、お使者を下すつた御知合のあの御別荘の女中でもお遣はし……」

大尉は依然として、

「はあ、」

夫人も同じく、

「は、」

と言ふ、——何うやら未だ是だけでは腑に落ちず物足りない、で立場が悪いが、はすみ懸つて、つい深入して、

「ト云つても、彼家までも御使ひがないやうにお見受けします。……宜しい、車夫に持たせて、私から差上げませう、然うなさい。」

一ツ判然と申された。

「まあ、國手、」

と夫人の調子が活々と成つたを機會に、すつと立つて、突立つて、大に國手振を發揮なされて、

「銀藏！」

「へいッ」

向うから車夫が、横走りの小刻。跳んで来て、鷹揚に無言に差出さる、革靴を攫ふやうに引取つて、すたく門前へ突走つた。

國手が靴を穿かる、頃には、最う楯棒を壓へて待たう。

國手はずん／＼出て行かれたが、餘り御機嫌の體ではなかつた。

處が、何と思つたか、ふいと立つて、大尉が其の後へついて、出掛けて、丁度、國手が車に乗つて、楯棒を上げた處へ、潛門から、松原へ、其の蒼白い眈の上つた凄顔顔をひよいと出す。

はつと國手は帽を脱つて、

「やあ、お見送りで、これは恐縮。」

とはじめて、其の體面を保つた風に、悠々と扇子使ひをされたが、車は矢の如く走り出す。忽ち小橋をがら／＼。

が、大尉は慇懃に、國手を門に禮したのではなく、實は、彼が夫人を診して、やがて、藥の效を説いて、頓服して胸が開き、再用して惡寒が去り、三服にして小用を通じ、忽ち安眠することを得て則ち治す、と恰も掌を指すが如き頼母しさ！ 自分盗んでも服用したく、追つて夫人の清々しく成るのが、目に見えるやうな羨しさに、手を出して脈を診せて、胸の苦悶を語りたかつたが、しかし平時は兎もあれ、疲勞し、發熱し、戰慄する夫人の前では、怪我にも打明けられる臟物ではない。

處で、歸り際を途中で留めて、兎も角もと、とつおいつで、つい應答も上の空で居たが、いざ、と成ると國手些と奮然の體で、ツン／＼と去られたので、夫人の手前、駈出しも追ひもならず、漸と門の際で顔を合すと、餘り早合點の挨拶に、フト出後れて車を逸した。

「あ、
と其の途端に失望の歎息を洩らすと、芥と、臭つて、ウイと又嘔が出る、其の氣持！」

二十一

「うゝむ、」
と自棄ばちのやうな力のない呻吟聲で、大尉は俯向きざまに、頸窩をドンと其の門の扉に當て

て、邪慳に二ツ三ツ引擦つた。兵兒帶もだらしなく、足が振れる。

開けた胸を搔合すも億劫で、億劫ばかりか、此處へ手でも觸らうものなら、忽ち件の生肝が、びくりと指の尖へ觸れさうで、生暖い息が發奮む。

頭も、一つは冷氣を感じたいのが目的で、扉に附着けたものだったが、觸つて見ると、照込んだ餘炎が未だ松の露にも冷えないで、むつとする、不快な枕。

肩で乗上つて、ふら／＼後腦で釘隠しの鐵の金物を探したけれども、一寸は見當らぬ。のみならず、足を然う振り掛けて、頭が扉を蠢めく工合が、何か長いものの畝り上るやうで、我ながら思はず慄氣とした。

斜向の鐘撞堂が、夕暮に薄黒い。

釣鐘を抱いたら嘸、と此方から手を出すまで、一縷涼しさの綱を手繰つた。

雖然、其も束の間で、つい其の引片傾いた屋根裏を籠めて、黒くむら／＼と隈立つて、ひらひらと筋の赤い百日紅が炎のやうに絡むのを見ると、額かほてつて赫と成る、……剩へ青竹に腹を巻いて、其處へ六兵衛が立顯はれた發端を惟出すと、半日の出來事が、腹を波立たせて、胸を引搔く、むく／＼と肝が響く。

と叫んだ。

瞬間、大空の星に離れて来たやうに、光もなく、音もなく、づんと大きく目前に架つた釣鐘の形が巨大なる蝮の鎌首と成つて釣下つた。見る内に、鳴らぬ響が傳つて、執念の唸り聲が、ぶんと大尉の頭脳を打つ。

彼は此の時から、岑々と頭痛がし出したのである。

「不可ん、此は不可んぞ！」

と呟き、両方の耳を平手で、押し押し、脚早に引返す。

忘れはしないが、猛然として思ひ浮ぶ。夫人は、と見ると、其の時、床の間の傍の押入れから、一枚夜具を出したのを、裾とともに爪先に引摺つて、尙ほ暗い中へ、手を二の腕まで突込みながら俯向いて居た處。

「寝るのか、出して遣る。」

と大尉も踉蹌けながら、急いで寄つた。

「濟みませんです、動くとも嘔吐しさうで、」

「うゝ、」

と苦り切つたが、しかし深切に引摺出して、蒲團を擴げた。隅つこでは暑かりさうな折ながら、

大尉も其處までは行届かず。夫人とても大儀な餘り、座敷の風通しまでは持出せない。出た處勝負で寝ようと云ふ氣、尤も壁あり襖あるは、病を守る後楯ともなるかして。……

で、引落した有丈を一つに襲ねて、敷蒲團をふつくりと高くして、

「寝ろよ。おい、」

夫人は其の間も、枕頭に、胸に手を入れて目を瞑つて居た。

「貴下の夜具は？」

「一所に敷いた。何、己は構はん。」

「だつて、貴下、」

「醫師が暖くして寝ろつてつた、愚圖々々言はんで！ 何だ。」

と直ぐに荒く成る。

何故か、癩癩の仔細は知らず、其の仔細を兎や角の元氣もなしに、夫人は床の上に摺上つたが、枕が無い。

紅ヶ尼

裾の方、机の、前ともなく横ともない、中ぶらりな處に、大尉が中腰で黙然たりで。——何だか附穗のない様子が、枕を取つて、とも言はれないし、又言はせさうにもなし、自分起直るは懶し。

で、夫人は敷蒲團の一枚を、端を巻いて頸にかつた。が儼々重い頭には、括り枕の假の寝心。

二十二

蚊帳を釣つた時、夫人は、しかし夫の夕餉の心配をした。

「構はん！ 病人が何だ、そんな事。」

と又突刎ねて、我と其の突慳貪なのに驚いたが、今は最う優しく言ひ直すのも氣不精に成つて居た。……

こんな態度を、夫人が何と誤解しようと、後で辯解けば立處に分る。此の持餘した胸の始末さへ着けば、何でもない、なか／＼そんな事に構へるものか。

大尉は、むつと面を打つ、蚊帳の香を飛退くが如くに避けて、ざつぶり浴びた泥水から、ハツと顔を出すばかり、夜氣の涼しさを慕つて、其まゝ又縁へ出た。

いしくも、月夜！と視めたが、其の月は丁ど出汐！で、卵塔場の樹立へ、葉を潜つて、枝を傳つて、黄色い蛇のやうな光を曇み掛けて、さやく／＼とした姿は見せぬ、餘り其の高くもない梢に透いて、葉蔭の累る門外の松原は、薄りと青み渡つて、ぱつと水田へ掛け、藪へ渡つて、微白く、川筋が通ると見えて、一際すつと明るい處もある。



飛石も、月の色で、浅い海の底の岩見るやう。此の影は觸らぬか、蝮の毒氣か、萎えて倒れた

炎天の一本の桔梗が、生々しい鉤屑のやうにのたれたのが不氣味なため、涼い露も辿られず……

可怪や、其處へ棄てた軀から、黒い粉でも吐きかけて居さうな、卵塔場の、其の月の影。

熟と瞻めて居ると、目が澁い。澁いと言つて、眼球を毛で繋いで頸窩へ引緊めるやう、毛穴が、

びり／＼と戦きかゝつて、耳の底へ、何時聞いた聲やら、鐘の音が、ぐわんと響く。此の響は、

奥の底のドン詰りで、蝮の肝の唸るのが傳つて、びり／＼と五體へ来る……其のために目が澁い。

澁い目で月を見ると、卵塔場の影は、黄色い蛇のやうに成るのであらう。

呀！ 或は蝮其のものが、自分でものを見る色は、萬象凡て黄であらうも知れぬ。恰も尼の膚の如く——はてな。……

然う言へば、件の尼の起居舉動、五ツ六ツ黒い天窓、醫師の出入り、黒門も、鐘撞堂も、座敷も、縁も、本堂も、月の色も、何うやら、鎌首が吐出した蜃氣樓のやうである。

否、さうではない。其の生肝を食つて、自分が此のまゝに蝮屬に籍を移して、縁に恚う腰掛けたのが、這つて月を見て居るのかも分らぬ。

トぎよつとして、腕を出して一目見ると、手首がわな／＼くのを、月の光がべろりと嘗めて、黄色に長々と畝り映る。

「何うしたんだ。」

と思はず口へ出して、低聲で情なさうに呟いた。

何が故に、亦然まで不快な、見ずとも卵塔場を見詰めるの歟。……程を計つて、一直線に跣足でも突入して、大尉は其の軀を拾ふとともに、以前企てた、件の焼撃を試みたいのであつた。然うさへすれば、吐く息と齊しく、大空へ飛散して、一切跡方もなく成らうまで、今も尙ほ信じて疑はぬ。

が、何故とも知らず、然うする事を人に見られるが太く疚しい。就中、尼が何處からか伺つて居て、自分に目も離さないやうな氣がするので、偏に隙を狙つて躊躇して居たのである。

雨戸も障子も、未だ開放しの宵の内、臺所にも、方丈にも、月と同じやうな灯が射して、兩方のあたりが隠れ場所もなく、微ながら何處へも届く。此方が月に動けば、尼も灯で動きさうで、聊の隙間も見當らず、殊に次第に伸び且つ擴がる樹の枝の黄色な影を、最う靜として見るには忍びなくなつた。

「え、寝るとせい。」

怖然として立揚ると、ぐしやりと来て、生暖く足に掛つた物體がある。大尉は總毛立つたが、其は夫人の手から棄てられた、未だ乾き果てぬ海水帽。

と見定めはしたけれども、雫する紐に、どんよりと月が射して、潮の鱗がのろ／＼とした細長い燐火と成つて、足首にすたりと懸つた。

二十三

蚊帳の中でも、大尉の目は黄色く光つた。

元來、手觸り足觸り、其處等のものが、兎もすると、蝮のやうに見えるから、此蚊帳へ入るのも、ふはと口を開けて、長い腹の中へ呑まれるやうで可厭だつた。

が假令蝮の腹にしる、最惜い夫人が寝て居て見れば、是ばかりは流石に猶豫も躊躇も出来ない。がばと潜込んで黙つて仰向けに寝た。枕もしないで、頭を抱へて、今悪いものを踏んだ片足は、膚につくのも不快であるから、股から開いて、毛布の外へ投げて置く。――それでも、やがて寝るつもりで、毛布は一枚だけ自分の臥床に先刻からのけてあつた。

恚う枕を並べても、肩よりふつくり高い處に、仰向けに寝た夫人の唇から聲が出ぬから、稍あつて、むす／＼と額を上げて覗ふと、すや／＼と眠つて居る。

枕許に盆があつて、散薬の袋と茶碗が一個、薬の瓶は、あ、扱は使者で届けたのを、尼が取次いで持つて来て、最う一度振は服用したらう。つい目の前の縁端に出て居ながら、何かに氣を

取られて知らずに過ぎした。此れだから言はぬ事ではない。自分の見ぬ間も、尼はくるくると立廻る。

待て、最う些と、と大尉は卵塔場の死體搜索の機會を掴み寄せるまで心を取られ、一つは慍る際、小取廻しの仕事なぞ思ひも寄らず、面倒ながら、洋燈も點けないで、敷居越の常燈明を蚊帳越に便つたが、其の灯の色も又黄色い。而して、最う其へは蛾が来て、ばさり、トン、ばさりと當る。

當る毎に、廢と翅から黄色い粉を散らすやうに思はれる。と其の粉が、ふつと来て、粉藥の袋へ飛込んで、劇い毒に成りさうな氣がして成らぬ。

で、夫人に過失あらせじ、と憂慮つて、密と盆から取つて、毛布の下へ入れようとして、餘り其の仕業の變なの心付いて、元のまゝ差置いたが……袋の色も黄色く見えた。中の粉も何故か黄色からう、と思ふと、透かして覗けば、蟻の藥の水も黄也。

ぐい、と大尉は澁い目を引擦つた。此の又目の澁いのは何うしてだらう。いや、目ばかりでない、耳の穴も澁く、鼻の中も澁く、唇から舌の根、咽喉へ下つて、胃の中にも澁さが凝固る。かう澁いのは蝮の不斷の氣持かも知れぬ。腹一面蝮の薄皮で張り詰めたやうで、其上、澁さで、ぐんぐんこめかみから頸窩をかけて引緊められる工合が、段々脳天が縮まつて、尖つて、平く成

つて、這奴が鎌首に化け懸ける。あれく、毗も釣つて、眉毛がきりきりと耳に附着く。……

と悶えて溢出した、疊の目の膚觸りが、ざらくと逆立つ鱗で、毛穴へ喰込んで、むくと擡げて、一ツのつしと、のた打つて、ぬいと伸びる。

大尉は腹這ひに成つて居たので。

「わ！」

と叫んで刎起きた。

あゝ、嬉しや——渾沌として黄色い、夏の夜の蒸暑い肚に宿つて、身體一つ黒く蠢めく、此のまゝ蝮に生り變りさうな中に、——夫人の顔が白かつた。

幸福、雌の蝮でない。

其の美しい顔を熟と見ると、大尉は、目が覺めたやうになつたが、髪も黒し、蚊帳も青し、常燈明の火も赤い。

「おい、」

とも言はずで、遮二無二、……舌がめらくと出さうで成らぬ。戦いてにじり退つた。

手も先づ、腕も忍ぶべし。唇を、と寄せては毒氣を吹き炎を吐いて、煮上る肝のために、夫人

の膚が立處に斑に成りさう。

「何だ。え、！」

とぼつたり疊に手を支いたかと思ふと、突立ち上つて、蚊帳を頭突きに、天井へ、食り附きたく、苛々と成つて、髪を掴んで、ドンと倒れた。

「ウム、」

と幽に、夫人は寝返る。

二十四

「江崎さん、最う寝られましたかい。」

餘所から歸つて、上人が、法衣を脱いだ膚褌袴のなりで、禪を緩く、但し埒ない緊め方をしたのではなからう。瘦せさらばへた腰の骨に、紐を痛んで、たわいなく、背に附着いた下腹を、おのつと摺下る、番に跨いだ、股も蚊細く、竹の杖で繼足したやうな膝のあたりを、水玉に立つ浪、これは又婆婆つ氣な團扇で、ばたくと蚊を追ひながら、常燈明の上へ、入道天窓で、脚長く立顯れたが、返事もせぬ蚊帳を覗いて、少時して言つた。

「は、あ、お若い同士ぢや。些と蝮酒でも喫らしやれぬと……はッはッはッ

高笑ひを團扇拍子で、ばつさ、ばつさ、と其のまゝ、方丈へ引返したは、何處かで一杯般若湯召したものと見える。

此の聲を何處に居て聞いたか、

「ふえへ、」

尼の其の仇白い笑が、煙のやうに縁で立つた。

其から續いて、しとくと歩行いて來たのが、猫の蹺音のやうに響いて、丁ど机の前あたりで留まると、ニヤーゴと鳴く。

さて、紛はしいが、矢張猫が附いて來たのであつた。

戸袋の兩戸を、かたくと引出しながら、

「鼠を捕れよ。」

と尼が言ふ。

ニヤーゴ。

「鼠を捕れよ、蜥蜴、守宮、蛙、長蟲、銜へて來まいぞ。」

ニヤーゴ。

「汝は夏兒ぢやえの、又蚊帳の外で、ぴち／＼尻尾鎌首刎ねさすな。」

ニヤゴ、と鳴いたが、稍細く成つて庭で聞えた。猫は胴を伸して、倒にトンと外へ出たのであつた。

「眞個にく、當寺の御本尊様は猫がお嫌ぢや申して喃、幾個飼うても、つい育たぬえ。古寺なれば鼠が荒れて、傘までも喰裂きますすけに、お寺の損耗は年に積つて、どれだけか分かりませぬ。猫一匹飼ひたうござります。御了簡遊ばされ、お見免がし下さりませい云うて、私がお願ひ申したればこそ、そない好う肥えてぢやえ。眞個にえの、無駄な殺生せまいぞよ、南無阿彌陀佛。」と戸一枚、がた／＼と引閉てたが、急に忙しさうな足取で、ばた、ばた、ばた／＼、膝きりの腰巻で、摺足の呼吸も吐かず、仰向いて、目を据ゑて、ちよ／＼走りの氣勢を立てて、瞬く間に兩戸を繰つたが、やがて、本堂を隔てた向の縁で、ごろ／＼と遠雷の如く聞えて、——寂と成る。

其は、其處で兩戸を閉め果てた響きであつたが、此の折から、薄く、且弱い電光が、本堂の前へ黄色く射した。

ト全身を颯と染めて、衝と階の上へ顯れた大尉は、其の時、わな／＼、手に小刀を扼つて居たのである。

夜陰に辿り着く廻國者のためと云ひ、何と云ひ、近頃は濱あるきして遅く歸る夫婦のためにも、

階の上だけは、本堂の正面一枚、暑くもあるし、閉めずに置く。

大尉は其處へ、小刀を手にして突立つた。

然らぬだに神經の過敏な處、午から寸隙なく惑亂し苦悶した折もこそあれ、和尚の蝮酒、尼が猫話。一時癩癩の發作に赫と成つて、渠等を刺殺しも仕兼まい機會ながら、非ず、目ざすは、彼處の卵塔場。……

彼は辛うじて、人の寢靜まるのを待ち得たのである。

言ふまでもなく跣足で下りた。

颯と又電に送られて、ひら／＼と閃めくが如く卵塔場へ入つたが、樹立の闇を貫いて、ト四邊を朐した顔の色は物凄。

曇りはしたが月はある。けれども、田圃の榛の梢と、山の尾の間にかゝつて、燻したやうに圓に黒い。

二十五

其の月を蔽うた雲の端が、黄色に環取られて、其處から逆らすやうに時々電がする。……哇には鼓草、山には菜の花の幻が潑と開く。

風は生温く海から吹くが、其の空は晴渡つて、未だに、手を引きつれた白地の少いのが、ちらほらしさう。月も其方から見れば澄んで居よう。夜が、海と山と二つに分れて、月も玉と土とが
ありさうな景色である。

大尉の作業は、月暗き中に、敵弾を浴びつゝ、土壘を築く、歩兵の如くはじめられた。土を撫で、草を分け、砂を引掻いて廻る。豫て用意した燧火の、時々、燧と燃えて消えるのが、火を曳く弾丸の落ちて走るが如くに見える。

點けては消し、點けては消し、瓜の皮も、貝殻も擱んだが、蝮の軀は見當らぬ。時には仰いで、樹の枝も差覗いた。引か、つても居ようかと。——勿論手鞠の外れたのを、獵犬が銜へ出すほど手もなく探し出せようとは豫期しなかつたが、慫うまで手数が係らうとも思はなかつた。卵塔場は、前にも言つた二十坪には足りない處へ、手は届かぬ、と言つても丈隠す葎ではない。草の生えたも隅々で、樹立の下晝も暗いだけの事、眞中は蛇の目に土が出て、墓の數も、蛇を隠すほど密着したものではないのに。……

大尉は寶玉を求むるもの熱心で、殆ど、掌で卵塔場を撫盡さうと足掻き立てる。其の草を這ふ處が、我ながら何か可厭なものに肖て見えた。

可、夥間なら早く出ろ、で、露には濡れる、土には塗れる。瞬く間に髪が伸びて、蓬々と成ら

ないばかり。しどろもどろで、卵塔場を呼吸忙しく泳いで居ると、時はやがて小半時、何の塚あたりで始まつたか、何でも樹の根を引掻いたと思ふ時分から、墓を這ふものが別に又他に最う一人ある?……氣勢がし出す。……

草がざわ／＼と鳴れば、ざわ／＼と鳴る。衣が摺れば衣が摺れる、吻と呼吸を吐けば、呼吸を吐く。

其が必ず、大尉の後へは續かないで、前に立つて、と慫う這身に屈んだ額のあたりに、尾か、後足か、何しろある。……で矢張……と慫う這身に屈む。が、額か、角か、鎌首か、其は分らぬ。

——燧火を摺つて翳せば何にもない。又畜生に燧火は燃せまい。
うむと手を伸ばすと、前でも、うむと手を伸す。膝を立てれば膝を立てる。爪立てば矢張り爪立つ。ぬつくと立てば、立揚る。焦れて、樹を揺れば、むら／＼と枝が鳴る。生暖い風が吹く。月を、と見れば仇白く、莞りと嘲笑つて、雲が臉のやうに、ぶるりと震ふ。

大尉は火のやうに成つた。

「尼か。」

と思はず空に訊いた。

何にも答へぬ。

最一つ烈しく樹を揺ぶる、と又揺ぶる。手を出すと、手を伸ばす。地踏躡踏むと、地踏躡踏む。

「誰だ！」

と掠れ聲を絞つたが、聲は自分の聲である。

「己か。」

と言つて、野狸が樂書したやうな月に向つて、ニヤリと齒を白く獨りで笑つた。

「己だ！」

と自から返事をして、

「うむ、己だな。矢張己だ、何だい。」

で、別に者のあつて存するが如く、錯覺したのは氣の迷ひだ、と稍と心付いたが、はじめて心付くと最う……直ぐに又、草を探すと、最う、既に又誰か、草を探す音が、同じく額のあたりで前立ちに成つて遣つつけ居る。

大尉は、魂を抜かれたやうに、フト思つた。這奴自分の眞似をするのではなく、自分が彼の者に導かれて、草の中を這ふのである。……

「蝮？」

と屹と成つて、

「き様、蝮か。」

と得も言はれぬ聲して聞く。

二十六

其の時、黄味を帯びた白いものが、怪しい月の前にぼうと立つて、蝮ぢやえ。」

と、えたいは知れず、皺喰れつゝも、仇媚かしい婦の聲。

大尉の耳はぐわんと鳴る。呀！鐘が、鐘が鳴る、鐘が響く、あれ〜鐘が揺れる。ぐら〜と揺ぎ始めて、鐘樓を、づんと落ちた。が、縦に、のつくり、山の缺片の如く、眞黒に壓して来て、夢中で駈出した大尉の足を、折戸口で、ぐわつと塞いだ。

爲に、大盤石をウンと嚙んで、下腹へ詰つたやうに立竦むと、龍頭を開いて、磔と睨む、いぼいぼ立つた偉大なる蝮の鎌首。

途端に、颯と電！

「江、江、江崎、江崎順吉だぞッ。」

誰だと思ふ、我は海軍の大尉なり、と犇と小刀を逆手に取る。

まだ電の消えない一秒、風を溶いて流したやうな黄色い足許、眩くばかりゆらくと動いた、と思ふと、釣鐘が浮いて、膨れて、影薄く朦朧として艦に成る。

敵艦来れり。

時に遠雷が、ぐわうと聞えて、どろ／＼と訝を返す。

大尉が乗つた水雷艇は、暗の海を、大鯨の翻るが如く、荒海に腹と縫はせつゝ、彼の龍宮の墓の如き、敵艦の舷を死黙して衝と過つた。

爾時水雷を發射した。

思ふ間もなく、目を開くと、釣鐘はぐらりと成つて、敵艦傾けりと見るや否や、一幅廣く浴びせかける黄色い光は、蒼い額、白い服を照し出だして、大粒な雨が、ばら／＼と降りかゝる。

同時に逆立つ煽りの波に、のた打つ如く浮いつ沈みつ、顔を曝らす、手を握る、一人の脊が伸びたと思ふと、艇のスクリップを操る冴に、すつくと二ツに胴が切れる。血は黒く、潮は白く、探海燈の餘波は蒼い。ソレ黄色い顔、切れた首、筒服が流れる、腕が振げる、鼻の長い犬が……犬が、葡萄色の目を眞赤にして、海豚のやうに泳ぎ上る、ト忽ち海は、繁吹ばかりの闇夜と成つて、水の底にも國ありや、高きオオケストラの樂に合せて、歌唄ふ聲が、から／＼と貝の破れるやうな音を傳へると、渠等を導く天の使者歟、片割月を美しく彩つたやうな鸚鵡が一羽、手足と

漕ぎ行く、我が水雷艇の舷をかけて飛ぶぞ、と見たが……

百日紅に電が射したのであつた。

鐘は依然として、鐘樓に。……けれども、夜は大きくなるものだ、とやうに据つて居た。

「然うか。あゝ、」

大尉は片折戸に吻と息した。

「馬鹿な事を！ 艦と共に、幾百の敵を屠つた己ではないか。何だ！ 蝮の一疋二疋、皆こりや

病氣の所爲だ。は、は。」

と呵々と笑つたが、笑ふ後から眉が擡んで、

「神經衰弱も…………が、蝮の生肝を呑んだのは妻のためだ。——然うだ……美しい、……」

唯見ると、釣鐘の膚が、むつくり動いて、鳴らぬ響が、ブンと來ると、耳がぐわんと鳴つたと思ふと、動くわ、其の鐘、揺れるわ、掉れるわ、ぐらくと廂を覗いて、渦を捲くや、中空へ衝と飛んで、月を離れ、山を離れ、雲の中に躍込むと、ぐる／＼と一つ廻つて、忽ち、ぐわんぐわらん、ぐわんぐわらん、と逆に翻り、西へ、東へ、南へ、北へ、向を替へ、龍頭を捻つて、大口を開いて、大尉の頭上を狙ひ下りに落して來る。

「わつ、」と叫ぶと、どしんと、棟瓦へものの音。……此の音を、氣の付く咄嗟に、大尉は丁ど蝮

の鎌首ぐらるるものだ、と思つた。

「貴下、貴下。」と眠さうな夫人の聲。

大尉は蚊帳の中で、我に返つて、扱は夢か、と思つた。が、續けて、一段高い蒲團の上から、夫人が横顔で、うつとりしながら言ふのを聞くと……

「何處へ行つて在らしつたの、今時分。」

二十七

其には答へないで、少時して、

「何時だ。」

と辛うじて言つたが、早や其の返事はなしに、夫人はすや／＼と小さな寢息。今の言に因ると、惱ましい身體で、ふと目が覺めて、夫が傍に居ないのが心細かつたのを、聊か怨んだらしかつた。で、安心が出来たと見える。

大尉が茫然と毛布の上に——身内を探ると知れたが——砂だらけに成つて胡坐搔いた方を向いた、蒲團の端を丸げたのが、こんもり向う高に成つて、頷いたらしく可愛い顫をつけた枕と鼻とすれ／＼の横顔で、眉が浮上つたやうに見えた。はらりと前髪の崩れた額のあたり、雪が溶けさうに汗ばんだが、敷いた夜具の襲なつたばかりでも、暑いと覺しく、乳を白う、胸を反らすばかり仰向けに搔卷を乗出した。浴衣の襟の下あたりが、何となく微紅の色映す。手はぐつたりとしたのを、強ひて力づけたやうに柔かに曲げて、花に蕊ある如く、指の尖が未開紅なる唇に觸れて居た。

熟と見た時、つと思つた事は、……。。が僅に其の眞似ばかりも出来なかつた。何故と言へ、皆盡く人間離れのした、蝮の思、蛇の心、最う一つ言へば生肝が然う考へさせるのであるかの如く感じたからである。

譬へば、夫人の其の高い衾の寝姿は、爰に砂だらけ、草だらけに成つて、戦に敗れた大童の阿修羅が、腹巻かなぐり取つて、臍腑を掴み出さうとするのを慰め顔の、天女ぞと拜まれる。……

……處で、其の腕に縋れば、此の苦惱は救はれよう、が、尻尾で絡みつくやうで出来なかつた。其の唇に觸るれば、蒼い、腥い、肝の臭は消える。が、齒が鍼に成つて刺りさうで爲得なんだ。其の胸を枕にすれば、鳴りはためく鐘の音は失せて、微妙な音楽が聞えよう、けれども、へろへろと舌が出さうで淺猿しい。我が淺猿しさは斷念めても、可愛や、最惜む女の生命がなからう。況や……だ、心ばかり扱帯のあたり被いだ絹のふつくりとある……片足屈めた裳か知らず、夫

人は、帯の五月目。

「坊か、」

などと撫でるが如きは、鎌首が、ソレ引切られた胴中へ逆に摺返つて、白眼で嚙むに齊しい。

……

大尉は居窘まつてぶる／＼と身震した。

あ、昨夜までの夫婦の語ひは、生肝のために、今や蝮の了簡。大尉は指の尖も觸れ得ず。現下の我相好を見られる辛さに、離れて居て、呼覚す事さへ成らぬ。

「うん、うん、うん、——」

と細く、長く、呻吟く聲が、本堂の裏から抜けて、梁を傳つて煤のやうに振ら下る。

「うう、むにや／＼……」

で、やがて脚長上人が魔されて居るのが知れた。

成程。

汚い、夜具風呂敷を、擴げたやうな蚊帳が、疊へ這つた體に、本堂を隔てた差對向、臺所の障子の前に釣つてある。——方丈は暑いから、縁を繞つて入る松原の風を懂がれて、端近に寝さつしやる、其の中で、

「う、う、蛇ぢや、蝮ぢや。」

と怯えたやうに叫んだ。

尼の寝ぐさげな、粘つた聲が、

「蚊帳の外にかい。また猫すらえの。」

と言つたが、和尚の聲は其切りで、一ツ、ぐう、と云ふ大な寢息。

「夢かや、やれ。」

と獨言。

暫時、寂と成つて、

「ふえへ、」

と笑つた。が、ふはりと蚊帳を煽るやうで、蒸暑臭く、遠く此方へ傳はる。

大尉は、兩の耳に拇指の栓を加つて、夫人の枕頭へ眞俯向に突伏した。

で、動くと、腹で摺つて、身體が這ひさうで成らぬから、鐵棒のやうに静と成る。

何かふは／＼と天窓に觸つた。

「比丘づく入、又一つ笑ひ居つた。」

と切齒齧をすると、又ふはりと來た。

矢張、笑が来て、仇白く、凭れ懸るのだ、と思つて、手を出して、搔拂つたが、何にもない。尤も聲が手に觸るべき次第はない。

が、如何にも形あるものの如く、又ふはりと来る。

尼の笑は、其の魂を吐くのだな、と考へた。

待て、魂にも形はなからう。但し色はある。其の色は、尼が口を開けたやうに仇白からう、と顔を上げたが、何にも見えぬ。

蚊帳の裾が煽るのでもなかつた。

フト心付くと、枕をこぼれて、片頬に敷いた夫人の後れ毛が、襲ねた蒲團を餘つて、はら／＼とかが／＼のであつた。

然までに丈長い夫人の髪は、晩方、一絞り絞つたまゝ、無雑作に束ねてあつたが、恰も雲の漾ふ如く、頸を包んで、肩に流れて、空ざまに灑いたら、梁を拂ふであらう。胸に、一團の暖い雪があれば、こゝに千筋の柳を束ぬる。

頭を撫でて、觸つたのが、夫人の髪であつたと知れる、と忽ち其の微細な管から、清涼劑を注

射されたやうに、咽喉がすつきりと通つて、目も清しく、常燈明も、暗くはあるが、不斷の灯の色に成つた。

其の明に、寝顔を透かして、大尉は、密と指を出して、鬢の毛尖に觸つて見る、と、心が通ふか、脈が響くか、頷くやうに、そよりとする。すら／＼と掌に靡く。

危ぶみ惶れた、我が手が觸れても、それが、白髪にも針にもならぬので、心地も清々しく、はじめて莞爾と微笑んで、可、呼起して見よう。――否、醫師も靜かに寝よ、と云つた。妻は今夜病人である。起さぬまでも名を呼ばう。

「光子、」

と言はうとした時である。

指にかゝつた、髪の末の、優しく細く、戦ぐのは可い、が、唯見ると、戦ぐ其の毛筋を傳つて、鬢の邊が一握み、恚う、むす／＼と呼吸吐くやうに動いて居る。伸びるやうで、縮むやうで、亂る、やうで、渦くやうで。其のゆら／＼と成る中に、照々と艶を持つて、底から湧いて出る如く、むくれ上つて、煌々と蒼く光る、潮の餘波が宛然、鱗！

「蝮！」

と一聲、無手と壓へた。殆ど、發作的に握つたまゝ、右手を離れぬ小刀がキラリと、蚊帳の目

を閃いて落ちると、根元から弗と切つた。

其の六尺にも餘るのが、筋を揃へて、一掴。切つたトタンに、粘つて冷たく、きりきりと巻いて腕に絡んだ。

「やつ！」

と叫んで、搔撈るが如く、蚊帳を起身で飛出しざまに、ぶる／＼と揮つて、引かなぐつて、すたりと投げる。……

や、のしと音して、板敷へ水を流したやうに落ちたが、灣を描き、圓になり、波状をなして、ぐる／＼と環を閉ぢつ開きつ、何と、する／＼と動いて板敷を向うへ這出す。

と引寄せるが如き、手を、蚊帳から出した、尼は片手で、破蚊帳の裾を捲きつゝ、ふはりと、腰布の黄色いのを支膝で、のそ／＼と這ひ寄つて、遠くから搔込む状して、さらりと其の黒髪を胸に抱くと、黒く、丈に餘つて、煮染めたやうな肌襦袢——だけ着て居た——の胸に餘つて、胴を敵らして勿ねると見えた。……主を慕つて争ふ如きを、無手と壓へて、のそりと、背向いて、其のまゝ蚊帳へ引込まうとした。

「あれえ。」

さんばら髪を頸で亂して、わな／＼／＼、小刀持つ大尉の手に取継つた夫人を、背後に突退け、

躍り懸つて、大尉が、

「尼！」

「お主あ！」

と和尚が、これも顔の色を變へて、骨まで蒼く成つて、長い脚を骸骨の如く、がた／＼と踏はだけ、蚊帳を捲つて、突然、尼の手を掴まうとしたが、

「わい。」

と舌を嚙んで、尻持を突いたも道理。尼のぶよ／＼した乳の間から、蝮の鎌首がにょろりと顔出す。

大尉も思はず、たじ／＼と退つたが、伏し轉ぶ夫人を、脚で圍うて、

「髪を返せ。」

と夢中で言ふ。

「おう、」

と答へて、もそりと立つと、胸を両手で抱きながら、よろ／＼と足を振りつゝも、走り蒐るが如くに衝と寄つて、正面に顔を見せたが、すく／＼と眉毛が透く。……常燈明の轉瞬くと一所に、ぶる／＼と臉を震はし、大尉の額を見上げながら、

——と大尉は後に……人に語つた。——
尼は、と聞くと……
彼の女は、大尉に執着して、夫人の長き黒髪を嫉んだのであつた。
が、大尉に先じて卵塔場を探つた蝮の首と、呪詛ひ得た髪を抱いて、ふいと東雲に寺を出た。

「ふえへ、」

と笑つて、

「肝を返しやいの、生肝を返しやいの。」

「返す！」

と、くわつと開いた口が、仇白い笑に吸込まれた。

「きやつ、」

と泣いて刎ね起きて遁げながら倒れる夫人を、脚長上人が、ぐらぐらと拘留めて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

と念佛をぶるゝ震はす。

ドタ／＼と物音して、猫が人の中を駈廻つた。

其の時、内陣の扉に、カタリと音がしたやうだつた。月の晴れたやうな、端嚴微妙な佛か、ふ

と人だけの大きに見えて、

「見苦しい、汝達。」

と聞えたが、其の後は知らなかつた。

紫
手
綱

「鯉鮓屋々々。」

と木挽町邊の唯ある横町の暗い角から、何橋か、橋の通りへ、早や戸を下ろした角店の角の柱へ、外套の袖を掠つて、斜めにヌイと出た男がある。

着た洋服は夜目に暗く、中折を引丸げて、一つ挫いで、仰様に被つたが、外國人かと思ふほど脊高いから、折からの暗夜が一抱きの柱となつて搖ぎ出したやうに、のさ／＼と大跨で。看板の心細い、孤家の燈火めく、鯉鮓屋の荷の、動きもしないのに可訝しく人を迎へて、濠へ引退る體に見えるのを、追かけるが如く、すつと寄つた。

「おい、鍋焼。」

「へい。」

と、間違はないが、變な言葉つきに、目をきよろつかせて覗込むと、突立つた立食者の客人の額は、高い處へ薄ぼんやりと顯れて、金縁の目金が晃然とする。髯のない、圓顔の二十五六の、

餘寒に霜でも、寒さは知るまい。血氣盛なのが、蹠踉ける風に、衝と立停まる時、肩を揺つてふらふらしたものは、一杯機嫌と睨まれる。

「まあ、荷を下ろせ。」

とニヤリと笑ふ。御意のまゝ下ろした處は、丁度普請場の塀の前で、見上げる空に縦横に組上げた、棟梁の骨構が、幽に新橋あたりの電燈の餘波に映つて、雲の中に、光らぬ稻妻が走ると見えた、星のない陰氣な晩。

客は荷の中へ肩を突込むばかり、近々と無遠慮に、

「新道邊で評判する、美味しい、鍋焼と言ふのは汝か。」

鯉鮓屋は揉手をして、

「え、毎度御最良を下さいまして、難有う存じます。」

「何、僕はまだ最初だ。御挨拶ぢや恐入るがね。は、あ、綺麗な荷だ。おい、過般も汝を最良にする友達が、何處か其處等の横町で出會したつてな。汝、其時、路地口で、加藥の茶葉を箆の中から零したさうだ。泥だらけの奴を何うするかと密と見て居たら、みづツばなを啜り上げた手で拾込みなんざしないで、匆々と荷を擔げて通つたつて、酷く感心して居たよ。おい、馬鹿に評判が可いぜ。驕れ！ 鍋焼。」

「何だか、鑄掛屋を談じて居るやうぢやないか。」

と一人、渠の傍へ来て立つた、細面、中脊で、目鼻立の苦味走つた、色の浅黒い、同年配の、角袖の外套で鳥打を被つたのがあつた。……同伴らしい、一足後れて、矢張横町から出て来た。鯉鮓屋は冴えのない愛想笑ひで、

「戸外で火を扱ひますで、へい、まあ、同じやうな身の上でございます。え、御眞效に、お熱くいたして差上げませう。」

とばたくと火を煽ぐ、と石を伐るやうな火花が散つて、むらくと湯氣の立つのが、暗がりを行く牛の鼻息に似て、廣野のやうな夜の寂しさ。風かと思ふと電車の響きが、風の音を立てて、頭上に高い電線を鳴つて通る。

「お待ちよ。」

と、角袖のが透る聲で、

「鯉鮓も貰ふがね、君に些と頼みたい事があるんだ。ねえ、」

「へい、はい……」

「厭に氣のない聲を出すな。相談があるんだ。相談だかな、何うだ、鍋焼、細君は達者かい。」と洋服のが大な聲する。

耳の遠いやうな顔をして、

「何でございますつて。」

「女房は達者かよ。」と、被せて聞く。

「混つ返しちゃ不可いぢやないか。眞面目の相談が串戯に成つ了ふ。鯉鮓屋さん、此の人はね、恚う見えて近頃獨逸から歸つて来た醫者なんだがね。病院を建てるつて用意した金子は皆遊んじまつて、自棄に飲み歩行いて居るんだからね、些とも信用に成る國手ぢやない。女房が病氣だつて、決して診て貰ひなさんなよ。」

一一

「失禮な事を云へ。」

と外套の片袖を刎ねて、拳を突出して威す眞似した、但し片頬笑みの、其の片手は、中風の如く、ぶらくで、

綱手紫

「汝の情婦ぢやあるまいし、築地河岸へ病人を拾ひになんか来るもんか。挨拶をしたんぢやないか。是から知己に成らうと云ふ鍋焼君だらう。其處で先づ内君の健康を訊いたんだ。即ち泰西の禮さ、日本の兄は是だから困る。」

「何か言つてら、泰西の禮は屹と、あれだらう。へい、媽々は達者で、と返事をすりや、年紀は幾つだと訊いて、宗旨は何だ、で葬禮は何時かと來る、お極りなんだ。」

「縁起でもない事をおつしやいます。」

と饅飴屋は七輪を煽いで居た腰を伸して、陰氣な顔して、

「媽々はどつと床に就いて居りますものを……」と、勢のない聲を出す。

「おや、惚氣かい。」と角袖は、鳥打の庇越に目を圓くする。

「惚氣處ちやございませんよ。」

「眞面目か、鍋焼、そりや何うも助からんな。」

と、ドクトルが故らに眉を蹙めた。

「え、旦那助かりませんでございませうか。」

「不可いぜ、不可いぜ。」

と角袖は高聲で、

「小父さん、慌てなさんな。餘程何うかして居るぜ、此の人は。眞個に女房が煩つて、心配をし

て居るんだね。」

「へい、其に、容體が何うも思はしくございませんで。」

「驚いた。」とドクトルは頸を窘めて、ヤケに帽子をぐつと壓へた、が、額を洩れた縁の髪が美しい。

角袖は頬を叩いて、

「心棒が恠う滅入つて居ちや、些と相談が煩ヶしさうだ。」

「何故、何故相談が煩ヶしい？ 骨折賃を出したら可からう。」

ちやらりと軽く雪駄が鳴つて、影の姿が看板の明の前へ、かすりの羽織に成つて出た。襟巻を

深く口許まで引包んで、鼻筋の通つた、目の鋭い、眉の迫つた、年紀は二ツ三ツ上らしいのが、

スコツチの書生帽子で、胸高に腕を拱いて、二人の中へすつくり立つ。

と其の後へ最う一人、外套も、襟巻も、眞黒なのが續いて出て、些と明を隔てて、一寸前後を見て立停まる。

爾時、媚かしい薫がはつとすると、袖を並べて來たらしい其の人から、姿が離れて、雪のやうな白足袋、すらりと地を敷くばかり、薄い駒下駄の音を靜かに、コオトはなしに、銀鳩羽に白筋の肩掛で、襟脚は隠れたが、肩の細いのに縮緬の五ツ紋の羽織、着こなしよくすらりとして、内懐の乳房をせめて、物思はしげに胸を抱いた、左右の袖は氣まゝに開いて、両方へはらりと投げたが、其さへ瘦ぎすにひつたり着く。枝に節なき柳腰、淺葱に柳の長襦袢、しつとりと、磯

お納戸無地のお召の二枚襲、淺く取つて引揚げて、扱帯で留めた、かはり裏、裾捌にひらめいても、嬌娜なれば衣摺の音もなく、青年たちの群を抜けて、饅飴屋の荷の後ろへ廻つて、普請場の其の板圍の板に肩を凭らせて、立直つて、總髪の銀杏返、洗髪の濡色立つ、筋の通つた濃やかな鬢の後れ毛から、片頬を透かして、ト湯氣の立つのを見越す、ふつくりとある睫のあたりが梅の蕾の倅する。

「まだ、何うして、其處まで相談は運びませんやね。」と、角袖は新來の其の緋の羽織に言つた。「早くしなくつては爲やうがないな。此の通り、穿替の草鞋を提げてる、忙しい身の上ぢやないか。」

と羽織の下から引出して、尻尾の如く振つて見せたは、ソナ恰好した古新聞の包であるが、合せ目から香氣が洩れて、錫の足がぶらつと下つた。

「ですがね、ドクトルがね、女房は達者かなんて、餘計な事を饒舌るんだものね。」

三

ドクトルは仰向いて小兒のやうに、あは〜笑ひ、

「僕が泰西の禮に倣つて、細君の健康を訊くとね、事實病氣ださうで鍋焼が鬱いで居るのよ。」

「女房が病氣だつて、商賣に出て居る人だ。相談の出來ん事は無ささうなもんだね。」と緋の青年は目を光らす。

「唯、氣が乗らないばかりです。」

と角袖が斷念めたやうに言ふ。

「僕が乗せて遣る。」

此の時ドクトル大に氣競つて、先刻から片手握拳を突出す時にも、肩を落してふら〜と振つて居た、手ん棒かと思ふ其の片袖を開くと、煽ると共に、手品で鳩を見せる體に、二升入の白鳥が羽打つが如く顯れる。其の細首を丁と握つて、ドン。

「さあ、鍋焼、話は是なんだ、是なんです。」

と、笑ひながら、一寸指さしをして、

「此奴の爛をして貰ひたいんだ。」

きよろついた饅飴屋は、松の中の梅一木、留南奇の薫る方をぬすみ見した、目を返し、

「へい〜、皆さんで召飲りますお爛をつけるのでございますか。へい、お熱くいたして差上げませう。」

「まあ、待ちたまへ、いづれ何だ、お熱くもして貰ふけれど、此處でぢやないんだぜ。」

と角袖は頤を壓へて、

「ねえ、其處が相談だつて事さ。」

「では何處なんでもございます。」

「洒落か、鍋焼。」

「又混つ返す、ドクトル黙つておいで。僕が分るやうに説明しよう。」

と襟巻から、顔を出して、緋の羽織が、への字に結んだ唇を解いて、

「たかが斯うだ、鱈鮓屋さん、まあ、一目見ても分るだらう。」

「分るとも！ 土方か、巾着切……」

「ドクトル黙つておいでよ。」と角袖が手で壓へる。

「あ、然うした處はボン引が招くやうだ。」

「何を此のマドロスめ。」

「といがみ合ふ。小競合を、緋の若者は耳にも掛けずに、

「天下の不忠不孝の奴等が、是から揃つて押上る處がある。つい其の新道の、まあ、或家だ。處

が御覽の通りで、一同懷中が寂しいです。寂しいが、しかし然うかと言つて、一寸お銚子を一本

で、綺麗に、しんみりと一間の内へ入らうと言ふ對手は、慍う並んだ何の面にも一人も無い。

「いつれ飲んだり食つたりさ、戦争騒ぎに騒ぐんだが、其の兵糧の一件です。此の間から熟々勘
定をして見ると、御祝儀萬端差引いて、御酒肴が一番突張る。尤も飲む事は飲むんだがね。其に
しても何うです、頭割一人前、三兩の上へ足が出るのは酷からう、其の御酒肴がだよ。
爰に於て、額を並べて密議を凝らした。今夜はね、此方が白鳥を持參です、肴は僕が、慍うや
つて。」

と腰を捻つて、斜つかひに、件の古新聞の包を叩いて、

「御祝儀を一把。此の色男が鮭の切身。」

と言ひ懸けて、角袖を一寸見向くと、肩越に帽子を捻つて、背後に控へた黒い外套の一人と、

低聲で何か話して居たドクトルが、思ひ出したやうに此方を向いた。

「三的、眞個に買つて來たか。」

「勿論さ。」

「色男、怪しいぜ。」

「見せようか。これ見な。」

角袖を一つしやくつて、懷中から出した尋常な風呂敷包。

ドクトル目金を晃つかせて、

「止せ、鹽鮭を包むのに、何だ、其の紫色は。女の前で開けるんだと思つて、此の期に及んで、未だ、そんな未練を出す。いざ、と言ふ時、悪く、かんものはんぺんなぞ顯して見るが可い、素頭をチョン切つて、鼈汁にして食ふぞ。」

「又はじめた、後生だ、それだけは止してくれ。」

「いや、三的怯んだな。」

と緋のが笑出す。と話相手は此の男だから、饅飩屋も調子を合はせて、

「へ、へ、何か鼈汁に、お差合ひでもござりますんで？」

四

「大有り！」

と袖を擴げて、最う白鳥は預けたから、空へ宣教師のやうに兩手を上げると、其の奮みにふらついて、後じさり、踉蹌々と成る。ドクトルの背を掠めて、三臺ばかり、護謨輪の俵が、中空を駈けて、通魔のするやう、すつと通つて、瞬く間に提灯が颯と消える、と時めく物の香が灰り残る。

「葦が飛びます。」

「薔薇が走るぜ。」

「金剛石の星が流れる。」

三人が口々で、居處を立亂れた。

「三的、御存じは居なかつたか。」と緋の羽織が肩を敲く。

「眞中の島田を見たかい、名人が馬に乗る、鞍上に人なし、鞍下に馬なし、と言つた風に、ハツと人知れず、お辭儀をしたらう。花屋あたりへしけ込みの、獺に挑まれます。私の背後を榮耀らしく宙乘擬きで駈抜けてさ、嘸濟まないとと思つたらう。勤する身の果敢さは、あゝ、さりとは不惑なものだ。」

と、がつくりと俯向く肩を、ドクトルがものをも言はず、握拳でドンと突く。と飛退いて、

「これ、紙衣觸りが、荒い、荒い。」

で、ふはくと袖を煽つて、横歩行を一寸と行る。

「鍋焼、後學の爲に見て置け。鞘當の相手は獺たさうだが、此の男は鼈だ。」

「又言ふかい。」と太く慌てる。

網手紫
「は、は、卑怯な奴だ。一體其の鼈なんぞが、今夜の企ての起原なんだ。それから話さなくつちや分らない、喃、鍋焼。」

「へい。」

「今駈抜けた二番目の車の奴が其だ、と云ふが、當てにするな。しかし、まあ、其として聞くさ。此の男が其の婦にぞつこんで、爲に、勘當はされる、借は出来る、首は廻らぬ事……泥籠も同様。」

と言つたが、不圖句切つて、背後を捻向き、

「兄哥、泥籠の首は廻つたらうか。」

「さあ、何うかね。」と、黒い外套のは、はじめて靜かに應じた。

「廻らないのは獨逸のでせう。」と板塀の暗い處で、婀娜な聲がほのめいて、顔の白さの倅立つ。

三的手を叩いて、

「痛快々々！」と雀躍する。

「見ろ、鍋焼、其處に居るのも泥籠仲間だ。蛇の道は蛇で、よく知つてら。何しろ首も廻らずさな。處を血の出るやうな酷工面で、止せば可いに、指違へる了簡で、一人、いつもの處へ、我々を出抜いて行つた、と思へ。」

前方は賣つ兒だ。座敷で、貰へないと云ふのを、何うやら色男の通力で、電話口へ呼出して、針線の接吻をすると、貴下なら参ります、氣の詰つたお座敷で、お腹が空いて居ますから御馳走をして下さいなさ、何うだ、鍋焼、親類附合ひで凄からう。

何が可い、と言ふと泥籠、と御意遊ばす。やがて、六疊に對向ひと成つたが、いや、其のお詔への長い事、凡そ三時半ばかりで持込んで、三兩が泥籠、もの見事に、する／＼と其の婦一人で退治つて、あ、食べたわ、で、帯を一つと遣つて、カラリと箸を置いたのが十二時だ。さあ、是からと言ふ處を、迎ひの馬車が來た、歸らうやで、座蒲團をすつと立つて、然やうなら……は何事だ。藝者のそんな事は此の土地ぢや當前。泥籠の煮える内玉祝儀をつけるのが紳士の義務だ、と言ふんださうだが、我々には我慢が出来ない。第一それ、可哀さうに、是なる三的其の時はボカンとしたとよ。無理はなからう。うむ、鍋焼。首つたけ惚れた婦が、それから何處へ行つて寝ると思ふ。泥籠を食つたんだよ、食つたのが泥籠よ、泥籠だよ、三兩が泥籠、泥籠泥籠。」

と咽喉を緊められるやうな泣聲を出すかと思へば、

「ウーム。」と唸つて、ドクトル、其の大な脊丈で仰向に反る。

五

「何うかしておくれ、おい、此の通りだ、始末に不可い。」
と、三は弱つた聲して、板塀を透かして叫ぶ。

「寒いね。」

と呟くやうに言ひながら、蔭から荷の中へ斜かひに肩を入れた、梅の紋に細い影さす、撫肩の其の懐手のまゝ、細面の横顔が、饅飴屋の額と擦合ふばかり向うへ並ぶと、冷たく見ゆる雪の頬に、看板の明り、ほのかに射して、淡いが、くつきりと闇が入つた。

「一杯おくれな、小父さん。」

「お饅飴で？」

「否、茶碗だよ。」

「え、お預り申しましたのは未だお燗をつけませんが。」

「冷酒で可いの、結構だわ。」

「豪い！ さすがは……」

と三的の四邊を眺し、

「姉御だ。」とばかり、言ひかけた名は言はなんだが、若菜屋の分の藝者で、お勝と言ふ、長唄の上手である。

「其處を見込んで連判に加へたんです。屋臺で立酒は難有い。」と緋のは莞爾する。

「其の元氣なもの。あらかた病院を注込んでマドロスを振附けるんだ。——小父さんお聞きよ、

何か今の話では、私ばかりが不技倆のやうだがね、何ういたして、此の國手、此の脊高が足駄穿いて通ふがね、ふり／＼、其の姉さんに嫌はれて居るんだぜ。」

「はい、焦う見えて嫌はれ抜いて居るんです、ウーム。」と、又仰返る。

「さあ、串戯は止して饅飴屋さん、其處で今の相談だがね、これから皆が其の家に行つて、松に柳と言ふ植込の表座敷へ陣取るんだ。毛氈があるなら貸せ、眞寢子の水調子も鼻についたから、今夜は陽氣にお花見だ。時節柄陽氣と言へば火に限る、と論じて、火鉢に股火で、炭をくわんくわんと繼がせるか。酒肴には註文がある、待て、と言つて控へさせて、二三妓驕ります。尤も其の泥籠嬢も、しよ引き込むんだよ。さあ、婦が來ると、ドクトルが、脈を見るやうに金被せ時計を捻くるを合圖に、何某、……何時何十分より、と汽車の發着表、乃至體溫表の如く、半紙で刻限を揭示に及ぶ。即ち是れ時間を曖昧にして、つけ掛の詐偽を働く、奴等の悪計を齎すんです。緋が説くのに、附加へて、

「何うだ、恐しく卑劣だらう。が、そんなしみつたれた奴に此の土地は職過ぎる。千住か新宿へでも行けと吐かして見ろ。鍋焼、汝が對手だぞ！ 咽喉を緊めてウンと言はせる。覺悟をしろ。」と、ドクトルが肩を聳かす。

「惚れて通ふに尻端折よ、二頭立の馬車でなくつちや相曳橋を渡るなど言ふお觸は出まい。」

と三的が疊み掛けた。

「可いかね、ぼつ／＼出掛けて、お前が其處の門へ来て、荷を下ろして居て、二階の障子が植木の中から、小火ぢやないが、次第に景氣づいて、慥う、ぼつと明るく成つた頃、はた／＼と七輪の火花を散らして、鍋焼餛飩、——と一つ景氣よく遣つてくれ。」

「頼むぜ、小父さん。」と三的が手で煽つた。

「尤も、後見には、其の姉さんが附いて居る、金春新道の第一人が、今夜は君の相棒だ、勝手な思入で道行で来るが可い。それ、あれを呼べ、酒が安い、で、植込の下へ荷が入る、ト婦どもの扱帯を解かせる、緋縮緬だの、鹿の子だの、此奴を繋いで綱にして、欄干から釣下げると、爛徳利を結ぶんだがね、扱帯の端ぢやづるッこけよう。其處は其の人が後見だ、懐紙を引裂いて、紙裂縫にして括るも可い。」

「さあ、お銚子が柳を傳つて、松の梢へ耀上ると、鯛と鹽引の鮭を焼くね。道灌山で日暮りの臭を嗅ぐ、寂滅、榮華、一時の待合よ、——しかし、女房が病氣だつてな。」

六

「いよ／＼行るのか、いや、早や何とも。天下泰平とは申しながら、此の御時節柄、空恐ろしい

事です。」

と黒い外套のが、他の若者に向つて言ふ。と緋が、

「え、餛飩屋も合點しました。」

「大合點で。」と三的も勇み立つ。

「女房が病氣だと言ふのに、お祭騒ぎの相談に乗らんでももの事だがね。」

と黒い外套が咳く、とドクトルが打消して、

「だつて、骨折賃が出るんだもの、鍋焼も商賣でさ。」

「いや、しかし、お前さんは御苦勞だね。」と黒い外套が婦を見向く。

「否、結構、餛飩屋さんの女房分です、性に合つて居ませうよ。」と、丁と茶碗を臺に置いた。

「皮肉な事を言ふべからず、大に門出の勇氣を損ずる。」と出構へで、緋のは其の尻尾を隠す。三的

的一が一寸手を上げ、

「ぢや、姉さん、はい、餛飩のおかはりか何かで、柳の下から糶出しに成る機會は可しかね。」

「あ、可うござんす。」と素直に頷く。

「何だか落着き過ぎますな。餛飩屋の女房分が、何うも其の貴婦人式は恐れます、第一、肩掛が當世過ぎる。ト待ち給へ、小道具を渡すから。」

三的は又懷中から、手拭を出して、荷越しに白い手に渡して、
姉さんに被つたり。」

「恠うですか。」

「あゝ、落人。」

「梅川々々。」

「やみにも色香。」

三人が哄と囃した時、宙に手拭が白かつた。

「源助さん。」

はア、忙しい息を切つて、姉さんかぶりの横合から、いぼ尻巻の蒼ざめた女の顔が茫と出た。
鯺鮓屋は天秤に肩を入れて、今や、腰を切つた處で、

「やあ、お霜さん。」と呆氣に取られる。

「はあ、源助さん、お前、大變だよ。」

「えゝ！ 容體でも悪いかね。」

「悪い所か、お前さん。」

「おゝ。」

「女房さんが冷く成つたよ。橋向うを駈摺廻つて搜したツちやありやしない。まあ、何しろ歸つておくれ。」

「然うか。」

と何にも言はないで、鯺鮓屋は肩を窘めて、荷が撓むまで落膽した投首する。トさすがに一同も黙りであつた。

「ぢやあ、急いでね、お前さんは店があるから、私は先へ歸りますよ。お長屋の衆も詰合つちや居るけれど、何しろほとけ様が其のまんまだから、氣掛りだから、可いかね、源助さん、お前さん、氣落をしちや不可いよ。確乎して歸つておくれ。はい、誰方様も、えへゝ。」

と何故か笑つて消えた、が、いや其の鐵漿の剥けたと言ひ、拔上つた額の色艶、いぼ尻巻の蓬蓬さ、死んだ其の女房の顔が闇を傳つて露れて、悪いしらせに來たかと思える。

ト姉さん冠りの婀娜なもの、朦朧として、可忌しい白張の提灯めいて、板塀の影も塔婆らしい。紫陽花の散るやうな銀座通の光り物、風に、ぴゅうと鳴る電車の音も、暗夜の虚空を人魂を載せて走る片輪車の響くやう。

「何うだ。」と言つて、黒い外套の男が、怪い影の如く、真中へすつくと立つた。
「何も浮世だ。これから皆が彼家へ出懸けて、馬鹿な、お祭禮騒ぎをするかはりに、鯺鮓屋につ

いて行つて、亡くなつた其の女房の通夜をして遣らうぢやないか。煩ヶしい事はない。祝儀を香典にして景氣よく遊ぶのよ。恚う見た處が、揃つて百鬼夜行の體だ。夜中に扱帯で徳利を釣るのも魔物の所爲なら、幽靈のお友達も餘りかけ離れた企ぢやないと思ふ。」

七

若菜屋のお勝は唯一人、後に残つて悄乎と其處に佇んだ。

鶴の一聲とたとへには言ふが、黒い外套の、今の發議は、其の圖體、恰も闇夜に五位鶯が鳴くのであつた。

しかし相談は立處に纏まつて、何が何やら、魅まれたやうな饅飩屋の荷の、前後に引添うて、一色燈火を淡く染めた、影繪の動くやうに、ふらふらと堀を通り、續いて閉し連ねた町家の前の片蔭を縫つて、軒の瓦斯燈の下へ灰色に成つて出たり、辻の暗がりへ濃くなつて入つたり、やがて銀座寄の見通しあたり、川筋へ霧が満ちた、ト見ると野原の如き中で見えなくなつたが、通夜に行くと聞いた所爲か、饅飩屋に新佛の影が映してか、何だか差荷ひの葬禮が通抜けたと言ふ氣色であつた。

水の中へ灯したやうに、遙に交番の明が霧に濡れて、紅玉色の美しく點れたのが幽に見えたが、

何處のだから能くは分らず……

寂しい婦の棲下に、今しがた冠つた手拭が、夜風に寒く、霜が敷いたやうに落ちて居る。

これは、婦よりも一同が断つた。饅飩屋の相棒は勤まつても、通夜の附合ひは奇に過ぎる。尤も連中催しの立女形で、一舞臺の給金が、お約束で出て居るから、今夜中は自由な身體、入用は此方持ちで身上りに及ばず、鍋焼饅飩の口直し、情夫の蒲焼うんと食へ、と夥間同士の説に囚れば、敵役のドクトルが、捌けた大腹中は可かつたが、敢て泰西の禮だ、と稱へて、別れの握手……其も可い。接吻だと突然捌んだ、肱を遮る、雪の細腕一文字で、梅の梢の霞がはづれた。身に染む夜氣も物悲しい、其の途端の身動きで、羽織の肩の辻つたのを、引上げもしないから、そがれたやうに姿も細く、熟と、一同を見送果てた目を返して、足許の手拭の色を視めたのである。

時に向う側の軒下を、すつと通つて、先刻、連中がぶらぶら出て来た、あの角曲を縦に抜ける邊から、急につかつかと足早に成つて、橋の方へ行かうとする男があつた。

「關さん。」と此方から、低聲ながら力を籠めて、婦が其の男を呼掛けたが、顔を上げて見定めもしないので、はじめから連のものが不意に足疾く離れて行くのを、拗ねつ、呼留めるやうな物越に聞取られた。

黙つて立停つたが、臆病らしく肩をすぼめて窘んで動かぬ。

「關さん、此方へ来て下さいよ、一人で心細く成つたんですもの。」

男は眞直に胸を押し付け、町の眞中へ歩行して寄つて、

「誰だ。」と少いが、些と沈んだ聲。

「私です。」と言尻を懐へ消すやうに顔を襟につけて寂しく答へた。

「あ、お勝か。」と傍へ寄ると、脱兎の如く、突きつけるやうに肩を並べて、男の袂をぐいと引く。

「驚いた、唐突に呼ぶんだもの。お前、此の暗がりに、能く私だと分つたね。」

「暗がりだつて、闇夜だつて、思つた人が分らないぢや、盲人の女房は何うするの？ 私や目が

潰れても、貴下の顔は見えるんですよ。關さん。」

と覗込むやうにして、

「私が此處に居るのに、突抜けて何處へ行かうとしたの。」

「何、私は些とも気が注かない。又こんな處に立つて居ようとは思ひも掛けずさ。第一暗くつて、

お前、分りつこはなからうぢやないか。突然、關つて言はれたんで、暗がりだもの、お前吃驚し

て、動悸がして居るくらゐなものだ。」

と續けざまに胸を叩いたが、何となく息忙しい。

八

「でも何でせう、私が、呼んだから動悸がするのね、動悸でまあ可かつたわ、黙つて知らない顔をして居たら、貴方腹を立つたでせう。」と、ものありさうな口吻する。

關は一寸口籠つたらしかつたが、直ぐに些と早言葉で返した。

「可怪いね、お前がこんな處に立つて居ようとは、思ひも掛けなかつたと言つたぢやないか。居るか居ないか、知りもしないものを、聲を掛けてくれないツて、何も腹を立つ譯はなからうと思ふ。」

「關さん。」

としめやかに婦が、

「水臭い。恚うした中ぢやありませんか。貴下だつて逢ひたいでせう、私だつて逢ひたいわ。其に何も隠立をするには當りません。見得も様子も昔の事よ。よう、關さん、貴下先刻から其の曲角を出たり入つたり、此の通りを隠れちや行つたり來たりして居たんだもの。お客に連れられた身體ですから、氣儘にもも言へないし、あ、寒いでせう、屋臺店でも構はない、二人で暖かい

ものでもと、然う思つて、貴下が其處を歩行く毎に、私や身體を刻まれるやうだつたわ。」

と袂を離して俯向く、と少時して、

「一言もない。我ながら餘りしみつたれた了簡で、お前に積られるのも恥かしいくらゐだが、何まさか、いくら逢ひたいッたつて、燈の點く時分から、若菜屋の前を迂路つくやうな狂人染みた眞似をしたんぢやない。些とばかり用があつてね、此の邊へ来た處が、何だか最う可笑しくらるさ。濠の獺が川筋へ出て居て魅むんぢやないかと思つた。無性に橋を渡つて此方へ来て見たくて堪らないもんだから、巻蓑でも買つて吸つて歸らうと思つて、横町へ入つた處が、先刻の、あの連の中にお前の姿が見えたらう。」

あゝ、久しく逢はない。何故か、又めつきり瘦せたやうに思はれたもんだから、……苦勞はお互に山ほどある。其は珍らしくはないけれども、然うでもない、何か急に心配事でも出来たんぢやないか、其とも又豫て煩つて居たんだのに、苦界の事だ、推して出たんぢやなからうか、と思つたり。

何、景氣よく燥いで通る處を見たんだと、こんなに愚痴らしくも成らなかつたんだが、酷く鬱いだやうな様子だつたんで、氣に成つて歸られない。其の中饅頭屋を捉まへて、皆が面白さうな高話、つい聞くとともになしに角店の廂の下に、眞個だよ、ぴつたり附いて小さく成つて立つて居た

がね、何だか遠くから、お前にだけは顔を見られて、外聞が悪い、見つともない、と目で言はれるやうに思はれるもんだから、靜として居られないで、迂路々々して、嘸、野良犬でも歩行いてるやうに見えたらう。お勝、いくら意氣地が無くつても、まさか慪うぢやなかつたけ。」

「否、よく迂路々々して下さいました。私に取つちや馬車で駈けて行く人より、どんなに嬉しいか知れません。ですが、貴下も寔れたわねえ。」

「何、氣の所爲だ。私は心が、ぼんやりだと見えて、氣苦勞するほどに瘦せはしない、お庇で身體は達者だよ。」

「でも何だか細りして。」

と密と背中袖を當てて、

「病上りのやうだわねえ。」

「そりや大丈夫だと云ふ事さ。嘘だと思ふなら、あの瓦斯燈の明へ行つて、薄髻の生えた顔でも見るが可い、さあ、行かう。」と出さうにする。

「まあ、待つて下さいよ。染々顔も見たいけれど、何方へ向いても八方塞り、明るい處へ出て行つちや別れるのが早くなる。まあ、密として居て下さい、話が澤山あるんだもの。」

「ねえ、關さん。」

「何の！ 態々明るみへ出て、こんな面が見せたからう、然もない事を業々しく言つて、實はお前の顔が見たいのだつた、お勝。」

と言つたが、急に黙つて、慌しく、

「泣いちゃ不可ん。往來で見つともない。」

九

「而して、母様の病氣は何うだい。」

お勝はうるんだ含み聲。

「え、難有う、悪い方ではないんですけれど、何うも不可くつて困ります。又昨日から寝たんですつて。」

「熱が出たのか。」

「はあ、風邪が抜け切れないのですよ。否ね、すっかりよく成るまで、寝て居られると可いんだけれど、親父が御存じの身體でせう。」

「困るなあ、中氣のやうぢや、長いから。」

「餘り酒が過ぎたから、だつて今更仕やうがない。」

と投げるやうなもの言ひで、

「ですから、母親も養生が仕切れないのよ。些と天窓が軽いと思ふと、直ぐに起きて働くんですもの、又直にぶり返すんです。晝間ね、七歳に成る末の妹が内へ来て、姉ちゃん、これこれだつて、他に便るものはなし、自分で氷嚢をいぢるんです、冷い手をして、私につかまつて言ふけれど。」

又聲を曇らせた。——男は固より無言なり。

「其の私が、矢張ぶら／＼して、二階に寝て居た處ですもの。幾度もあるこつたし、然う／＼我儘を言つて、又内へ看病にとも言ひかねる。其も賣盛つてでも居る時なら、些とや密と勝手な眞似もしますけれど、正月少し出たばかり、四五年引いて居てから以來、久しく止めて居たお酒に中毒つて、最う、しく／＼お腹が痛みどほし、何時かの晩も勿體ない、貴下に介抱をして貰つて、其で止まないさし込みですもの、薬くらゐで治りますか……不景氣な、土鍋でお粥の處でせう。」

網手紫
ですがね、些とでも稼がないでは、看病どころか、一寸見舞にも出難いんですから、無理に起きて、漸々髪を結つた處へ、門口から、今の方たちが、是非と言つて連出してね、茶番の心に入

れつて言ふのよ。

氣樂らしいとは思ひましたが、御褒美に、申しけれどお約束でもして頂いて看病に行かうと思つて、寒いのを我慢して、饅飩屋さんの連に成つて、お燗の手傳をする處、何ですかね、殆ど夢を見たやうだわ、急に其の饅飩屋さんの女房が亡くなつたつて、訃音に來たもんですから、身體があいて、貴方と話が出来のよ。

最うね、其の訃音に來たのがね、薄氣味の悪い女房で、私は慄然として爪先まで冷く成つて、聞さは聞し、こんな貴下寂しいんだもの、平時なら、あの人たちに附着いて駈出して行く處を、眞個に勝手だわね。」

と人目も月もない處、枕するやう、男の肩に頬を當てて、鬢の毛冷く莞爾した。

「貴下、全く怖かつてよ、でもね、恚うして逢へるから、むすぶのかみだと思つてさ、饅飩屋の女房にお念佛を唱へました。あゝ、新佛の媒妁でも可い、關さん夫婦に成りたいねえ。」

「話らん事を！ 新佛の媒妁ぢや此者も亡者にならなきや成らない。」

「亡者でも可いことよ。」

「飛んだ、お前は。」

「あゝ、死んでも可い。」

「これ、重いよ。」

「構はないことよ。」

「えゝ、倒れると云ふのに、な。」

「何だか、胸にたよりが無い、こんな身體は何うなるでせう。もう、持て餘す、然うかと思ふとスーと消えて行きさうよ、關さん、確乎抱いて頂戴。」

「大道です。」

と四邊を向す、ト婦は肩に額を伏せて、

「構はないわ。」

「馬鹿な、そんな我儘だから、病氣だと言ふ癖に、先刻も見えて居りや、茶碗酒で呷つ切を遣る、あれは何だよ。」

毒藥でも飲むやうで、見て居る方の胸が痛む。せめて使られる私の方に、もつと効性があれば可、然してお前が身體を壊して、尙ほ此の上に、兩親を何うするよ！ 其の様子ぢや、苦いの、まづいの何のと言つて、屹度又藥を飲むまい、誰の身體だ、お勝。」

「勝は病氣が治りました。關さんに逢つたんで、はい、最う甘えても、酒を飲んでも可うござんす。」

「然うか、病氣は治つたか。それぢや何も言ふ事はない。澤山大道の屋臺店で冷酒を呷るが可い。眞個だ。養生しろ、と叱るのは病氣を治す力のある醫者でなくつては成らんのだらう。罰利生があつてこそ、意見の利きめもあるものを——身體を案じたつて心配したつて、何の案じ効も、仕効もない、戀しい婦に遇ひたいつて、お茶屋へ呼ぶ才覚も出来ないで、餘所の男に連れられて行く後姿に、あとから跟いて來るやうな、厄作ものの日蔭ものの、銀行のしくじりなんぞ、何を言つたつて無駄な話だ。情人ぶつて、お勝さん、私は意見したのが恥かしい。」

婦は、かつと込上げる涙を忍んで、切なさうな吐息とともに、

「堪忍して下さいな、飲んだのは私が悪い。悪いけれど、貴下が其處に居るのを見たら、何だか胸が裂けるやうで、唇は燥く、唾は乾く、身體はがたく震へて來る、無理な酒でも飲まないで打倒れさうに成つたんですもの！ 關さん、眞個に此頃ぢや、誰方か、案じて下さると思ふから、いっぞやお約束をした通り、貴下と逢つた時ばかり、熱いのを一銚子だけ、半分づゝ飲むと極めて、外の時は些とも飲まないで居るんぢやありませんか。

ねえ、少い内は可かつたけれど、既二十五にも成つたもの。杯の綾がないと、殆で狐が離れた

やうで、そりや貴下、お座敷の勤め難いぢやない事よ。それでも熟と辛抱して、出來ない我慢をして居るのも、末を思へばこそなんだわ。些との事に角を立て、直きに貴下は腹を立てさ。婦は弱いものなのに、夜もおち／＼寝られないほど、逢ひたがつて居るものを、優しく言つて下さつては、貴下、男が棄るんですか。

何かと云ふと二言目には、意氣地がないの、効性が何うの、働きがないの、と仰有る！ 聞く身に成つて下さいな、卑下をなさる貴下より、親姊妹が困ればつて、何のお世話もしないで居る私の方が……そりや貴下にばかりぢやない、様子を知つてる朋輩衆にも、何のくらの肩身が狭いか知れません。

貴下こそ働きのない私のやうなものが對手で、どんなにか御迷惑でせう。私は其が望みなんです、効性のない、意氣地のない、お金子のないのに惚れました。はい、江戸兒は自棄にでも馬車や自動車に乗つたのは嫌ひです。堪忍して下さいなね。」

「悪かつた。」

と顔を上げて、
「いや、皆自分から僻むんだ。實は心配をしても、案じて、母様は、父様は、お前の身體は、と言ふ下から、あゝ、口ばかり、松の葉だけの見舞の印も、小遣も上げられないと思ふと、つい、

聞きかねるくらゐで居る。

なぞツて、言ふのが矢張お爲ごかし、しんせつごかしで、體の可い事を言つて、お前を怒うして引張つて饒舌つて居たいのかも分らない。

お勝、さあ、こんな事をして居る隙に、お座敷の分にして、一寸母様の病氣見舞に行つたら可からう、決して拗ねて言ふんぢやない。其の證據には其處等まで一所に行く……久しぶりで、ああ、假橋の方が情がある、なんのと言つて、二人で出雲橋が渡つて見たい。」

と立直つて、袖を搔込み、

「もうし、お厭でもございませうが。」と寂しく笑つた。

「参りませうかね、今の方たちは居ないけれど、何處かで一寸柳家へ電話を掛けて、座敷に居るつもりに含んで置いて貰ひますわ。」

「柳家だと、又、對手は私だと思はれやしないか、然うしたら悪からう。」

「否、貴下が久時に成つてから、柳家へ来るのは、今の、あの方たちですから可うござんす。」

「あの方たち、お前然う言へば、チョツ、亂暴な奴等ぢやないか。往來とも言はないで。お勝、お前が、板扉に押着けられて、白い手をばたくと藻搔いた時は、あゝ、私に働があつたら、と思つて、つい火のやうな涙が落ちた……口惜い、お前のやうでもない、突飛ばして遣れば可い。」

「否、近頃は氣が折れて、お客大事に思ひます。關さん、察して下さいな。……厭だわ、外套の袖があつちやあ、暗い處だけ、ね。」

十一

歩行き出したが、不圖男が、

「お前襟卷がないぢやないか。」

「あゝ、然うね。」と薄い肩をスウツと撫でる。

「何か、彼處に落ちてたのか、然うぢやないかい。」

「否、あれは手拭です。然う、先刻詰まらない眞似をする時、襟卷を取つて荷の上へ置いたつけ、鯺鮓屋が擔いで行つたんです、まあ、うっかりして、私つい。」

ほゝゝ、とひそめて一寸笑ふ。

「申戲ぢやない、寒さうだな。」

「寒いわねえ。寒があけたと云ふのに何うでせう、爪さきが切れさうよ。こんなぢやなかつたが、私や血の氣が少くなつたんでせうか知ら。」

「冷えちや悪いな、急がうよ。」

「厭ですよ。成るだけ静に、彼方へよつたり、此方へよつたり、酔つたやうに。」
「恚う不景氣ぢや、酔つたとは買つてくれまい。人が見たら腹が空いて、ひよろついていると思ふだらう。」

「何と思はれたつて構やしない。いつかのやうに義理のある座敷へ貫はれて、然うね、丁度此處等だつたわね、貴下が一足前へ出て、ふら／＼歸つて在らつしやるのを、背後から腕車で乗越しをした時は、あゝ、濟まないと思つてさ、

(失禮)

と突伏して、振落した簪より、私の身體が其のまんま、投出されれば、可いと思つた。其から見れば増ですわ。」

「しかし何しろ可い鹽梅に人通りが些ともない。」

「天道様のお情です、次手に、何うぞ、いつまでも暗うございますやうに。」

「天道はお情で、朧月もないけれど、燈明がありや仕方がない。」

「眞個に、瓦斯燈なんか點けなきや可いのに、憎らしい人達だよ。何處からか風が吹いて来て、私たちの行く前を、颯々吹消してくれば可い。」

「そんな風は無常の風だよ。向うの交番の燈まで一時に消えて御覽。そら／＼鯉鮎屋の女房が！」

「あゝ、れ。」

「見たが可い、臆病たかりが、暗やみが希望もないものだ。」

「ですがね、關さん、冥土つて云ふのは暗いんでせう。」

「當然さ。」

「最う私は、一層二人で冥土へ行きたい。邪魔な人目も煩雜い事がなくつて、どんなに嬉しいか知れやしない。」

「……………」

「而してお祖母さんにも逢へるんだもの。」

「お勝。」

「あい。」

「私は頃日妙な事を考へる。——恚うした處が、如何に考へても、金持にやなれず、夫婦にやなれず……其の成れないのを、何うにかしたいと考へるくらゐなら、一層の事、お前の其のお祖母さんに成りたいと思つて居るんだ。大層可愛がつてくれたつてな。柳家で、いつか、夜中に目を覺まして、明方まで話したつけ。」

「えゝ、可愛がつてくれましたとも。八歳の時に別れたけれど、最うしみ／＼忘れられませんか

ら、此の年に成るまで、何を缺いても、命日に、お墓詣だけはして居ます。」

「其の人が、負ぶをしたり、手を曳いたり、長唄の稽古に連れて行くのに、何故か、眞紅なふつくりとした紐を結んだ、小さな塗笠を——其が可愛い、と言つちや冠せて歩いたつて、——二重頤の眞白なのが、其の紐で、目の清しいのが、愛くるしいつちやなかつたらうと思はれるよ。」

「貴下、何ですな。」

「まあさ。」

「そりや可愛らしかつたんですつさ、但しお祖母さんにはでせうよ。」

「と其を聞いてから何故か知らん、寝て居る時も床の間に、お前の他に、可愛い其の八歳ばかりの人形がいたいに、恚う。」

と言つて、顔を向けて、婦の顔を一目見るや、

「それ顔に赤い紐が。」と言ふ。

時に瓦斯點けた軒の明が、眞白に二人にか、つた。

十二

「あ、泣いた臉が赤いんだ。」

と二人は熟と顔を見た。が、姿は颯と左右に分れて、眞中を二三人、衝と抜けて、振返つて其のまゝ通る。

と明の裾が一波打つて流すやうに、二人の身體を仄に推して二つめの夜の隈へ寢音もせず送り込む。

「關、關さん。」

「見つともない泣くなんて、何だ、大きな態をして。」

「大きな態でも八歳です。關さん、貴下がお祖母さんの事なんか言出すんだもの。私……」

「眞個だよ。爾の時までは一端、若茶屋の姉さんだと思ふから、お前に對して、恥も慮外も知つてたけれど、最う嬰兒のやうに可愛くなつて、一人で歩くと考へると、電車の路も憂慮で成らない。況して大勢の客あつかひ、擦られたり打たれたり、熱鐵を飲むやうな熱燗ぢや強ひられる。足袋跳足で勝手口から脱出した事さへあると言ふもの、藝者だ、と思ふから、よく振附けたと云ふものの、八歳の兒だと思つて御覽、お祖母さんが手を曳かないぢや、好きな稽古にだつて遣られはしない。お刺に此節ぢや、身體は弱し、寝て居るのは他人の中で、然も金子で縛つて置いて、手も足も伸ばされぬ主人の内だ。其處へ兩親が煩つて、七歳に成る妹が看病をするんだつて。」

氷いぢりした冷い指で、お前の瘦せた手を握つて、姉ちゃんつて泣いたかい。おい、お勝、私は他に望みはない、此の儘白髪にも成つ了へ、片時でもお祖母さんに成替つて、罪も報も何にも知らずに一度莞爾する顔が見たいな。

や、何うした。

「あ、痛々。」

「差込むか。」

「あつ！ あ、痛々。」

「困つたな、澤山悪いか。え、確乎しな、困つた。待て、腕車ぐるらは工面が出来る、我慢しなよ。」

「あ、貴下、何處へ。」

「腕車だよ。」

「待つて下さい、私は可厭です。別れられない、別れられない、死ぬほど好いた男でも親には代へられぬと思つたけれど、貴下の膝に突俯して思ふ存分泣かないぢや、私は今夜歸りません！ たとひ死目に逢はないでも一晩だけ別れない。今が、今何うと言つて變のある事もなし、否、否、貴下は何うでも私は肯かない、もし、柳屋へ行きませう。」

「又、我ま、を言つて困らせる。」

「だつて、我ま、も困るけれど、優しくして鬱ぐよりは苦勞がないだけ増だつて、いつかも言つたぢやありませんか。」

「言つたにしろ、事に因らね、お前考へて見ておくれ。借金も丁として、柳家へ顔を出せるやうならこんなに、しみつたれて居やしないよ！ 何處も彼處も、と言ふ内にも、分けて柳屋は鬼門ぢやないか。夫こそ二人にや牛頭馬頭だ、角も鐵棒も可恐しい。」

「關さん、私が承合ひました、御心配はございませぬ。」

と確乎言ふのも胸を惱んで、きつと壓す手が震へながら、

「何處か他へと思ひますけれど、今夜は柳家に居る分ですから、ひよつと電話でも懸つた時私が居ないと主人に悪い。」

これから行つて、濟みませんがね、一寸植込の處に待つて下さい。先へ一人で私が入つてお帳場へびつたりと兩手を支いて、指に頭をつけませう。

（おかみさん、御恩に被ます、關さんに逢はして下さい、後生です。）

ツて、頼みますわ。——悪かれと言つてぢやなからうけれど、貴下と云ふものがあるのを知つて、他のお客の言ふ事聞けつて、もう癢つちやありやしない。先方さまでも不機嫌だし、是非

と頼めば座敷だけは出るものの、それから此方、碌に口も利かないけれど、向うも名代のおかみさん、苦勞に心は弱つても、若茶屋の勝ですよ。私が手をつけて頼むんです、あんな人だけ分りも早い。

(あゝ、情死するならしても可い、内へあかすの室を拵へて土地の名物にして置かう、幾日でもお遊び。)

と屹と然う言つてくれるんですから、可愛が眞實なら、意地も我慢も忘れて下さい。よう、關さん、後生ですから。」

十二

二人が翌日の晩方まで居た、柳家の條は……省く。

十四

其の日、日が暮れてから、渠等の姿は、赤坂の圓通寺の門に見えた。婦は膝に袂を挟んで、緋子の帯を引掛けにしたらしく、其の端が、羽織の裾から地に敷くばかり、下に居て伏拜んで……男は立つて俯向いて。

後で知れたが、御寺は婦の家の菩提所で、昨夜話した、お勝の祖母の墓がある。けれども拜んだのは墓場ではなかつた、門の前から。然も此の邊は夜が早く、最う潜戸も閉つて居た。――

「祖母さん、然やうなら。」

すつと立狀に片手拜をして、お勝が、

「關さん、難有う。」と派手に言ふ。

「生憎だつたね、門が閉つて。最う些と早く出て来れば可かつたつけ。まあ、緩り拜んでおいでよ。」

「何時まで居たつて、祖母さんと貴下には、おなごりは盡きません。些との間でも離れるのが厭さに、眞暗に成るまで柳家に居たし、電車が二度まで停電をするんだもの。でも氣の利いた電車だよ。然う言や、車掌が好い男だつたわ、一寸貴下に似て居たよ。」

「丁度可い、早く歸つて、信號手の口でも探さうよ。」

「然うすりや私が、貴下の足許で轢殺されて、銀行や御養子先をしくじらせたやうに、又しくじらせて遣るから可い。」

とすん／＼前へ立つてさつさと行くのが、新橋へ歸る路でない。

「お勝、おい赤旗だ、お待ち、そつちへ行つては違ふ。」

「可いのよ、此方へ來らつしやいよ。まあ、最う少し歩行きませうよ。」
「馬鹿な。」と言ひながら誘はれて續くのが、圓通寺坂を上らないで、右へ入る、穴のやうな畦下の徑であつた。

「何の道、見附まで歩行くんぢやないか。」

「だつて其方は明るいわ。其に何うでせう、憎らしい、場末の癖に、木挽町邊の今時分より人通が多いんだもの、いけ好かない。」

「用のある人が通行しますさ。」

「ですから用のある方は、さつさと其方へ行らつしやいよ。私なんざ浮世に用のない身體だから、好で、此方へ参ります。何うぞ、もうお歸り下さい。然やうなら。」

とすん／＼行く。出がけに撫附けた毛筋も亂れぬ總髪の掬銀杓が、畦の薄と刈株と擦々で、路の奥から霜の筋をどんより辿る、道路安全と書いた瓦斯燈が、何處へ路するべをするやら。目も鼻もない冥土の蛇の群るやうに、土の崩れ目から、押覆さつた樹々の細根を、兩側詰めて照らし出すと、あのまゝ、肩掛もせず、餘寒に曝された襟脚の冷たさうなのが、頬を掠めて刃めく熊笹のばさつく中へ、消え残る雪かと思えて、樹の根が縊殺しも仕兼ねまい。闇がりへ入る姿は、次第に裾を消して、寂しい肩が臙に薄い。

男は二三間隔つまで、無言で、此方に突立つたが、爪先に倒れた破垣の竹の節を、がつしと踏んで追進つた。

「馬鹿な、女一人で行かれるものか、方角も知らないで。」

「知つてますよ、圓通寺様で御經があつて、それからお祖母さんを火葬場へ送つた路です。」

「お勝。」

「あい。」

「そんなに後を追ふのかい。」

「なまじつか、なまじつか、一日一夜一所に居たら、もう些との間も分れられない、關さん私は死にたいわ。」と翻然と向いて、ひつたり縋る、と胸を抱いて、はつと泣く。

「確乎しておくれ、痞かい、此の、帶の堅い物は、や、刃物でも持つちや來ないか。」

「否、それは、内の人へ體裁もあるし、年寄つたお師匠さんも樂にして待つてますから、晝頃貴下を待たして置いて、お稽古に駈出して行つて來た、……箱屋が持つて來たでせう、撥と本の袱紗包なの。」

「どんなにも働いて、其のかはり、無事に座敷だけで歸して貰ひたいと思へばこそ、此の年に成つてまで一中節の稽古もする。忘れまいためなれば、屈託のある貴下を傍へ置きながら、習つて来たのを暢氣らしい、黒髪の、何のつて、温習もしたんぢやありませんか。」

「最うそれなのに、此頃ぢや、端唄を聞くお客もない、さのさが濟めば口説くんです。振つて遣りや其つ切で、張合で来る意地もない、又他様を聞くんでせう。」

然う言や恩に被せがましい、貴下があるから、と言ふやうで、二言めにや引退る、私は綺麗に引退る、と關さんはおつしやるけれど、何の私たち藝者風情が、道も操も知りませんが、好いた男は一人切よ——たとひ手足を縛られても厭な奴には抱かれやしない。それとも貴下が足腰立ないで、ひもじい思ひをすると云ふなら、濱町の河岸へも立つけれど、親のためでも、主人へ義理でも、お客が取れるもんですか。」

ねえ、それだから、御覽なさい、數はあつても爲に成る人がなくては、月々にも困る處へ、此頃ぢや、ぶら／＼と煩ひ續きで、ついお茶屋にも疎遠に成ります。出が悪くつて遊んで居りや、そりや金子を借りた悲しさに、待合から時間を遅くかけて來ても厭だとは言へますまい。箱部屋へ箱が入りや、引越しかと言ふ希有な顔で、づんぐりむつくりした女中の奴が、

(姉さん、何うです。)

と突然言ひます。

(何が、何うなのよ。)

と笑つたのは初手の内、中頃ぢや、赫と成りましたが、今ぢや最う其を聞くと、わな／＼と震へるわ。不見轉を談じられて、震へるやうぢや、勝も婦が棄りました。象牙の撥にも恥かしい、關さん、私は何時までも暗い小路を出たくない、貴下死んで了ひたいわ。

「可哀相に。人間の罰も當れ、己も……」

と言ふ時、ぼつさり、頭の上の枝を鳴らして、夜鴉が、かあと啼いた。

「や、厭なものが入つて來た、お勝、駈け抜けようか。」と身を開いて言つた。

徑の口へ、朦朧と白張提灯、鴉の腹へ點灯したやうな色で、光もなく帷に映る。

「あ、新佛よ、關さん、媒灼人が出來ました。」

と嬉しさうに言ひながら、恐いか、後じさりに帷へ窺む、と男は外套の袖を開いて、背後へ庇つて、眞直に立つた。駈け抜ける隙もなく忽ち間近へ擔いで來たので。

ト藻屑のやうな臭が芬と、ひた／＼水を踏むらしい聲音を沈めて、煙のやうな影が前後に、さし荷ひも、さし荷ひ、唯二人切で擔いで、前へ立つたのが、白張を提げたばかりであるから、宛然闇夜を、人魂の縫ふが如く、早桶が歩行くと見える。

あ、通つた、と思ふと、何處かで、犬の遠吠がした。

爾時、どしん、と陰氣な響がしたと思ふと、白蓮花が碎けた風情に、早桶がはつと落ちる。

「不可え、やあ、不可え。」と一人が素頓興な聲を放つた。

つい鼻の前で、口早に二言三言交したが、棺の前の奴の形が消えて、白張ばかり残る、と同時に、すたくくと音を立て、舊來た坂下の方へ逸散に駈出した。

二人は避けるにも避けられず、其のまゝ、暗い方へ暗い方へと堅く成つて、よも、其の灯では映るまい、と思ふと、悪い。怒る男女は、月や燈には隠れても、冥土の提灯には明さまに照らされる。

しばらくすると、後棒に居た男の、尤も既に肩を外して、向う崖際に突立つて、路の中の早桶を瞻つて居たのが、不躰にも聲を掛けた。

「失禮ですが、一寸、失禮ですが。」と言ふ、柄にそぐはぬ言附。

紛ふべくもない處、關は猶豫つたが、返事をした。

「私……」

「や、失禮ですがね、卷莫のお持合せはありますまいか。友達が持つてた筈だが、御覽の通り、さし荷ひの繩が切れて、お刺に途中三度切れた。連も繋げないので、其處等の荒物屋まで才覺に

行つたんですがね、一人で何うも、早桶と睨めつこぢや遣切れない。

と呵々と笑ふは何者。

十六

「お持合せがあつたら、一本御布施に預りたい。こんな身體へ、お手渡しは恐縮だ。投げて下さい、投げて。」

と言つて、手をづいと出したが、間近だから能く分る。なんとか白く抜いた、半纏を上へ羽織つたが、合はない襟から漏れて、下に着たのは黒の羽織、紺博多の帯で、二枚襲ねた裾端折の足が白く、足袋跣足で、頬冠で居る異様な扮装。

呆氣に取られて、關は無袖を、無言でかさ／＼と搜して居たが、

「生憎持合せが、まあ、折角の。」

と狼狽へたやうに言つて、彼の人物の風采に對しても、餘り其が不本意だつたか

「お前は持たなかね。」と思はず言つて、はつとした。些との間も、後に庇つて、隠して置くべき婦を、何と。

するとお勝が、雉子が立つたやうに崖下からはらりと出て、

「まあ？」と言ふ。
件くだんの男をとこが一目見ひとめて、

「やあ！」と言つた。

「一寸、信樂しんがきさん、何なにうしたんです。」

と驚おどろいたも其そのの筈はず、昨夜ゆうべの一座いちざの連中れんちゆうで、こゝに居ゐるのは、黒くろい外ぐわ套たうだつた兄あにい哥いである。

「お勝かつ。」

と言いひかけ、關せきと見み較くらべ、

「姉ねえさん、變かはつた所ところだな。」

「貴あなた下くだ、まあ、而そして、ぢや、最もうお一人ひとりは。」

「先さき棒ぼうは三さん的てきよ。」

「驚おどろいたのねえ。」

とうつとりするやうに顔かほを見みたが、フト氣きがついて、

「然さうく、卷ま頁ははありませんが、これでお宜よろしくば。」

と御ご守しゆ殿でん持もちを帶おびの間あひだから、で、驚おどろき次ついで手に、口くち許もとを蒼あを白しろく、提ちやう灯ちんを覗のぞいて、吸すひつけた、三さん方ぽう

黄きん金ごんの女をんな持もち、吸すひ口くちを一いち寸すん向むかうへ、野のかげの畦あぜの遺や取とりりめく。

「召めし上あがつて下くださいいな。」

「令れい夫ふ人じんのお手てを頂いたぐ。」

と關せきに向むかつて莞くわん爾じとして、

「貴あなた下くだ方は？」

「いや、最もう。」と言いつたばかり、關せきは悄せう然ぜんとした。

「お祖母おばあさんの墓はかがあります、圓えん通つう寺じ様さまへお參まゐ詣りをしたんです。」

「は、は、似に合あひの御ご夫ふう婦ふ、お羨うらやしい、御ご奇き特とくですな。然さう言いや、姉ねえさん、御ご奇き特とく次ついで手に、お二ふた

人り揃そろつた處ところを見みせて、斷た念ねんのつくやうに、ドクトルに引いん導だうを渡わたしてやつてくれ給たまへ。今いま、直ちに此こ

處ところへ來きます。」

「矢や張はり御ご一いつ所しよなんですか。」

「勿ち論ろん手てがはり。其その處ところの見み附つけまでは、彼あいつ奴つが肩かたを入いれたんだがね、おでん屋やの店みせへ、景けい氣きづけに

駈かけ込こんで其そのから私わたしが擔かいで來きたんだ。」

「ぢや、菊きくさんも。」と緋ひのを、お勝かつが訊たねる。

「從い弟とこは一ひと足あし先さきへ行いつた、火くわ葬さう場ばの係かだよ。」

「係かりだの何なんのつて、まあ。」

と今更興覺め顔に、早桶の前を退つて、

「一體誰方のお葬禮なんですな。」

「是か。」とふつと煙管を吹いたが、突のめるやうに提灯へ煙管を入れた、其のまゝ早桶に清らかな瞳を流して、

「鱧鈍屋の女房だよ。」

「え。」

人目も忘れて、關の袂を緊乎と取り、

「御覽なさいな、媒妁人ですよ。」

「媒妁人」と聞答める。

「何、いえ、くだらない事ばかり申しまして困ります。」と關は切なげに笑つて言ふ。

「可いわ。信樂さん、何うせ、新佛の媒妁人でもなくつては、私たちは夫婦になれないと言ふんですよ。」

十七

「いや、お察し申す……が、關さん、と仰有るか、貴下聞いて下さい。姉さんもお聞き、現に似

たやうな話があるぜ。此の鱧鈍屋の女房だ。實は、無う言つちや可笑いけれど、洲崎の女郎で、私の情婦です。

二十四の年から三年通つた。

不思議なもので、さあ、怒うなると、誰が定めたと云ふでもないが、昔から掟通り、心は彌猛に逸つても、手も足も出なくなつて、戸外は蓑笠でも歩行かねば、人に顔は合はされません。

三年目の霜月の中頃だつたね、土地の可憐さに、木場あたりを當なしのぶら／＼歩行、犇と材木が並んだのが、世間を狭くした身體には、座敷牢の中を通るやうで、冷々と袷に浸込む。其の下から、小春日の庭前に、異な番傘の乾かしてあるのを見ると、雨も槍も降つて来い、彼奴一本肩に掛けて、素跣足で通はうものを、と直ぐに了簡が變るんだ。

尤も了簡は變つても、懷中が大丈夫、汝が素肌の皮財布で、袂にばら錢しかないのだし、歸途の車賃を一考に及ぶと、蔑簀張へ腰を掛けて、團子で澁茶も心許ない。

唯まあ橋錢の出ないのが天の助けで、縦横十文字に川筋をぶら／＼。ト蘆の間へ、晝の月で、水へ映る、眞珠の影を釣つて居る人が見える。

あ、深山溪流の趣あり、廊下を通ふ草履の音を、琴柱に滴る玉水の音とも聞いたつけ、と唐詩選のやうな述懐で、蛤町の中ほどへ、影も茫乎とか、つた時です。

「あゝ。」

と私の名を三聲ばかり呼續けて、背後からばた／＼と駈け寄つた婦がある。鬼界ヶ島だ場所が悪い、色仕懸けで、金子を借りた、大年増の新造の鬼かと、ぎよつと立悚んだが、然うぢやない。件の馴染のおいらん殿、此の早桶の佛だかね。いや、其の風が、白襟の紋着、紫の裾模様、此の春正月の出来で。部屋を引摺るから夜中には納るけれど、行年積つて二十七歳の婆さんが、緋の疋田鹿の子の長襦袢で、雲龍の織出し、埋立地から小手を翳して、品川沖へ白波を立てようと云ふ繻珍の帯。紅と淺葱と段々絞の扱帯を緊めて居ようぢやないかね。御殿のお小姓だか、雛妓だか、踊子だか、お祭屋臺の更科姫だか、見當が頓と附かん。但し美しい。辨天町から降つて来たやうな姿を、呆氣に取られて見て居ると、

「まあ、しばらく。」

と何にも言はずに、ほろ／＼と涙を流して、

「あれだけ裏窓から呼んだのに、聞きつけない振りをして、御覽なさい、こんなものを穿いて追掛けて来た。」

と言ふのが冷飯草履よ。

で、何でも寄つてくれ、親仁の内へ来たのだと云ふ。其親仁がです。——昨夜首を縊つたんだ、

と言つて、薄化粧した臉を泣腫して居るんぢやありませんか。

袂のぼらを投げ出して、六道銭は引受けた、と云ふ大度胸があれば知らず、剃身屋同士も寄合つたらう、内へ寄る處の騒ぎぢやない。

女郎の奴は世間知らずで、

「お前さんの手から線香一本、何よりの供養に成ります。こんな私の身を案じて、未だ目を開けて居るんです、成佛をさして遣つて下さい。」

と引つかまへた袖口を、夢中で、拂つて、一生懸命。

「お互に生命が大事だぞ。」

と言つて遁げたは何うです。

香奠の工面も出来ないから、其の後弗り。折も折、時も時、こんな處で出會したも、神佛の戒め、と私は震へながら生きて居たさね。

すると翌年の然も暮です。是非逢ひたい、と言ふ手紙が人傳てに届いて来た。尤も既う洲崎には居ない、素人に成りは成つたが、落籍されたのでも引いたのでなし、親仁が首を縊つてから、間もなく本人病氣に懸つて、半年ばかり煩らひ抜いたが、全治の見込みがない、と言ふので、主人が證文を卷いたつて事を其となく噂に聞いて、もとより行方は知れずに居ました。

「だから私は、婦は死んだものと思つて居たんで、手紙を受取つた時、幽霊に番地がある、と驚いた。

同一深川の場末ぢやあつたが、蛤町ではないんです。

おいらんが好物の、羊羹を、榮太樓で買つて出掛けた……いや見る影もなく成つて、母親と二人でね、丁度蜜柑箱で拵へた雛壇と言つた形で、天井裏にも押入にも、幾組が住んでる中に、膝から下は腰巻ばかり、紺の筒袖一枚、いぼ尻巻で、情ない事には、淺葱と紅の、其の段々の扱帯が影のやうに成つたのを締めて居ました。

何となく遠々しく成つて居たから、時候の挨拶一つ二つしたばかりで、

(態々おいで下すつたお志は忘れませんが、御覽の通りで、お坐んなさる處もない、其の内出世をしましたら改めて、又何うぞ。)

と言ふ。調子が變だと思つたが、柱から、障子の破から、古葛籠から、階子の隅から、手が出たり、足が出たり、幾つと云ふ數知れず、蠅の怨靈が取憑いたやうに、じろく視める始末でせう。

其實居堪りはしないんだ。お許しの出たのを僥倖にして摺下ると、

(お履物はお玄關)と瘦せて目ばかりの顔で莞爾した。しかし俤が残つて居ました。

と笑ひながら、店のやうな、其の薙を一枚上へあげて出してくれたが、ばつたり下して、首を出して頻に戸外を視めたつけ。

既う日が暮れて人顔が分らないと見ると、歩行き出した私の後を、四五間離れて、總後架のある路地口から出たらしい、通をとぼくと送つて来る。

と橋に掛つた、橋の袂へ、筒袖でひつたりついて、其つ切來ないから、此方は中頃まで渡つたけれども、何だか、氣懸りで、氣懸りで、うしろ髪を引かれるやうに、つかくと取つて返して、

(何か話があつたのかい。)

つて訊きますとね。

(一目顔が見たいばかり、他に何にもありません、御機嫌よう。)と俯向きました。

其ま、分れて歸られますか。加賀屋で飯を食はう、と誘ふと、装がこんなで、ツて見糞らしく手を鯉口へ引込める。あ、矢張り婦か、可哀相に、とふと胸は迫つたが、

(身體は舊のお辰ぢやないが、八文字踏んで入れ、信樂がついて居ら。しみつたれるな、江戸兒。)と此の脇の下で手を組んで、電燈の明い處で、店の正面へ突立つて、

(加賀屋々々、一番上等の座敷へ通せ、夫婦連れのお客だ。)と仁王立ちで怒鳴りつけた。婦が酔つて、

(あ、嬉しい。母様が欲しい云ふから、一分が鰻を頼みに来て、手がないうと断られた、此處へ来て、お庇で女中衆のお給仕で頂きました。

胸がすいた、氣が晴れました、實は餘りの身の上ですから、貴下の顔を一目見て、今にも死なうと思つてたんですが、些と浮世が戀しく成つた。女房にも妾にも情婦にもなれないお互だから、是ツ切斷念める、其の代り、私が死んだら今日の心を忘れないで、片方擔いで下さいませよ。)

(誓ふよ。)と杯を交したんだね。

(のたれ死をするまでも、其を力に生きて居ます。運があつたら金欄の襦袢でも着て見せませう)と快く別れたまゝ、何年にも逢はなかつた。一時、臺灣へ行つたと云ふ、風の便りもあつたんですがね、つい頃日です、何處か、三田邊で屋臺店を出すおでん屋の女房に成つて居ると聞きましたつけ。遊び半分通夜に行つて、死んだ饅頭屋の女房を、フト見ると其のお辰だ。

然も心魂に徹したのは、こんな野郎も男と思つて、信樂何某——と名宛して、骨を頼む、と云ふ遺書が枕の下にあつたぢやないか。關もお勝も身震した。

十九

信樂も聲が曇つて、

「人の情は此處なんです。婦と言や獸同様、男の玩弄物だ、と思つて居る御存じのドクトルもね、お勝さん、其を見た時は悚然としたよ。」

頼まれて恠う早桶を擔ぐ奴より、一言の約束に男を信じた、婦の心が頼母しい！ 嬉しくつて涙が出る。男の泣くは此處なんだ。」

と急にじつと首低れたが、

「思遣りのある方たち、拜んで遣つてくれ給へな。」
關は俯向いて物をも言はず。

「あ、似たやうなお身の上、前の世の姉妹であらうも知れない。お辰さんとか、寒さうねえ。

と死身に厭はぬ、羽織を取つて、お勝は、早桶の上へ翻然と置いた。情が染みたか柩を通つて、骨を包むか、薄煙、はつと線香の薫が立つた。

「兄哥、仕様がな此の體だ。」

と取つて返した三的は、又念入りな腹掛から股引まで、しつくりとした半纏着。向う顛卷引反

らして、腕に俱利伽羅紋々のほりものこそなければ、荒縄一束手にわがねた。片手に引張るやうにして来た、連は、と見れば、帽子の上から唐茄子冠りで、オウバアコト着た風か。おでんの竹の皮包をぶら下げて、片手に四合入のフラスコ罎、脊の抜群に高いのが左右に動いて来た體は、正に是ドクトル鱧七!

信樂が立迎へて、

「口説かれる娑婆が煩いと言つて、ソレ、其處に居るのが死にたいとよ。」

「や。」とじろりと二人を視める。

「新佛に魔が魅したぞ。」

と三的は吃驚して、早桶に掛けた羽織を覗く。

「偏に惚れて口説いたるのみ、敢て強ひたることなし、御兩人。」

と言つて、目を皿のやうにしながら、

「ウーム。」と仰反る。

「遅い、遅い、何をして居る。」と前途から、拾つた棒切を杖にして、地をかんと鳴らしながら、緋の羽織が脚絆穿で、すつと寄つたが、お勝を一目。

「驚いた、是だもの、皆がお練で遅い筈だ、一人で狼谷に居堪まれるかい、串戲ではない。」

「いや、串戲ではない、君たち。」

と信樂は、蟲乎と真中へ立直つて、

「數の少い江戸兒だ、確乎しないか。おい、若菜屋のお勝さん、緋子の帯を締直せ。貧乏や病氣を苦にして、弱音を出すたあ何事だい。親が困つて養へざあ、操を何うのと云ふ間に、腕の肉から裂いて遣れ! これ、三味線は武士の刀よ、象牙の撥は手裏劍だ。逃げる對手は縫留めて、絡はる奴は切倒せ。」

死骸の山を築いた上で、立腹でも切つた時、死骸は男が抱き緊めるんだ。お互に骨を拾ふ氣で、敵に向つて戦へさ、附着いて居るばかりが、色の戀のと言ふんぢやない。」

「お勝、しばらく分れるよ。」と關は顔を上げて屹と言つた。

「あ、死んだら骨を拾はうね。」と婦の聲は朗である。

「其處だ、豪い、又惚れた、關夫人。」

と言つてドクトルが、おでんと徳利を諸手に高く、熊笹の霜を散らして、樹の根の上へ振上げる。

「素敵々々。」と三は拍手。

「おい、荷ひは出来たか。」と信樂が提灯かけた繩を透かした。

「大丈夫。」と三的が棒を通す。

「今度は先棒で一伸伸すぞ。」と信樂が入交つて、

「相棒来ないか。」と言つた時、

「承知しました。」

と言ふが早い、關が其の風で棒に潜つた。

さすがに一同、是は、と言ふ。

お勝が嬉しさうに熟と見て、

「承知しましたは可笑いねえ。合點とか、何とか、關さん。」

「む、合點だ。」

「役者。」

と白張で、三的が聲を懸ける。

「お勝は一人ぢや歸られまい、菊さん、おいで。」と信樂が緋を見向いた。

「否、否、皆さんで、骨を拾つて下さるんでせう。」

「勿論。」

と應ずる下から、四邊を眺めて、

「ぢや可いことよ、狼に食はれても。」

と凛々しく言つて莞爾した。着流しの腰はきり、として、見送りながら伏拜む。紋の白梅ちら

ちらと羽織の移香を闇に残して、白い灯は動きはじめた。

一人で、圓通寺坂下へ出た時、突然頸筋を抱いた奴があつた。が、

「わつ。」

と叫んだも道理こそ。撥を逆手の腕の冴で、した、かに額を當たのである。

「人違ひでせう、私には附いて居ますよ。」

貸家一覽

一
 差配の古帽子が、提灯を點けて、のこく出て来た。

「大分騒がしいが何かね、路地口でわあくと言うとる小兒たちに聞くと……何か其の日暮前に、此の貸家を見に来た男が、其切出て来ないとか言ふが、眞個然うかね。」

「え、眞個ですとも、私あ未だ晩飯も食はねえんで、」

と職人風のが、腹掛なりに下腹をぐいと壓へて、

「仕事から歸り匆々、それッてんで、恚うやつて出て見たんですがね、なあ、お吉。」

と前垂かけで半纏着の女房を、頤で突つくが如くに一寸見る。

「夫でも心配をしましてね、お隣づから平次郎さんにも聲を掛けましたんでございます。」

「こりや、御差配様、御苦勞でござります。」

と平次郎は、皿が薄禿の天窓でお辭儀をして、

「私共ぢや、雑と住居を掃出して、神棚へお燈明をあげました處へ、これくだ、とお隣のが

お話しで、早速出ました。何うも些と變でござりますて、」

「ねえ、」

「然やうさ、」

背後の方で、長屋同士が言交はす。

「變な事は別にござせん。」

と差配は提灯の灯に滯い顔色。

「何も變な事のあらうわけはござせん。」

と聞えよがしに呟いた——私は傍聴しながら、略差配の不機嫌な意味を領いた。

時に恚く言へば、たとひ取極めはせぬまでも、知つて居ながら——頼まれて、貸家を探すのに

あやかしの憑いた家を兎に角見に行つただけも怪しからず思はれよう——實際都合が可ければ、

間に合はせて置かうと云ふ考であつた。

けれども此の貸家が、以前、私が知つて居た頃、三年四年空ツ切で、何うにも借手がつかない

で、殆ど立腐れの體で、界限では臺町の妖怪屋敷と噂した——一年の秋の夜に、古い大構の冠木

門が、暴風雨に倒れて、垣根ごと往來へ崩れた下へ、根ながら芭蕉を引挫いた、葉尖が、骸骨の

やうな木組の穴から裂けて出て、私を通ると、まだ激が留まぬ霧の中に、あけ方の朝風に、のた

打つて藻掻いて居たが、何うやら死切れずに黄色蛇の頭が煽つて居さうで、踏踏いでは通れずに、路を引返した事がある——其の頃の屋臺つきなら、頼まれた人のために、振向いても見るのではなかつたが、其の日、通りがかりに不圖氣がついた様子が、全然、がらりと違ふ。其の門など跡方なし、廣くはないが、見通しの路地に成つて、路地口兩方とも長屋が出来た。突當りに新しい木戸が見えて、其を入つた中に、新築の二階家。見た處で、最う暮方ではあつたが、其の左の角の長屋の羽目に、木の貸家札、向うの木戸にも白く斜めに貼つてあり。

先づ誂への二階家、立寄つて讀んだ處では、疊建具、水道つき、これで庭があると申分はないが、書出さない様子では些と怪しい。が、何か勞力惜みをするやうでもあり、恩に被せがましく心苦しいけれども、實は此の四五日探し飽倦んだ。

處へ先方は急ぐ、と云ふ。折角の頼みを、土地に居ながら、唯未だ見附らない、とばかりでは餘りに本意なし、然うかとして、二階家とある註文を、身勝手に階子をひいて、平屋も如何で、眞個途方に暮れた折から、見附つたのが、此の貸家で、札の表の、間取の都合も悪くない。これなら、兎に角、知らして遣れよう。……最う暗かつたけれども……

二

構はず、隣寸を摺つてなり、雜と見た上で、と思ふ。路地口に小兒が四五人、夕月の影もないのに、子を捉ろ子捉ろするが如く飛び廻る、路地の中も又人集り。女まじりに長屋の衆が立會つて喧々する——あとで名が知れた、其の平次郎も居たが、井戸端會議の崩れる頃と、些とも猶豫はないで、私はつかつかと入つた。

長屋は恚う建續いて、見違へるばかり開けたけれど、臺町も最う裾で、茗荷谷の水溜り、前の古屋敷の圍内とて、其の頃木槿垣の本の露、末の雫の點滴絶えず、窓を覗いた葎のなごり、刈萱の雨も乾かずや、濕地に敷詰めた石炭屑を、ざくざくと踏む下駄の跡から、落葉が出さうにじとじととして、きらりと黒く光る。

其の路地が且つ狭い。貸家の木戸へ打つかるのに、人を分けずには通れなかつた。

「御免なさいよ。貸家は突當りのでせうね。」

と聲を懸けると、其ま、眞中を開いたから、直ぐに間を抜けようとする、瞬間、寂寞した。時に、一人が、顛のうすい平次郎。

「一寸、もし家を御覽なさるには、最う暗うございますぜ。」と云つた。

私は何の氣なしに、振返つて、

「少々急ぎますので、間取だけでも見たいと思ふんですが、何うでせう、晩方で御迷惑か知ら。」

「何、旦那、此方人等迷惑も何もあつたものぢやありませんがね、まあ、お待ちなさいまし、些と其の變ちきなんで、」

と頸をすくめて、職人が言ふと、女房が一寸衣紋を繕ひながら、

「唯今、其の事で、皆が然う申して居ります處でございませうがね、先刻、其の何なんでございま

すよ、……まだ貴下、日のある中でございまして。旦那のやうな、矢張お勤人らしい若い方が、

一人、お入んなすつたんですが、まあ、何う遊ばしたんだか、其ツ切、いまだに出ておいでなさ

いけません。尤もね、何時の間にか、お歸りなすつたのを、見落したらうと言へば其まででござい

ますけれど、毎々をかしな事ばかりですから、今日は貴下、起居に氣をつけて見張つて居たんで

ございますから、

「をかしな事つて、おかみさん、……此の家は怪いのかね。」

と私は引返して中へ交つた。

「大な聲をなすつては不可ません。」と平次郎が路地口を透かして言ふ。

職人は腕を組んで、

「差配がむくれませう。へ……それでなくつてさへ、家賃の取立が嚴いのを遺恨に思つて、此方人

等で、けちを付けるんだ、と悪推をしますからね。早い話がお前さん……なんだつて彌次馬に

飛出して、恚う騒いでる連中に、二つなり三つなり滞つて居ねえのは一人もねえんで。え、希

代なもんです。きちん丁と店賃を入れるやうな奴は、カタリとも言はねえで澄まして居ませう。茶

ツ葉のお汁、鹽引の鮭で、ひっそりして飯を食つたら、ねえ、平さん。」

「私どもも、矢張其れぢや、滞る分ですか。」と平次郎は天窓を壓へた。

職人が、ぐつと參つて、

「まあさ、ものの道理でさ。」

「お氣をつけなさいよ、お前さん、何て口を利くんだらう、」

と女房が横目で睨む、と平次郎はクスリと笑つて、

「三月四月は袖でも祕す、尤もこれ腹帯でね、人相に露れて居ます。決して御遠慮には及びませ

ん。」

と人の好きさうな中親仁。職人は色を直して、

「何しろ、私あ、それ、恥を言はなきや理が聞えねえと思つたんで、ねえ、旦那。」

人、何が理なもんかね。」

と女房は羨めながら、私の方へ向直つた。

「ですが、貴下、眞個でございますよ。」

と言ふ、貸家の門を、密と窺つたものがある、ト其の肩越に負はれかゝつて、齊しく覗込んだのが、すたくと逃げて歸る。

三

此の徒の言ふのを聞くと、此處へ、二階家を新築してから以來、未だ住着いたものは一人もない。のみならず、日に幾人ともなく見に来る、唯つい通りにひやかして歸る分には、何事も起らぬ。が、何うやら氣に合つて、話が取極らうとする輩と來ると、必ずともに無事では濟まぬ。大した怪我はしないまでも、階子段から送り落ちる、二階の窓から見霽を覗いて、首が挟つて動けなかつたり、戸まどひをしたり、不意にぱたぱたと襖がはづれる、はづかりの戸が、ギイといひとりで開く。……何處の釘へ引掛つたか……装おろらしい縮緬の羽織が裏搔くまで、すつかり裂けて、ベソを搔いて歸つた圓鬚の婦人も現に女房が見たと言ふ。

「私知つてるのは洋服を着た、立派な旦那衆でございすがね、ピンと髭の生えた。其の方が、入つて大分ゆつくり見て、歸りに格子戸を出るが否や、唐突に大な聲で、謠を唄ひ出した。で、

路地を出て通へかゝつて、すつと其の遠吠の響いたのは何うでございませう。こいらも考へて見れば變ぢやございせんか。」

と平次郎が低聲で饒舌る。

「まだ〜數へ立てをすれば切はないんでございますよ。——何でも初中出入りの人を見て居ますから、此の人は氣があるか、何うか、大概風附で知れますからね。今申しました、先刻の方も、何うやら思召がおあんなさりさうな御様子ですから、おやく〜おや、さあ又、始まりさうだ、と氣を付けて居りますと、御覽なさいまし、今以て出て來ないぢやありませんか。追つけ五六時間に成りますもの。何が何だつて、皆が氣がかりでございますわ。旦那もね、それですからお見合せなさいまし。」

と女房のまめだつ尾につき、

「何うでも御覽なさるなら、明日眞晝間が可うがすよ。」

と職人も眞面目で言ふ。

「黙つて〜。」

と平次郎が傍から袂を曳いた。

「差配が來ました。」

「おつと、危え。」

「旦那、何にもお聞きなさらぬ分願ひますよ。然うでなくつてさへ、長屋中でケチをつけるなんてひがむんですから。」……

處へ提灯が割込んだのである。と同じ古帽子でも館屋のとは違つて、小兒たちには禁物で、兜と見える。遁際の鯨波の聲わつと言つて、路地口を散つて了つた。

で、二言三言、店子たちと言を交へた後が、

「變な事はござせん。」

と苦つて、ござりと音する板のやうな茶の外套の袖ながら、四ツ目の紋の提灯を向うへ上げて、廂のあたりで、二階家の木戸を透して、

「寢ても居るのだらう、厄介な。」

「へえ、寢て居りや軒が聞えさうなもんでせ。と職人が頭を振る。

「蟒蛇ぢやあるまいし、と暗い所で誰かが呟く。

其聲をじろくと、睨むが如く胸しながら、

「其で何かね、まだ誰も入つては見なさらんのかね。」

「其處でございまして、へい、御覽の通り、路地は未だ薄明りで、足許が分りますですが、家の

内は眞暗で、おまけに空屋でございまして、閉込んでございませう。づか／＼入りましても黒白は付きません。處へ、恚う揃ひましても、提灯と云ふ要害はなし、裸火や洋燈では、前方が尋常なりません内で、時々ぐら／＼と來ますから、悪く粗相でもいたしますと大事だと存じまして。」

と平次郎が揉手で言つた。

「詰らん事を言はつしやい。經師屋さんはい、年をしながら、」

と又しても、差配は苦つて、

「建てて半年にも成らねえ家が、大風が吹けばとて、ぐら／＼して堪るか。」

「え、ぐら／＼しねえまでも、何ですぜ、盗人や狂人が遁籠つた譯ではねえんで、私どもだつて棒ちぎりで威勢よく躍込むつて法にや行かず、然うかつて、これが、差配様の前ですけれども、素手ぢや危え……てつたやうな。」と職人はあとを口籠つた。

「何が危い、釣天井があらうぢやなしよ。」

と差配様は八方睨みで、提灯をぐるりと廻すと、四ツ目の紋が、素早く環に成る……怪い邸を控へただけに、一ツ目小僧の躍るが如し。

「危えものか、私が見届ける、何、馬鹿な。」

と奮然たる態度で、差配は兩脇を張つて、弓杖を支いた體、提灯を掴んだ勢。但し小男の、外輪に威張つて踏張るほど、腰附が妙に浮いて、ひよこくと木戸に向ふと、これは一枚戸が右へ引いたまゝ、入つた切り出ないと言ふのが開けた切か、其とも長屋の連中が、覗くために其處までは手を掛けたか……閉めずにある。

と差配の古帽子は、蝙蝠のやうに低く潜つて、先づ木戸の中へ一騎駈。

までは可かつた。さて二の木戸へ懸らうとして、猶豫つて振返ると、職人、女房、平次郎をはじめ、一人も二番手が續かないで、いづれも木戸へ附着いて、眞黒にかたまつて、三面六臂で覗く。差配を除けて路地口へ退散した臆病ものまで、故と此處までは引返した癖に、片足も踏込まぬ。

這奴、續けや、ものども、と言ひたさうな目色で、じろくと行つたが、天窓ばかりが振々動いて、どの足腰も据つて居る。

「然うだ〜、」

と差配は木戸の中で一つ廻つた。

「仕立屋の内は、つい目と鼻の間だ、屹と様子を知つて居らう。」

と獨言をする。

「お美嘉さんの許で、些とも沙汰がないぢやないかね。」

「然うさね、變がありや一番に知れるのは、其處だ。」

此方で平次と女房が言ふ中に、差配は又ひよこくと二足ばかり、目ざす二階家の入口ならず、横に向つて、幽に灯のさす戸口がある、——其處へ立向つて、石炭屑を、ざくりと踏占め、

「阿媽や、阿媽や。」

木戸連も袖を引合つて、目を見合せた、と云ふのは……返事がない、精進日でも孀婦でも、恚う宵の口は寝ない筈。

「おい、阿媽、寝たのかい。」

まさか、敲くでもないから、手を掛ける次手に、格子戸をかたりと言はせる。

しばらくすると、怯えたやうな陰氣な聲で、

「誰方様でございます。」と妙に愛想のない切口上……尤も突慳貪に言つたのではないらしい。寂しく減入つて、枯木の尖つた鹽梅、花も實もないのであつた。

「私だよ、阿媽よ、佐々木源兵衛だよ。」

と差配は提灯を差上げて此處で名告る。紋の四ツ目に著しいが、何うやら梶原と言ひさうな親

仁が。

「……差配様でございますかね」とがたく音をさせて出て来た様子で、やがて静に格子を開けた。

と差配は提灯を下げたし、住居の灯は背中なり、影法師が立つた體で、此方から顔は見えぬが、束ね髪の老けた婦。

「まあ、差配様」と漸と人らしい聲に聞える。

「寝たのかい、最う。」

「否、何ういたしまして、それ處ではございせん。まあ、お上り遊ばして。」

「や、何、然うはして居られん。早速だがね、私が許の此の貸家だ。」

「は、はい」と、何故か急込む。

「お前さん許からは、坐つて居て此家の縁側へ手が届く。一つ家も同然で、すつかり様子が分るだらうが、日暮前、まだ早かつたさうぢや、書生風の男が見に入つて、其つ切出ないと云ふが、何うだらう、眞個内中に居さうだらうか。」

「え、」

と驚いたらしい風で、

「お入んなすつた切、お出なさらないのでございませうかね。」

「たと言ふ話で、見に来た處よ。」

「あれまあ厭でございますねえ、何ですか、私どもでも暮合から、をかきな貴方、氣味の悪いことばかりでございすものですから。」

これを聞くと、差配が、ギョツと參つたか、何にも言はぬに、誰かドンと突込んだらしく、木戸口の女房つと入つて、差配の横合、戸袋の處から、

「姨さん」と大な聲。

「ひえ、」

と姨さんは又怯かされる。

五

「お美嘉さんは何うなさいました。」

と聞く。女房の此の二の句で、姨さんは落着いたらしい。

「おや、今晚は。否ね。あの娘が其の、何うも飛んだ恐しい事を見ましたので、最う貴方、夜具を被つて小さく成つて震へて居ります。私は枕頭で、お念佛を唱へて居りました處でございす

よ。はい、何うもね、おかみさん、未だ震へが留りません。」

「おやく、そりや、まあ、まあ皆さん、お美嘉さんが……」と聲を出す。

「何だ、何だ、」

「何うなすつた。」

と之を機に、四五人どやくと込入つて、半纏の裾、羽織の袂が、差配の提灯を押取巻く。……

……姉さんの聲は大分調子が治つて、

「何うと申しましてね、貴下がたへお話をいたしますほどの事でもございませぬ。言はば、まあ取留めが無いのでございませぬがね。實は何でございませぬよ。晩方ね、貴方あの娘に留守をさせまして、私が一人でお湯に參つたのでございまして——何も今日に限つて蟲が知らせましたと言ふほどの事でもございませぬまいけれど、お隣の空家が氣味が悪いと申しまして、」と又さし合を言つた。

が、最う我を折つて差配は黙然。

「一人で留守をするのを厭がります。馬鹿なことをお言ひなつて、私がたしなめまして、まあ、出掛けましてございませぬが、然うでもない、まだ暮合に燈を点けます、洋燈に粗相でもあつては、と氣になりますので、糠袋を濯ぎもしないで、急いで歸つて来る、と何うでございませぬ。」

此の貴方、框の處へ摺出したやうに成つて、突臥して居るぢやございませぬか。丁ど雛兒が巢から落ちましたやうな形でさ、厭ぢやありませんかね、私は暗がりながら跨がうといたしました。まるで何時かの雷様の時のやうな様子でせう。まあ、何うしたんだねつて慌てて聞きましたら、煙草盆が、煙草盆が、とわな／＼します。何だえ、煙草盆を穿いて轉んだつて言ふのかい……否、煙草盆がひとりで歩行してお庭へ出ました。……

美嘉や確乎しておくれよ、と其から温湯なんか飲ませまして、漸と落着かせて聞かしてございませぬがね。——矢張其の家を見に、お隣へ入らした方でございませぬよ。」

「ふん、何うしたな。」と差配の息ははずんで聞えた。
「私どもでは明り取りに成ります、庭の、あの、向うの縁側の處へお躰みなすつて、

(やあ、よく出来た、これは不思議だ。)つてお言ひなさるんでございませぬ。……娘はお誂へものの小袖の裾をくけて居る處でございませぬ。——御串戯に、仕立物をお賞めなさるんだ、と思つて、極が悪いから、顔を背向けて暗い方を向きましたさうですが、(村へ何里あるか分らない、こりや大變な山奥だ。お、／＼雲が湧く、霧がかゝる、)つてお言ひなさる……何うも獨言のやうでございませぬ……」

「狂人かね。」

「然うか、狂人か。」

と口々に言ふのであつた。

「否ね、娘も大方然うだらう、と思ひましたつて、其でね、貴方、

と此の時下駄を穿いて出て、格子へ立つた。

「仕切の袖垣から、透かして見よう、どんな人だか、と思ひました。まだ其の隙もなかつたと申します。此方に向いたなりで、次の長火鉢の處を見て居ました、其處に炭取と並べてあります、煙草盆……極く粗末なんでしょうがね、其が貴方ね、スーツと僇う……釣縄で引張るやうに、疊の上をするくと曳摺られて、娘が前掛に引付けて坐つて居ります、篋附板の前へ、すつと來て、何の音もしないで、袖垣をするかと思ふと、泡のやうに消えたんでございませう。——慄然として貴方、ぐるぐる巻にしめつけられましたやうに、膝も胸も固くなりました。……からくと鈴がひとりり鳴つて、蝗が飛びますやうに、鉄が板の上を落ちると一所に、物尺が一つ立つて、ぱつたり倒れる。出來かけの小袖がすらりと摺つて、袂を開いて、袖口を巻きましてね、裾をびつたりと搔込んで、何の事はありません、其の縞柄で、手を支いてお辭儀をするやうな形になりますと言ふと、篋附板が、ふうはりと疊を離れて上りました。」

六

それを、事實だ、とすると、娘が唯突俯したくらくらで濟んだのは、寧ろ僥倖であらうと、私思つた。

で、姨さんの言ふ處に因ると、娘の話を聞いたが半信半疑で、早速あかりを點ける、手が震へる、そはくとツちて、點けては消し、點けては消した。其の灯で明取を見れば、袖垣をはづれた、別に飛石もないが小庭の濡地に、件の煙草盆が、ト灰吹がスポンと眞直に、氣もない風に据つて居る。縁側もない長屋の、疊から直ぐの兩戸の、其の敷居へ片端懸つて、其の篋附板が、矢張小庭へ、丸木橋が落ちたやうに斜違ひ!

いや、最う、取入れる方角もなしに、急いで、ばたく雨戸を閉めて、預りものの小袖は、と氣遣つて見ると、此の分は娘が話したほどではなかつた。幸ひ婦が手を支いたと言ふまでの形でもないから、急いで袖疊みにして、藏ふ處へ。さあ、引窓をしめる、水口の鎖を下ろす、門口だけ、便になる人もあらば、訪寄つて欲さに、まだ閉めないが、其でも最う榮螺の底へ閉籠つて、七輪の風を聞く心地。娘が引被つた夜具の枕頭に、カン／＼洋燈の心を出して……其の、お念佛だつた、と話す。

「ふん、」と差配は言つた切。

一同も顔を見合せた……

「貴方が御差配で在らつしやいますか。」

と私は其處へ割つて出た。而して、貸家を見に來たものが、不思議な話に、つい立停まつた次第を告げて、

「如何でせう、其の提灯をお貸し下さいませんか。間取りの都合を拜見して、大概なら、何、何」と、其のぐつと力を入れて、

「取極めて頂きます。次手に様子をませうぢやありませんか。」

と事もなげに莞爾笑ふと、何と思ふか、差配様もむづかしい皺の中でニヤリとした。

「折角來たものですから、御承知下さいまし。」

差配は、かさ／＼と身じろぎしたが、件の外套の袖を兩方へボンと開いて、古帽子を引ちぎるやうにながぐり取る……皮ごと引捲つたか、と思ふ附着き加減、此の親仁が人に逢つて帽子を脱ぐのは、一生に算へるほどよりあるまいと思ふほど、太い眉毛に黒く塗りついて居たのに……

「一つ御研究を願ひますかな。」と慇懃に言つた。

私は聊か恐縮した。が、さて洋服は着ようもの。

「では、お提灯を。」

「さ、さ、御遠慮なくお持ち下さい。女ばかりで、何か怯えて居ます、氣の毒千萬な。此の阿媽の處に、先づ話しながら一つな、蕎麥でも取つて待つて居ますで、御覽濟の上は様子を何うぞ、え、」

とぶよ／＼した外套の胸を張つて、向直つて、

「いや、誰方も御苦勞な、皆引取つて貰はうかね、町から見てもぢや、何か事ありさうで外聞もようない。とんと小火でもあつたやうな騒動。兎角碌な事は言觸さぬものだから、尙ほ此の上に、然うでもない變な噂でも立てられると迷惑をします。源兵衛迷惑ぢや。」

と柄のない大音聲で、じろ／＼と睨廻すと、平四眞先の後退りで、尻から、もそ／＼と木戸を抜ける。續いて四五人ぞろ／＼と人影を吐出した。其の後を、大手を擴げて、差配が手に、からり、と鎖す。

私は衝と二階家の門を入つた。濕つぽいが、冴えた、新しい、木の香が芬とした時、姨さんの格子戸が、ごろ／＼と閉る音……ふと氣の所爲か、心細いまで、遙かに聞えた、雨に隣が隔つたやう。

然う言へば宵暗の、あの空あひ、此の途端に降つては来ないが、高い屋根から、壁、柱へかけ、幽ながら、颯とか、つて来た氣勢がした。私はさすがに猶豫つた。提灯を翳すと、框の障子へ燦と朱色に映る。棧が眞新しく、貼つた紙が薄りと黒んで居るから。がさ／＼と足に絡つたのは、鋸屑で、下駄をすくつて、下から浮かせ状に持上げられるやうなのを、ぐい、と踏脱いで、どんと上つた。先刻入つたと言ふが、開けたまゝか、此の障子も、門の戸も開いて居たのである。

七

上り端は、細長い六疊で、新しい疊が、人は住まぬけれども、月を経たので、眞白な埃に成つて、銀色に朧々、處々けばが立つ。正面が二枚の襖で、其の押入である事は、これも一枚開いて居たので直ぐに知れた。横に三尺の、上下を仕切つて、下が扉の板戸に成つて、上が、細い木格子の障子の戸。

向つて左が、ずらりと並んだ四枚、白茶けた壁のやうな同じく襖で、其の正面の二枚も又寸分違はぬ模様であるから、悪く明るくつて霽の中へ入つたやうな、……其處へ入りたてに、其の四枚の襖の、手近な端の一枚、颯と開けて見ると、三疊で女中部屋にあてたらしい。縁なしながら、疊はこれも新しい。向うの破障子の外は、臺所と領かれた、——此の勝手口は、玄關の戸と並んで居る事に成る。

尤も其處等に、人の居さうな氣勢はなかつた。

すつと閉めて、此から奥へ、と立直る、と障子が一幅眞赤になつて、火柱のやうに忽然と顯れた。建具が不意に血に染つて駈込んだのか、と思つたが、然うでない。右の方が其の障子で、同じく一枚、開いて居る……其處へ、隣家から燈がさしたので……燈も、洋燈の、ぬい、とした火屋のまゝ、差配の顔と袖垣の上へ並んで出て居た。其の灯に近い、澁色の苦い顔が、それ、言はぬことではない、人の内で帽子を被つて居る。

其處は姨さんの許の明取で、覗くと、ばあ、と言ふほど近い。庭と言ふのも、疊を縦に四疊ばかり、手を伸ばすと、此方の手が、其古帽子の庇に届く。

此處で差配の顔を見たのは、娑婆以來と云ふ氣がする。

「ありましたか、」

「居ますかい。」

と同じ時一所に低聲で云つた。差配の尋ねた意味は言ふまでもなく分る。此方は煙草盆と篋板を聞いたのである。其の雨戸、此の小庭、娘が裁縫をした處も略知れる。袖垣も低いから、坐つ

て居ても、帯の結目あたりまでは、此處から見えよう。

差配は、逸疾く其の意を得たか、押潰されたほど小さな聲して、

「ありました、其處にな。其の、」

と言かけて、何故か、差出して見せさうな洋燈を、ついと引いて暗い庭を尙眞暗にした。が、灯を引く拍子に、水があるか、きらりと波のやうなものが淡い庭の中で光った。

私も思はず、同じやうに提灯を引込めた。

「右二品とも、私が今取込んで遣りましたがな……」

「閉めて下さいよう、後生ですから、閉めて、」

と、うら若い、美しい聲ながら、絞るやうに急込んで、次室から呼ぶ。

「お、閉める。閉める。……ではな、御緩り御研究下さるやうに。」

で、がらりと雨戸を繰り出すと、絲のやうな灯になりつゝ、亂れかゝつて、ちぎれて隠れた。

……

さて些と心細い。愁、娑婆馴染の顔を見たので、少なからず里心がついたが、

「こりや不可ん、馬鹿な、まだ疊をもの三枚とは踏んで見ない。」

一時に六疊、ぼさ／＼と歩行いて、向うの角へ、此處が又細目ながら、人の入るだけ開いて居

た。些と煩いけれども、今言つた其の四枚の襖の端なのである。

及腰ながら、一寸覗くと、向うは壁で、……間が窮屈な廊下と見える、二階へ通ふ歩みらしい。

然うすると、片端が女中部屋で、眞中の二枚が押入れに成つて居よう、——確か二階は二間とあ

つた——部屋数の少い割に、押入れの誂は、住める都合。

と満更見に入つた目的を忘れもしないで、心づもりに積りながら、いで、二階を、と襖につい

て頭を上げたが、些と頭が重い。

狂人だと危険だし、死んだものとする、其の死態が氣にかゝる。私は實は、誰かが此の貸家

へ入つて自殺をしたのではあるまいか、多分、と初から思つたのである。

八

此時に成つて、はじめて挺でも動けまい差配は固より、血氣壯な職人徒まで、空屋へ入るのを阻んだわけが思當つた。先刻のほどは、餘り物々しくて、渠等が心から恐れるのか、何うか、聊か疑はぬでもなかつた處。

で、一層疊屋が歸るやうな顔色して、此なり提灯を提げて出ようか、と考へたけれど、何うやら、其だと、却つて魅まれたらしい氣がして成らぬ。……まゝよ、駈上つて、飛下りろ！

泡を吹いて睨まば睨め、兎に角、二階を見よう、と肩を聳やかして、畝り込む如く、襖の細目
なのを其まゝ、狭い廊下へぐい、と潜る。

又濕つぽい木の薫！ 煤ではあるまい、眞暗なものが、むら／＼と頭を壓して、壁の匂が泥の
やう。踵も冷たし、ヒヤリとする。何處も火の氣のない驗か、蠟燭の火に、片手ばかり、赫とほ
てつた。

天窓の上で、……

「うゝ、」と唸る。

はつと思つて、立竈んだ時であつた。

「うゝ、うゝ、……暮れてこそ里路の家は知られけれ、片山陰の窓の灯……か——然うだつ……
……」

と勢込んで、どんと足を踏んだ音がした。凄じく耳に響いて、天井を打抜いたか、とぐら／＼
と體が震へた。

襖の所へ身を返して、恚う灯を膝へ取つて、上を透かすと、暗い天井が仄に見える——直ちに
其處が階子段で、又其の段の急な事、恰も階子を突立てたやうで、新しい角が鋭く、石を切立て
たか、とばかり不思議に唸しい。

それだけに、又數も細かに刻んであつた。と見ると、凡そ上り口までに三十四五段、家中眞黒
な烏羽玉の黒髪に、偉大なる黄楊の櫛を斜にさした趣がある。

ト其の八分目ばかりの處に、梟が留つた形で、圓く成つて、蹲み込んだ男が居た。が、下から
現下見上げた時、仰向けに背中を段に、片足を踏伸ばした、と思ふと、兩傍の壁を左右の手で引
摺んで、胸と腰で尺を取つて、するりと一段、蹠を離して下りる……

「斷崖絶壁だぞ、こりや、恐しい崖だ。危い、はあ、何うも……何て急なんだらう、——さあ、
殺すなら、殺せ。」

私は思はず摺下つた。

「や、灯が隠れた、ぢや、星だつたかな。谷、谷底に星は變だ。うむ、矢張燈だ。うゝ、孤家の
窓の燈……あゝ、又見える……難有い。」

私は遁構をしながら、提灯を長く、手の伸びるだけ差出す。

「お痛々々、ちよつ茨だ、何うも身體ア寸々だ。——あゝ、足懸がない、さあ、弱つた、最う腕
が切れる、蔓が切れる、あつ、」

と叫ぶと、四五段目まで漸との事で下りたのが、手足も胴も疊まれたやうに、どた／＼とのめ
すり落つるや、